

二〇一四年度

吉屋信子論

指導教授 山口政幸先生

研究科 文学研究科

専攻 日本語日本文学

氏名 山田昭子

目次

第一章

研究動向、本論の構成	1
1 研究動向	1
2 本論の構成	2

第二章

吉屋信子、その「少女性」― 童話から少女小説へ	1
1 作家としての出発	3
2 「幼年世界」と「良友」	7
3 二誌における吉屋童話	10
4 吉屋童話と『花物語』	15
5 少女小説へ― 吉屋童話における異色	23
6 童話・『花物語』・少女小説	58

第三章

「睡蓮」論——『花物語』における少女たちの裏切り——

1 『花物語』における「裏切り」

2 執筆の経緯、作品の同時代背景

3 仁代と寛子——「夢想的少女」と「非夢想

4 競い合う少女たち

5 少女の裏切り

6 博多人形について

7 見届ける者としての玉園女史

第四章

「少女倶楽部」における運動小説について

1 運動小説の起こり

2 テニスを描いた運動小説

3 野球を描いた運動小説

4 運動会、陸上競技を描いた運動小説から

第五章

5	ノンフィクション小説へ	∴	1	3	4
5	運動小説の消滅とその後	∴	1	4	1
6	体育・芸術・文化	∴	1	4	4

『からたちの花』論

1 『花物語』以降の少女小説

2	短編「からたちの花」――少女のため	∴	1	4	8
---	-------------------	---	---	---	---

3 として

3 長編『からたちの花』――過去に取り残さ

4 れた少女

4 吉屋の渡欧体験、『少女ゼット』

5 母の物語から父の物語へ

1 「新しき」ボルネオ論

1 『新しき日』における『風下の国』

∴

2 2 4

第七章

2	イギリス・オランダ統治時代	∴	2	2
3	日本統治時代 領地型	∴	2	3
4	日本統治時代 滞在型	∴	2	3
5	戦後へ	∴	2	5
				8

第八章

1	『安宅家の人々』論	∴	2	6
2	吉屋作品における「障害者」	∴	2	7
3	国子と雅子 描かれる友情の形	∴	2	7
4	安宅宗一 母恋いの物語	∴	2	8
5	夫婦の抱える性的困難	∴	2	9
	『安宅家の人々』から『女の年輪』へ	∴	2	9
				7

1	『香取夫人の生涯』論	∴	3	0
2	現代小説から歴史小説へ	∴	3	0
	執筆の動機、伊都子と吉屋の出会い			9

4 3

『 梨 本 伊 都 子
香 取 夫 人
の
生 涯 』
—
盈 子
と
伊 都 子

∴ ∴ ∴
3 3 3
6 3 1
0 7 9

第一章 研究動向、本論の構成

1 研究動向

近年、吉屋信子研究は次第にその領域を開拓されつつある。作品研究に関していえば、『花物語』を中心とする少女小説を扱ったものが最も多く、次いで大人向け読み物とといったいわゆる大衆小説に関する研究が多く見られる。いずれも、吉屋の死後になされた研究であり、その年数は四十余年と歴史が浅い。中でも少女小説研究は一九九〇年代に入り漸く着手されたといえる。その理由の一つとしては初出誌の散逸、また書誌研究の立ち遅れが挙げられよう。吉屋信子の全集として、生前全集である新潮社版（昭和十一年）と、死後刊行の朝日新聞社版（昭和五十一年）の二種類がある。しかし、これ、いずれも全集でありながら未収録の作品も多い。この他、選集として、少女小説に関して『吉屋信子少女小説選

集』(東和社 昭和二十三年)、大衆小説に關しては『吉屋信子選集』(新潮社 昭和十三、十四年)、『吉屋信子小説選』(北光書房 昭和二十一、二十三年)、『吉屋信子長篇代表作選集』(向日書館 昭和二十八年)が刊行されている。

主だった書誌研究資料としては、朝日新聞社版『吉屋信子全集』第十二卷の卷末付録である年譜(吉屋千代作成)が挙げられるが、初出誌不明のものや、年代の誤りも多く見られ、資料として必ずしも正確とはいえない。書誌研究については引き続き今後の研究が待たれる。吉屋の死後行われた大きな展示としては、神奈川近代文学館「生誕一一〇年 吉屋信子展―女たちをめぐる物語」(二〇〇六年四月二十二日、六月四日)が挙げられる。生い立ちから『花物語』執筆、大衆小説作家を経て歴史小説に着手するまでの生涯を追ったものであり、書簡や写真など貴重な資料が多数展示された。

作家研究に関する主なものとしては、吉武輝子『女人
吉屋信子』（文藝春秋社 一九八二年十二月）と、田辺聖
子『ゆめはるか吉屋信子 秋灯机の上の幾山河』上下巻
（朝日新聞社 一九九九年九月）が挙げられる。前者は吉
屋信子のパートナーとして生涯を共にした吉屋千代への
聞き取りと、多くの書簡を引用している点で資料的価値
が高い。現在吉屋の書簡は神奈川県近代文学館所蔵の吉屋
信子文庫をはじめとし、いくつかの文学館に収められて
いるが、いずれも文学関係者との間でやり取りされた書
簡が大半である。『女人吉屋信子』では、過去に吉屋と恋
愛関係にあった女性や、のちに養子に迎えた門馬千代と
の書簡が多く収録されているが、現在本書以外にそれら
を確認する手立てはない。吉屋の私生活を知る上では貴
重な一冊であるといえる。後者は評伝作品に近いが、作家の生涯と作品世界を強
く結びつけ肉付けを行うものである。冒頭では谷中村立

ち退き事件に関する詳細な取材記事をまとめ、これまであまり知られていなかった吉屋の父である雄一について明らかにしている。吉屋雄一は郡長として事案に関わり、幼いころの吉屋はその縁で田中正造にも会っている。それはのちに『私の見た人』（朝日新聞社 昭和三十八年九月）という印象記の第一回目にまとめられたが、吉屋は執筆の際、現地に赴いて取材を行っており、元村民から亡き父の話聞いていた。田辺氏著書では当時の吉屋の父の姿が克明に再現され、作家以前の吉屋の幼少期を知ることがかりとなる。

吉屋の作品研究は少女文化研究と、婦人雑誌研究の隆盛に深く関わるものであるといえ、その推移はほぼ十年ごと確認できるといえよう。以下、吉屋が死去した一九七三年以降、現在に至るまでの作品研究を十年ごとに追いながらみていく。

一九七〇年代は吉屋が晩年取り組んでいた俳句に関する

るものがいくつも見られる。車谷弘「吉屋信子（わが俳句交遊記―2―）」（「俳句」一九七四年十月）、岸風三樓「鯉交会のことなど―吉屋信子の俳句―」（「俳句」一九七五年八月）などが挙げられよう。「花物語」に関する最も早い論文としては上笙一郎「近代日本における『花物語』の系譜―女流児童文学の側面―」（「児童文学研究」一九七五年十月）のち「日本児童文学の思想」国土社昭和五十一年収録）が挙げられる。

一九八〇年代は死後十年が経過しているが、まだ吉屋信子作品研究は着手されていない状態であるといえ、本格的な作品研究は一九九〇年代を待たねばならない。とはいえ、八二年に刊行された本田和子『異文化としての子ども』（紀伊国屋書店 一九八二年六月）において、本田はいち早く『花物語』の名を挙げている。本田は『花物語』の登場を「わが国近代において、「少女」の誕生を告げる事件」であったとし、吉屋の扱う「その言葉自体、

文章自体が、「少女」そのものなのだ」と指摘、『花物語』の世界を文体から分析した。

寄宿舎を舞台にしたいくつかの作品を取り上げ、「少女」と「寄宿舎」が「極めて相即的なもの」であるという発見から、「見出された少女」が「囲い込まれるべきもの（本文ママ）」であつたと同時に、「囲い込まれること」においてのみ、「少女」はその輪郭を鮮明にしたとされている。

一九九〇年代に入ると、単体論文において作品が取り上げられ始める。叶井晴美「吉屋信子の少女小説における少女像——「花物語」の少女像——」（『山口国語教育研究』一九九五年七月二十日）は、これまで「少女像全体を捉えて論じられたことはなかった」という指摘のもとに「『花物語』における少女像の特徴とその時代的な意味を考察しようとする」ものである。『花物語』に登場する少女たちの系統を四つに分類し、結論において彼女たちに「自らの運命を自ら選びとって生きて行く」とする

姿勢」を読み取っている。それは、冒頭において「本当に「花物語」の少女像は脆弱で女学校という囲いの中から出ようとしなない少女なのであろうか」という問いに対する反証でもある。

この時期、吉屋の長篇作品に着目した論文としては吉川豊子「『或る女』／『真珠夫人』／『海の極みまで』——吉屋信子初期「三部作」の時代と「戦略」——」（『昭和文学研究』一九九七年七月）が挙げられる。吉屋「三部作」と呼ばれる作品のうち『海の極みまで』を取り上げ、本作発表後の三、四年間吉屋が文壇から姿を消したこと、本作のみが単行本になっておらず朝日新聞社版全集にも未収録である事実から、この小説が「プロット構成にも「亀裂」があり、説得力に欠ける小説」であり、「そうした意味でも「問題」をのこす小説だった」ことの裏付けをしていく。『海の極みまで』はエレン・ケイの「恋愛論」を忠実に「引用」することで『青鞥』よりもラディカル

に女性のセクシュアリティの「解放（意志決定の自由と権利）」のモデルを表現しえた作品であったとするのが吉川氏の論である。実は吉屋は「青鞥」にも小品を掲載しているが、それは数号に留まるもので、決して深い関わり方ではなかつた。そのことが、「青鞥」とは相容れなかつた吉屋の一面を物語っているといえ、本論は『海の極み』から「青鞥」と吉屋との断層を早くから読み解くものとして挙げることができよう。

以上は単体論文であるが、一九九〇年代に出された著作としては駒尺喜美『吉屋信子―隠れフェミニスト―』（リプロポート 一九九四年十二月）がある。吉屋の代表作と言われる作品を年代順に追いながら、その人生と作品がどう関わり合い、作品テーマへと結びついていったのかを見て行くものである。タイトルの通り、フェミニズム的視点から作品を読み解き、「女同士の優しいたわり合い」、「女の友情・女の連帯」といったキーワードを

言いつて行くが、今日の吉屋研究からすれば、それらのキーワードに当てはまらない読みの構築もまた、求められつつあるといえるのではないか。

川崎賢子『蘭の季節』（深夜叢書社 一九九三年十月）は、『花物語』の文体に着目する。女と女の対であれ、母／娘の対であれ、「ふたつの個体がまじりあい変化するたゞめに暴力的な外部の力を必要とせず、ただみずからの重さだけあればたり」という、「初期吉屋信子のエロスの表現」の自堕落さを読み取るものである。女を愛する女たちのエロスの解放は、自我の解放ではなく、自我からの解放であるとする指摘は、その後の吉屋作品にも通底するものである。

二〇〇〇年代に入ると、『花物語』を中心に論じられるようになつていくが、そのことは、吉屋の少女小説復刻版の刊行が相次いだことと、少女文化研究のブームが深く関わつているといえる。二〇〇〇三年頃を契機に、ゆま

に書房から「吉屋信子少女小説選シリーズ」として『暁の聖歌』『返らぬ日』『紅雀』『三つの花』『毬子』が刊行された。国書刊行会からは『花物語』（全三冊）、『小さき花々』、『吉屋信子乙女小説コレクション』と題した『わすれなぐさ』『屋根裏の二処女』『伴先生』の三冊が相次いで刊行、嶽本野ばらの解説が話題を呼んだ。嶽本はその後も二〇〇五年五月二十八日弥生美術館において開催された「大正・昭和・女學生らいふ展」で開催されたトクシヨイヤ、メディア・雑誌等で吉屋について触れており、そのことが新たな世代の読者獲得へとつながったといえよう。二〇〇六年には河出書房より『黒薔薇』が刊行、『花物語』『わすれなぐさ』はのちに文庫化もされ、二〇一二年には小沢真理によつて『花物語』の漫画化もされた。二〇〇八年にはKAWADAの道の手帖シリーズから『吉屋信子黒薔薇の處女たちのため』に紡いだ夢』が刊行され、作品とともに、作家の生涯について読者が

にとつて身近なものとなりつつある。だが、依然として作品の復刊は少女小説に集中している。一九九九年に毎日新聞社より『良人の貞操』（全二冊）が刊行され、二〇〇一年に国書刊行会より『源氏物語』（全三冊）が刊行、二〇〇一年の大河ドラマを受けて河出書房より『徳川秀忠の妻』が文庫化された程度にとどまり、吉屋にとつての戦前戦後の大衆小説への関心は少女小説に次ぐものである。

二〇〇〇年代に出された単体論文としては、『花物語』論、それ以外の少女小説作品論、そして大衆小説作品論に分類される。『花物語』に関しては、久米依子「エス——吉屋信子『花物語』『屋根裏の二処女』（小説）（教会を越えて——恋愛のキーワード集）」（『国文学解釈と教材の研究』二〇〇一年二月）、百瀬瑞穂「論文v水室冴子の『クララ白書』と吉屋信子の『花物語』」（『成蹊人文研究』二〇

○三年三月)、山田昭子「吉屋信子「三色堇」論——『花物語』における父親及び異性愛」(「専修国文」二〇〇六年六月)、高橋重美「夢の主体化——吉屋信子『花物語』初期作の^抒情vを再考する——」(「日本文学」二〇〇七年二月)、毛利優花「吉屋信子『花物語』の^孤独v——少女型主体」(「金城学院大学大学院文学研究科論集」二〇〇七年三月)などが相次いで発表された。このうち、高橋重美氏の論は、少女の規範的物語を引き継ぐものとして、『花物語』を読み解いていく。初期の少女小説に見られる少女教訓譚、尾島菊子の少女小説との比較を通して、『花物語』がいかなる意味で「少女小説の原点」であるのかを考察するものである。初期の七作品の少女たちが「夢」や「幻」に譬えられる事実に着目し、そのことが、小寺菊子の不幸譚にはなかつた非現実的な空間をテクストに導入し、日常と非日常を移行する新たな少女の^物語vの読解を可能にすることを指摘した。

『花物語』研究にあつては、作品の発表形態にも注意する必要がある。当初最初の七編のみであつた作品を、読者の好評により連載化したいきさつがあるからだ。最初の七編で区切る場合と、単行本収録の五十二編をまとめて取り扱う場合とは、少女像においてもばらつきがあるが、現在では五十二編を通して考察するものが主流である。

『花物語』以外の少女小説に関しては、福田委千代「吉屋信子『紅雀』・二人のヒロイン——「少女の友」の少女小説」(「学苑」二〇〇七年三月)、Doi Iasae Hiromi Tsuchiya「吉屋信子の「屋根裏の二処女」を読む…少女ナラティブにおける文学への可能性を探す」(「日米女性ジャーナル」二〇〇一年十二月)が挙げられる。『紅雀』も『屋根裏の二処女』も吉屋の作品の中では初期にあたるものである。昭和期は吉屋にとって長期的な連載が増え始める時期であるが、この時期の少女小説に関する論

文は『花物語』に比べれば圧倒的に少ない。福田委千代氏の論は、まゆみと純子という二人のヒロインという観点から物語を読み解き、この作品が、二つの血縁ならぬ姉妹の構造をとっている可能性を指摘する。結末部のまゆみと珠彦の婚約には、いわば「血縁のない姉妹」の関係を守ろうというヒロインたちの意識、ひいては作者・吉屋信子の意識が織り込まれている。のである、吉屋はまゆみと純子という二人のヒロインを立てることで、「少女あるいは女性の自我と自立をめぐる二通りの生き方」を示した。『紅雀』の最後は、まゆみと純子の永続的な自立は果たしえないが、「実質的な彼女たちの関係を維持すること、たがいの結びつきを強化する」ことにつながっている。福田氏は指摘する。だが一方で、この物語がまゆみと珠彦との婚約によって閉じられるという事実にも着目すべきではないか。突如異性が愛を持ち込まれる『紅雀』の結末には、吉屋の洋行での

経験も少なからず影響を与えていると思われるからだ。
この他、他作家との比較では竹田志保「尾崎翠と少女
少女小説」吉屋信子との比較から「学習院大学大学院
日本語日本文学」二〇〇八年）があり、少女小説とい
場から吉屋を考察したものととして、林佐和子「図書資
料としての大衆児童文学を考える——吉屋信子の少女小
説を例に」(「大谷女子大学紀要」二〇〇一年三月)、中
村舞「吉屋信子の少女小説研究——母親像を中心に」(「梅
花児童文学」二〇〇六年六月)、山崎美穂「吉屋信子と少
女小説」(「日本文学誌要」二〇〇八年七月)が挙げられ
る。

このうち中村舞氏の論は吉屋の少女小説を三期にわけ、
『花物語』から終戦後の『花それぞれ』『級友物語』まで
を母親像を中心に読み解いていく。冒頭で吉屋と母親と
の実体験に触れ、それらが作品にどう反映されたかを長
期的に見通すもので、吉屋の長篇少女小説の流れを大き

くつかむものとして新しい試みである。吉屋の連載小説は、昭和の戦前から戦後にかけて、多く書き継がれてい
る。にもかかわらず、長期的な視点で、吉屋の創作活動
を捉えた論考は少ない。個々作品の研究は勿論、少女雑
誌ごとの書き分けや、描かれる少女像の変遷を考察する
ことは、『花物語』だけにとどまらなかった、吉屋の少女
小説家としての新たな一面を明らかにするものである。
横川寿美子『初潮という切札——少女v批評序説』（J I
C C 出版局 一九九一年三月）によると、「少女」という吉
屋論が盛んになり始めた二〇〇〇年代から二〇一〇年代
にかけては、少女文化研究に関する多くの著作が刊行さ
れた。同時にこの頃、吉屋の 대중小説への関心が高まり
出したとも言えるが、論は戦時を中心としたその前後の
作品に集中していることがわかる。吉屋信子『戦禍の北
徐青——メディアとしての女性——』

支上海を行く』におけるシヤンハイ・イメージ（「愛知
大学国際問題研究所紀要」二〇〇九年三月）は吉屋作品に
登場する上海と、戦中の吉屋が執筆したルポルタージュ
から、吉屋が作り上げていった上海イメージを考察する
ものであり、吉屋の提示する言葉によるイメージの乱射
が、日本女性が戦時下上海を形象化していくことに大い
に貢献していたことを指摘する。昭和十二年、吉屋は「主
婦之友」と専属契約を結び、小説をはじめ、訪問記やル
ポルターージュを多く書くようになる。昭和十四年に発表
した『未亡人』について考察したものと、川口恵美子
「吉屋信子」未亡人「戦時における母性主義と未亡
人の再婚問題」（「日本女子大学院人間社会研究科紀
要」二〇〇三年三月）が挙げられる。『未亡人』は戦後
『新編未亡人』として新たに編まれ、その異同を探るこ
とは吉屋の戦前戦後を知る上で重要な手掛かりになる
と思われるが、研究については現在、未開拓に近いとい

つてよい。
戦後、吉屋は「鬼火」によって女流文学者賞を受賞す
る。毛利優花「少女」的であること、他者性——吉屋信
子「鬼火」(「金城学院大学大学院文学研究科論集」二
〇〇八年三月)は、「鬼火」の持つ評価の不安定さを考察
するとともに、花に囲まれた異空間という点から『花物
語』所収の「白萩」との比較を行う。そこから花の異空
間を描く系譜を確認し、「鬼火」の持つ異空間の意味を明
らかにするものである。「鬼火」の女のすがたからは、「拒
否する少女」という『花物語』から続く吉屋の人物造形
の一つの典型が見られる。女の選んだ「静かなる拒否」
は『花物語』の少女たちの持つ少女文化でもって、男性
中心社会への批判をしたということである。なにも言わ
ずただ事実を受け入れるように見えた少女たち、女たち
の裏側に、静かなる拒否権を見出したとき、『花物語』に
あらたな視点を向けることができると毛利氏は指摘する。

同じく毛利氏による「仕掛け」としての「百物語」——吉屋信子「宴会」——（『金城学院大学大学院文学研究科論集』二〇〇九年三月）では昭和三十年に発表された「宴会」を取り上げる。本作は鷗外「追儼」との関連から語られることが多いが、「追儼」が設定した場が、「宴会」において怪異を怪異として描くために必要とされた一方で、その根底には「百物語」という場が仕掛けとして組み込まれていた可能性を指摘する。それは鏡花が自然主義への反発を込めて化け物を書いたことと同じく、強烈な時代への反発となりうるが、吉屋は直接「百物語」を描くことなく、先人たちの描いた百物語小説を受け、近代怪談として「宴会」を書くことをもって時代への反発の意味を持たせていたとするものである。

戦後の意欲作である『安宅家の人々』は、*Friederick Sarah*「吉屋信子の『安宅家の人々』…戦後家庭メロドラマ」としての一考察——（『日米女性ジャーナル』二〇〇二年

十二月)によつて太宰治『斜陽』との比較において考察がなされた。

二〇一〇年代には、吉屋信子に関する博士論文が二本提出された。

毛利優花『吉屋信子における少女表象研究』(金城学院大学 二〇一二年三月十七日)収録論文のうち二〇一〇年代に発表されたものとしては「 \wedge 愛人 \vee という自由——吉屋信子「みおつくし」論」(「金城日本語日本文化」二〇一〇年三月)、吉屋信子の児童文学…「回復」の物語としての「銀の壺」(「金城学院大学院文学研究科紀要」)、同性愛的な精神空間…川端康成「しぐれ」と吉屋信子『花物語』の近似性(「金城学院大学院文学研究科論集」二〇一二年)、吉屋信子『花物語』「曼珠沙華」における死の様相(「金城日本語日本文化」二〇一二年三月)などが挙げられる。最新の論文である「吉屋信子『花物語』における感覚表現」(「金城日本語日本文化」二〇

一四年三月)では、再び『花物語』を取り上げ、全五十二編を五感によって分類考察を試みた。

竹田志保『吉屋信子研究』(学習院大学 二〇一四年三月八日)は、大正期から戦中期の長編小説を読むことで新たな可能性を見出すことを目的とし、当時の読者、そして吉屋自身も気付かなかったであろう「綻び」を拾い上げようとするものである。大正期の『花物語』から、大阪朝日新聞の懸賞小説である『地の果てまで』、その直後に発表された『屋根裏の二処女』、昭和に入り書かれた人気作品『女の友情』、『良人の貞操』、そして作品から離れた新聞雑誌で取り扱われた吉屋信子像に触れ、大衆小説作家として人気を博したのちに書かれた少女小説である『あの道この道』、翻案小説『母の曲』、日中戦争期の『女の教室』までを追う。収録論文のうち二〇一〇年代に発表されたものとしては、「良妻賢母の脅迫…吉屋信子」良人の貞操「論」(「学習院大学国語国文学会誌」二〇一〇

年三月）、「三人の娘と六人の母…ステラ・ダラス」と「母の曲」(「学習院大学大学院日本語日本文学」二〇一二年三月)、「困難な友情」(「吉屋信子「女の友情」論」(「昭和文学研究」二〇一二年九月)、「吉屋信子「地の果まで」論…大正教養主義との関係から」(「日本文学」二〇一三年十一月)などが挙げられる。

最新の論文である「もう一つの方途——吉屋信子「屋根裏の二処女」再考」(「学芸国語国文学」二〇一四年三月)では、『屋根裏の二処女』を「シスターフッド」的なものとして読む従来の先行研究に疑問を呈し、ある女たちは連帯し合うことを認めたいと見え、その背後に「女間の分断と差別化」があることを見抜く。また、主人公の流動的なアイデンティティを指摘したうえで、物語の結末における「自我」の解説が、それまで描かれてきた章子のありようとはズレているのではないかと、という疑問を投げかけ、この物語の結末が、「自我」によって

生きていくことの不可能性を濃厚に感じさせる結果にな
っている」と述べる。さらに、「異端」の「自我」を肯定して、
「女性同性愛」を貫くものとして読まれた事実を指摘す
る一方、その「自我」には危うさがあるとし、そのことか
らこの小説における「女性同性愛」表象を再検討する必
要性へと繋げている。

この他、挿絵、文体から『花物語』を読むものとして
森山祐子「吉屋信子『花物語』論」・中原淳一の挿絵と
関連について「『学習院大学国語国文学会誌』二〇一三
年三月）、嵯峨景子「『少女世界』読者投稿文にみる「美
文」の出現と「少女」規範」・吉屋信子「『花物語』以前の
文章表現をめぐって」・「情報学研究」・東京大学大
学院情報学環紀要」二〇一一年三月）の各論が相次いで出
された。
これまで全五十二話とされてきた『花物語』の単行本
未収録となった二編のうち、「からたちの花」について論

じたのは、渡部周子「少女たちの『Sweet's room』(スキートソロール)——吉屋信子『花物語』単行本未収録作品」からたちの花」について「近代文学研究」二〇一一年四月)である。「からたちの花」が何故『花物語』未収録となったのか、これまでその内容すら顧みられなかった一編に、『花物語』に一旦の終了を見た吉屋が迎えた転機を読み解いていく。

昭和十二年「令女界」に連載された長編作品『蝶』から当時の怪奇小説、心理ホラーの読者受容を読み解いていったのは藤田篤子「吉屋信子『蝶』…昭和十年代における女性の「怪奇小説／心理ホラー」の受容について」(『愛知大学国文学』二〇一三年一月)である。読者欄の反応から、何故『蝶』という作品が完全には受け入れられなかったのか、『蝶』という作品の持つ怪奇小説、心理ホラーという側面が果たして当時の読者にどう受け止められていたのかを考察するものである。吉屋はこうした系列の

怪奇ものの短編を戦後に相次いで執筆しているが、それを扱った論として、小平麻衣子「研究へのいざない」吉屋信子「もう一人の私」を読む。「国文」二〇一〇年十二月）、小林美恵子「吉屋信子『鬼火』論…敗戦後の『花物語』」（「Caritas」二〇一二年三月）が挙げられる。

この他、女中という観点から吉屋の長篇を読む試みとして清水美知子「吉屋信子の小説にみる大正末と昭和戦前期の女中像——『三つの花』『良人の貞操』を中心に——」（「研究紀要」二〇一一年三月）が出された。

以上、吉屋作品の先行研究について、十年ごとに大まかな流れを追ってきた。改めて気付くのは、当時の認知度の高さに比べ、現在吉屋信子として想起される作品があまりに限定されているという点である。それは一つに全集収録以外の作品が単行本化されていないという点、初出誌の散逸などが原因として挙げられない。だが、実はそうした全集未収録の作品にも見過ごせない作品が

数多くあることも事実である。吉屋作品に關して指摘されることが多いのは、描かれる女の友情や女の理想といったテーマである。しかし、それらは吉屋が作品の中で追いつたテーマで、マであるが、読者である女性たちもそれらを期待し続けて読んだ。また小説家であるかのようないまじい作家として、イメーヂがあまりに強いらう。女のたのめ作家として、多くのことが残されている。のでは、ない。だろ。か。今後、さらなる書誌研究とともに、単行本収録の大衆小説について、考察の必要がある。加えて、あまり開拓されてない歴史小説、評伝作品について、考察の余地が十分残されているといえるだろう。

2 本論の構成

以上、研究動向について述べた本章を加え、本論の構成は全部で八章構成である。第二章「吉屋信子、その女性V—童話から少女小説へ」は、これまで経歴の一部としてしか語られず、自立した研究の対象とされることはなかった。吉屋童話の全容を把握し、掲載時期を同じくする『花物語』との関連を見るものである。同時進行であった童話と『花物語』が、どこで分岐し、吉屋は『花物語』の世界を選び取っていったのか、「黄金の貝」「二つの貝」「桜の島」という三作品から読み解いていった。

第三章「睡蓮」論—『花物語』における少女たちの裏切り—は全五十二話とされる『花物語』の中でも、少女の裏切りを描いた「睡蓮」について述べるものである。「睡蓮」掲載時、時代は少女像の変遷の一転機を迎えていた。それが作品内において寛子の仁代に対する「裏切

り「という形で「夢想的少女」が否定される構図と重なったといえる。本作は芸術の道を志す少女が登場する物語であり、『花物語』には他にも同様の少女が登場しているが、仁代の持つ芸術性がいかなるものであったのかについて、仁代の持つ芸術性がいかなるものであったのかについて考察した。

第四章「少女倶楽部」における運動小説については第二章の「睡蓮」論から派生したものである。「睡蓮」の掲載当時、掲載誌である「少女倶楽部」には「運動小説」という新たなジャンルの誕生があった。そこには競い合う少女たちが描かれている。二つは芸術と運動といった、一見位相の異なる二つの世界であるかもしれないが、体育と芸術は文化という枠組みの中で一体であるべきものであるという指摘があることは看過できない。「睡蓮」が登場する背景には、既に「少女倶楽部」誌上において競い合う少女たちの下地が用意されていたという可能性として導き出した。

第五章「『からたちの花』論」は、昭和八年に書かれた『からたちの花』について考察する。『花物語』の連載に一旦の終了を見た吉屋が迎えた転機に着目すると同時に、『花物語』所収の「心の花」と設定を同じくする『からたちの花』が、どう変わっていったのかを見るものである。昭和初年の渡欧体験とそこで得た一冊の本との関わり合いを通して、『からたちの花』というタイトルに込められた意味を考察した。

第六章「『新しき』ボルネオ論」は、昭和十七年に発表された『新しき日』に登場する『風下の国』を契機とするものである。吉屋が「主婦之友」の専属特派員となつたのは昭和十二年のことである。蘭印、仏印に赴いた吉屋は、帰国後の昭和十七年『新しき日』を執筆している。吉屋はそこにアグネス・キース『風下の国』というボルネオを舞台にした一冊の本を登場させた。ボルネオという土地に関わった、林芙美子、築地藤子といった女性作

家たちにも触れ、インターテクスチュアリティとしての『風下の国』を通して『新しき日』を読むことで、ポルネオという土地に関わった作家の一人としての吉屋を捉えていった。

吉屋は戦後にも多くの長篇作品を執筆した。中には、戦後という時代だからこそ描けた作品もある。第七章「『安宅家の人々』論」で扱った『安宅家の人々』は、昭和二十六年に書かれた作品で、果敢にも夫婦の性にまつわる困難を扱った作品である。

安宅宗一という「精神薄弱者」の良人と、その妻国子を描いた吉屋は、その十年後の昭和三十六年、『女の年輪』で、「精神薄弱者」の妻とその良人の物語を描いている。吉屋作品において「母」は重要なキーワードの一つであると同時に、本作は戦前の代表作『女の友情』や『良人の貞操』に描かれた女の友情というテーマを引き継ぐものである。この物語における友情の物語は国子と雅子の

間に生じているが、母をめぐる女同士のねじれた関係性は、どこへ帰着するのか。三人の関係性から読み解いていった。

昭和三十七年、『女の年輪』の連載を終えた吉屋は、創作小説を離れ、次第に事実取材した伝記作品、歴史小説へと傾倒していく。第八章「『香取夫人の生涯』論」で扱った『香取夫人の生涯』は評伝作品ではなく、手記を下地にしながら一人の妃殿下を創作した、いわば準創作作品であるといつてよい。本作は、創作と評伝作品とを繋ぐものであり、『香取夫人の生涯』を書くことで、吉屋はのちの『女人平家』『徳川の夫人たち』の着想を得ている。その意味では、『香取夫人の生涯』は決して見逃すことのできない作品である。本章では現在確認できる伊都子の手記から、吉屋が手にしたと思われる伊都子の手記について考察し、資料的価値をも見出した。以上、本論文では、吉屋の作家としてのはじまりから

晩年までを追う中で、作家吉屋信子の転換点を中心として読み解いていくことを主眼とする。第二章では童話から少女小説への接続を三つの作品から読み解き、第三章では長期にわたる『花物語』の中でも特徴的なテーマである少女の「裏切り」を扱った。「睡蓮」は休載のち、連載を再開した一作目にあたり、吉屋の新たな意気込みを知る上でも重要な作品である。第五章の『からたちの花』はそれ以前の吉屋の少女小説と以後のそれを大きく変える転換点となった作品である。第七章『安宅家の人々』は吉屋の中でも「精神薄弱者」である良人とその妻を描き、夫婦の性の問題を扱った意欲的な作品として取り上げられた。第八章『香取夫人の生涯』は、現代小説から歴史小説へとゆるやかに移行していく、過渡期の作品である。吉屋信子は目まぐるしく変化していく作家である。長い作家生活の中に見られるいくつもの転換点に着目し、一つの作品からは見ることでできない、吉屋信子の全体

像を浮かび上がらせることが本論の目的である。

第二章 吉屋信子、その少女性V—童話から少女小説へ

1 作家としての出発

吉屋信子は自身の作家としての出発を、「追憶の断片」(「児童文芸」昭和三十九年三月)において、次のように回想している。

編集部から戴いたテーマは『花物語の周辺』というのだった。花物語は私の書いた少女小説で女学生を対象にしていた。それを書く少し前の時期に私は童話を書いていた。その当時の博文館発行の幼年世界にも一つ二つ書いた。それからいちばんながい間を書いたのは(良友)という児童雑誌だった。

ここで、吉屋が『花物語』を発表する少し前の時期に

発表していたとする童話作品は、表1の通りであつて、大正四〇十一年の間のことである(1)。それらの作品群は、これまで吉屋の経歴の一部として語られることはあつても、自立した研究の対象とされることはなかつた(2)。本稿では、これら吉屋の童話作品を取り上げ、同時進行の『花物語』との連関について述べていくことを主眼とする。

まず2、3では吉屋童話の主な発表誌「幼年世界」「良友」を取り上げ、巖谷小波と浜田広介という個性的な編集者のもと、それぞれ特色の異なる二誌において、吉屋がどのような作品を発表していたのかを見ていく。4では童話と『花物語』との連関について論じる。5では吉屋童話の中でも特異と思われれるもの三作品を取り出し、当時の童話界において吉屋が描こうとした童話が、どのようなものであつたのかについて述べていきたい。

表1.

		「良友」	「幼年世界」	『花物語』他
明治 44(1911)	15歳		第二次「幼年世界」創刊、1巻 9(8)	
45(1912)/ 大正元年	16歳			
大正 2(1913)	17歳			
3(1914)	18歳			
4(1915)	19歳		「幼い音楽師」(12)	
5(1916)	20歳	「良友」創刊	「小さい探検」(7,8)	『花物語』連載開始「鈴蘭」(7)
6(1917)	21歳	「赤い夢」(6,7,8)「銀の壺」 (9,10,11)	「羽子板物語」(1)「赤い実」 (4,5,7)「不思議な名」(12)	「罌金桜」(4)「わすれな草」(5) 童話集「赤い夢」(12)(洛陽堂) 刊行
7(1918)	22歳	「湖の唄」(1~3)「魔法の花」(4 ~6)「黄金の貝」(7~9)「鳩の お礼」(10~12)	「金絲雀と兎猫」(3~6)「赤い 鳥」(7,9)	
8(1919)	23歳	「鐘の音」(1,2,3,4,5)「野薔薇の 約束」(6)「光りのお使」(7)「湖 の蘆」(8)「籠の小鳥」(9,10)「茸 の家」(11)「黄水仙の花」(12)	「蒔いた鈴」(7)「木つつきの 話」(8~10)「残された羊」(2) 「捨てられた銀の匙」(4)	
9(1920)	24歳	「銀の鍵」(1~3)「二つの貝」(7) 「小石と旅人」(8)「靴の家」(9) 童謡「秋の謎」(10)「四つの木 の葉」(12)	「小さい女王さま」(12)	『屋根裏の二處女』刊行(1)(洛 陽堂)、『地の果まで』(1~6) (大阪朝日新聞)、童話集「野薔 薇の約束」(3)(洛陽堂)
10(1921)	25歳	「すみれの花と球」(3)「小さい 瓢箪と茶丸」(4?,5)「一つの チョコレート」(8~)	「櫻の島」(3)「森の鴉」(4)	『海の極みまで』(7~12)(大 阪・東京朝日新聞)
11(1922)	26歳	「一つのチョコレート」(~8)		『黄金の貝』(4)(民文社)、『花 物語』「竜胆の花」(9~11)
昭和20 (1945)				童話集『てんとう姫の手柄』 (12)(湘南書房)
昭和23 (1948)				童話集「茸の家」(北光書房)刊 行、『あかずきんさん』(8)(寿書 房)、『おみかんのおはなし』 (11)(寿書房)
昭和24 (1949)				童話集「チョコレートの旅」(1) (湘南書房)刊行

2 「幼年世界」と「良友」

吉屋は自身の童話体験を「まだ小学校に上らない前、始めて読んだご本は、巖谷小波の（浮かれ胡弓）でした」（3）と語っている。「幼年世界」は巖谷小波が主宰した雑誌であり、多くの童話作家たちが小波のお伽噺を読んで育てられた。「良友」の編集をした浜田広介もまた、小波を読んで育った作家の一人である。吉屋が童話を多く発表した二誌「幼年世界」「良友」とはどのような雑誌だったのであろうか。

大正期を代表する児童雑誌「赤い鳥」が発刊されたのは大正七年七月のことである。「幼年世界」「良友」はそれよりはるかに先立ち、共に小学校三・四年生向きの振興読物雑誌として、「赤い鳥」の発刊を待たずに世に出た。博文館の「幼年世界」は、当初「少年世界」の幼年欄を独立させるべく、明治三十三年に創刊された。しかし明確な方針が定まらず、主催者であった小波の洋行もあり、

一年で廃刊。明治四十四年一月、「幼年画報」と「少年世界」の中間的読物として復刊された。第二次「幼年世界」の実的な編集は武田鷺塘あづと（桜桃）が担当したが、主筆は第一次・第二次共に小波であった。コドモ社「良友」はそれに遅れること大正五年一月、既刊の幼年向け雑誌「コドモ」の後続誌として発刊された。これら二誌の児童雑誌は、編集者の方針に左右された。これらに特徴のひとつが見出せる（4）。

「良友」は創刊当初、コドモ社長木元平太郎の下で中村勇太郎が編集を担当していたが、のちに浜田へと交代している。浜田の童話は、大正六年大阪朝日新聞の懸賞応募に一等当選した「黄金の稲束」に始まるが、この時の選者の中に名を連ねていたのが小波であった。浜田は後年、「童話十話」と題したエッセイを執筆、小波に、自身の作品が評価された時の喜びなどを綴っている（「毎日新聞」昭和三十九年三月十日から十回にわたり連載）。

更に影響を与えたもう一人の存在としては、アンデルセンが挙げられよう。「アンデルセン童話と私」(『アンデルセン全集・月報』昭和三十九年一月)において、浜田は次のように語っている。

わたくしは小学生の二年ごろから巖谷小波先生の「おとぎ話」をたくさん読んで、「さざなみ童話」のストリーのおもしろさ、その文章のなだらかさをまなぶところがありました。わたくし自身のこの顔を「童話の顔」としてみました。顔に二つの目があって、その目の一つは、「さざなみ童話」によって開かれ、あとの一つは、アンデルセンの童話によって開かれていたのであると、いつてもよいかもしれません。

浜田の童話作家としての素地は小波にあったといつてよいが、のちに触れたアンデルセンこそが、「ひろすけ童

話「(5)を大きく形作ったものであることは間違いない。では「幼年世界」「良友」は、それぞどのような個性を持っていたのであるだろうか。特色の異なる二誌において、吉屋がどのような作品を発表していたのかを見ていきいたい。

3 二誌における吉屋童話

吉屋が「幼年世界」に掲載した作品は、いずれも少年少女を主人公にしたものが多い。たとえば吉屋の「小さい探検」(大正五年七月八月)には、玉雄と花子の兄妹が登場し、「さう、では兄さん探検ができること。」「できるとも、僕は日本男子だぞ。」「わたしだつて日本女の子よ。」といったやり取りが描かれるが、吉屋に限らず「幼年世界」掲載作品の基本パターンとして、男は男らしく、女は女らしくが求められ、両親の言いつけを守らぬ悪い子には罰が与えられるという、「勸善懲惡」型の物語世界が

展開される。『幼年世界』には必ずといってよいほど小波の作品が
毎号掲載されたが、その角書きはいずれも『お伽噺』で
あつた。それは大正十年になつて『童話』にとつて変わ
るまで続いた。その他の執筆者として武田鶯塘、黒田
湖山、新井弘城らがいるが、武田、黒田はいずれも硯友
社一派であり、武田は紅葉門下、黒田は小波門下の門人
であつた。特に黒田は小波宅の書生にもなつており、小
波が博文館の『少年世界』を主宰していた関係から、同
誌に作品を執筆するようになったいきさつを持つ。巻頭
ページにはカラー挿絵とグラフィアをふんだんに盛り込み、
小波のお伽噺、武田鶯塘の歴史絵話、偉人談や理科的読
物などを取り揃えている。新井弘城は大正四年に博文館
に入社、のちに『少年少女譚海』の編集、『少女世界』編
集長もつとめた人物である。『幼年冒険 海底征服』（大
正五年一月〜十二月）は浦島伝説にヒントを得た物語、『お

伽嘶 竹取物語（大正八年一月、同九年一月）は竹取物語を長篇ものにした作品で、こうしたお伽嘶ものなどを執筆した。

一方「良友」は教育者というよりも、子供たちの良き友であれという願いのもと作られた雑誌で、子供の目に立つ細やかな心遣いが感じられる作品を多く載せている。吉屋もまた、雑誌の特色に合わせ、小さな動植物や小石、瓢箪といったものたちを主人公とした話を書き、「勸善懲惡」の型にはまらない、のびのびとした自由な童話作品を描いている。それはひとつに浜田の存在が影響していたとも考えられるが、吉屋唯一の長篇童話と思われる「一つのチヨコレート」（大正十年八月、同十一年八月）は、同じく「良友」に掲載された浜田の「花びらの旅」（大正八年五月）にヒントを得た作品であるといえよう。

浜田自身も特に愛着のある作品として挙げている「花

るべく「語り手」という新たな役目を負って、お嬢さんとの再会を果たす。短篇童話という形式で一つの運命を鮮やかに描き出した「花びらの旅」と同モチーフを用いながらも、吉屋は長篇童話という特徴を生かして遍歴の様を丁寧に描き、死というものを感覚的に描き表すことで、浜田との差異を見せた。

チヨコレートは当初、海の波によって浜辺に落ちていたのを発見されるのだが、こうした誰かに発見されることで始まる物語は、同じく吉屋の童話作品「湖の蘆」（大正八年八月）、「小石と旅人」（大正九年八月）、「すみれの花と球」（大正十年三月）、「小さい瓢箪と茶丸」（大正十年四月）五月）などに見られる。これらはいずれも「良友」に発表された作品である。猟師に追われた美しい白鳥をかくまっつてやった一むらの蘆を描く「湖の蘆」は、最後「私共は幸ひなものの達でしたね。かうして此処に生えてゐるのは、やつぱり立派ないゝことでした」と結ばれる。

作品の主人公はいずれも小さな草花や小石などであり、多くが自分から積極的に動くことのできない存在である。そこから読み取れる教訓的要素は、自己の存在意義の発見であるかもしれないが、吉屋が童話で描きかけたのは、こういうしたもの小さいものたちを、吉屋が見出し見守り、助けてやる周りのものたちの善意、優しさであった。そこには、小さなものたちの善意による善意によつて形作られた、浜田の童話の数々が影響していたといえるのではないだろうか。

4 吉屋童話と『花物語』と並行して書き続けられた。吉屋童話は代表作『花物語』と『花物語』にはどのような同時進行であった童話と『花物語』とはどのような連続があったのだろうか。「黄水仙の花」(「良友」大正八年十二月)も、他の吉屋童話と同じく、一人の少女が校舎の裏庭に淋しく生えていた水仙の花を「見出し見守る」物語である。少女は自分と同じ境遇の黄水仙の花に

同情を寄せ、その「お友達」が校長先生に褒められることで誇らしい気持ちになる。

「みなさん。どんなに寒くてもなまけてはいけません。この校_マ学_マの裏庭の水仙の花は、この頃の寒い時でもちやんと美しい花を咲かせております。みなさんもあの水仙の勇しい立派な花をお手本としてよく勉強して下さい。」とおっしゃいました。

私は、そのお話を聞いて胸がどきどきいたしました。まあ！私の大好きなお友達は水仙といふ名でました。そして私だち子供等のお手本になる立派な勇ましい花でしたもの！

玉やおはじきが下手でも、少しも悲しくはありません。

(中 略)

愛して反かれし者、尽して報いられざりし者、捧
げて顧みられざりし者、そして慕うて嘲けられし者、
それらの悲しき人々よ、土に生う可憐の花の黙示を
見よ！人の足にふまれ、けられても、彼は静かに咲
いている――こう思った時、私の瞳に涙が湧き出でま
した。それはけっして先までの怒り悲しみのための
涙ではなく、そこに一すじの心の救いを得た感謝の
涙でした。ああ報いなき愛に満足しつつ優しく微笑
む忍従と知足の美しさを私は知ったのです。

井上さんは花に自己を投影するに留まらず、それを俯
瞰し、自己回復を得るまでに至る。受けた花の啓示は、
少女の裏切りによって生じたものだ。やがて吉屋は童話
から離れ、同時に進行の『花物語』に集中していくが、そ
れは一貫して同性への優しいまなざしに満ちている。

『花物語』は、吉屋の用いたある手法によつて独自の世界を深め、読者である少女たちの心を捉えた。では吉屋の用いた手法とはどのようなものだか。童話と同様の進行の少女小説を決定的に隔てた境界とはどのようなものであつたのだろうか。次の二つの引用を見てみたい。

「お母さまに叱られるから、もうここで降りませう。」と言ひましたので、玉雄さんもそこへ立ち止りました。向の丘の上を見ますと、小さい青い洋館が立つてをります。そして、そよ吹く風の間にく、コロロン：コロロン：。とピヤノの音が響きます。澄きつた空に響いて！

あゝ、その時、講堂の中で、静かにピアノの蓋のあゝ音がしました、そして、やがてコロロン：コロロン：と、水晶の玉を珊瑚の欄干から、振り落とす

よ
う
な
い
み
じ
く
も
ゆ
か
し
い
楽
曲
の
譜
は
窓
か
ら
も
れ
出
て
ま
し
た
、
そ
れ
を
聞
い
た
時
母
の
顔
色
は
さ
つ
と
変
り
ま
し
た
。
そ
の
楽
曲
は
海
杳
か
な
伊
太
利
の
楽
壇
に
名
高
い
曲
だ
つ
た
の
で
す
。

以上は「幼年世界」に掲載された「小さい探検」、
「少女画報」に掲載された『花物語』の「鈴蘭」からの引用
であり、それぞれ同じく大正五年七月（前者は八月まで）
に発表された作品である。誰もいないはずの部屋から聞
こえてくるピアノの音の正体を突き止めるべく、足を踏
み入れた部屋で登場人物たちが見たものは、果たして何
だつたのか。
「小さい探検」でピアノを鳴らしていたもの、それは
「小ささんの鼠」であつた。一方「鈴蘭」では、「月光に
夢のよう浮き出た一人の外国少女の佛」が音の正体と
して登場したのである。結末も「小さい探検」では玉雄

と花子の無鉄砲な行動を母が諫めながらもその勇気を称
えて終わるが、「鈴蘭」は外国少女の残した鈴蘭の花に、
ふさ子の母が「心からの接吻をして涙ぐ」んで終わる。
ふさ子の母は、母の形見となつてしまつたピアノに会
に来た外国少女に対する同情から、涙を流すのである。
『花物語』に登場する少女たちは、その出来事の悲惨
さに加え、それを享受しているのが同性であるという事
実に同情する。そこには少女だからこそ感じ取れる情緒
性といつたものが大きく関わつているといえるだろう。
ピアノの音の正体が悲しい過去を持つ外国少女であつた
からこそ、ふさ子の母は涙し、そのエピソードをふさ子
から聞いた六人の少女たちの目も、憧れに潤んだ黒い瞳
になつただけだ。たしかにピアノの音の正体が鼠ではなく
少女であつたため、「鈴蘭」には涙の余地が生まれた。
だが、同時にそれを見届けようとすると側が女であつたか
らこそ、そこに涙の余地が生まれたとはいえるのである。

（九月）、「二つの貝」（「良友」大正九年七月）、「桜の島」
（「幼年世界」大正十年三月）である。

少女小説『花物語』は、少女という同性のみで構成された世界であるが、ここで挙げる三作品もまた、女という同性のみの世界である。「黄金の貝」を娘と母の物語とするならば、「二つの貝」は二人の少女の物語、「桜の島」は少女たちの物語だ。唯一「黄金の貝」に姫の父親が登場するが、母親に比べ存在感の希薄さは否めない。「黄金の貝」では黄金姫は海に望まれた子として流されることになるのだが、王は黄金姫の入った貝の鍵を母親であるお妃に、と言つて託す。七年後、黄金姫はお妃の手によつて貝を開けられ、目覚めるのである。

「もしも、黄金姫の入った貝を海から取り戻した時
があつたら、その時黄金姫の貝を開けることの出
るのは、世界のうちでたった一人あるばかりだ。そ

これは姫のお母様である妃である。とおつしやいました。

グリムの眠り姫は王子によって目覚めたが、黄金姫は、少女と同性の母親によって目覚めさせられた。眠りから覚めた黄金姫は「お母様」と「花の蕾が開く時の音のやうな声を出して、その胸にすが」。一方、『花物語』の「鬱金桜」（少女画報）大正六年四月には、年上の少女に母親を見る思いで、憧れとも友愛ともつかぬ感情を抱くようになる少女が登場する。

その美しい人は私の手を、つと取つて名を問ふのだつた。はにかみながらも、すなほに答へれば、「まあ、可愛い方。」と私を胸に引きよせる。別れた母の甘いお乳の香を忍ばせるように何か匂ひやかな柔らかな優しい胸に、自分の小さいお合童の頭を埋めて、か

うして、いつまでも夢心地で恍惚としてゐたいと、
私は思ふのだつた。

はつきりと描かれてはいないが、黄金姫が母親に抱く
感情は、「私」がセーラ姉様に抱いたものときわめて近い
ものであつたと考えられる。母によつて目覚めさせられ
た黄金姫は、「花の蕾が開く時の音のやうな声」で応じる
が、それはまさに年下の少女が、年上の少女に親子愛と
は別の濃密な感情を抱くやうになつたことのあるあられで
あつた。黄金姫が発した「お母様」というつぶやきは、
あたかもそこに「お姉様」という響きをもつて聞こえて
くるのだ。

「二つの貝」と「桜の島」も同じく、少女のみが登場
し、そこには秘密めいた友愛の世界が展開されているが、
これら彼女たちの世界を描いた三作品を効果的に印象づけ
るものとして、色調による表現が挙げられよう。「黄金の

貝」で黄金姫が着ていた服と寝かせられていた蒲団は淡紅色であった。「二つの貝」に登場する二人の少女は紅と白の貝をそれぞれ手に取ったことで区別され、今はなき「桜の島」がかつてうす紅い桜色で覆われていたように、女たちは赤と白の世界の中で揺れ動くのである。「黄金の貝」でお妃が娘を待ち焦がれ、訪ね歩き、その眠りを覚まさせてやる様は、単なる親子愛を描いたものではない。そこには女性同士の間で行なわれる新たな目覚めの誘発、「同性を愛する幸い」への誘いがあつたのだ。

吉屋は「同性を愛する幸い」(『憧れ知る頃』交蘭社 大正十二年四月)と題した短文の中で、同性に抱く友愛の感情がもたらす影響について次のように述べている。

そうした時、少女の学校時代に親密な友愛が起きて、大きい勢力となつて成長する。たがいに思い合つて、慕い恋する婉曲な、やさしい桃色のため息のような、

い貝てれ洋紅域紅行
 いをしを服と一で色わ新
 とたま断の少の二あといれたい
 、くうの。女貝の。うと目
 そさんだこの紅手貝一
 魅力持が、時い貝にで
 力をて和服の少女は既
 知いた。白女は既に家
 て。白女は既に家の手籠
 いた貝よりのも紅い貝
 からのよりのも紅い貝
 こそも紅い貝の中ほ
 そ、紅い貝の中ほ
 和服の少女は
 少女は

きれを断る。この時浜辺で拾った女は既に家の手籠の中に紅い
 洋服の少女の手にすはそ
 洋服の少女の手にすはそ
 紅と白の貝を手にする。和服と洋服の少女は白い貝を手にする
 域である。うなまめかしい色でこそ表現でき、禁断の領
 紅といふなまめかしい色でこそ表現でき、禁断の領
 行われたといふなまめかしい色でこそ表現でき、禁断の領

新し目覚めの誘発、その儀式が母と娘の関係の中で
 きれた強い友人愛は、どんなそ人の一生を貫いて、大
 きな影響を与え、そのあろうか

その愛の思いよ。それは、まあ何と
 人のエピソードだろ。この少女時代
 人生の思い出。この少女時代
 人生の思い出。この少女時代

洋服の少女に紅い貝を勧めたのであろう。和服の少女は「同性を愛する幸い」を既に知っていたからこそ、色づいた紅い貝のほうに惹かれるのだ。桜の島は美しい少女のみが住む島で、それはまさに伝説のレスボスを思わせる。その島で取り交わされるであらう少女たちの愛に満ちた生活は、うす紅い桜色にふさわしい。島という隔離された空間は、そして今はもう存在しないという限定された空間は、『花物語』の世界観へとつながっていき、考えられる。

6 童話・『花物語』・少女小説

吉屋唯一の長篇童話「一つのチョコレート」は、浜田広介と同一モチーフを選びながら、チョコレートを描くことで死といふものを他者に伝える語り手として描くことで死を感覚的に書きあらわし、浜田との差異を見せた。

同モチーフを共有する二作品「黄水仙の花」「竜胆の花」

は、童話ではなしえなかつた少女の成長を少女小説が引
 き継ぐ発展形として描かれたが、童話と少女小説との間
 には大きな隔たりがあつた。共通場面を持つ童話「小
 い探検」と『花物語』の「鈴蘭」は一方に涙の余地が
 生まれたことによつて分岐し、少女小説は聞き手側の存
 在の共有をも生み出す。涙する少女たちは、同性の存在
 に対して優しいまなざしを向けるのである。同性の存在
 以上、童話と少女小説『花物語』の差異を比較してき
 たが、童話と少女小説の世界と密接に繋がると特異な作
 品の中にこそ、吉屋が童話の世界から傾斜して『花物語』
 の世界に専心し、以降の少女小説へと傾斜していったき
 っかけがある。『二つの貝』「桜の島」は、同性だけの閉
 鎖された空間、「二つなれば」『花物語』の世界をそのまま
 持ち込んだかのような物語と『花物語』の世界をそのまま
 二誌の童話の世界に、女が女のたぬに書いた女の物語を

持ち込んでいたのである。もつと行ってしまえば、吉屋が『花物語』で展開した少女同士の濃密な友愛に漂い始めたエロスが、童話の世界へと流入し始めていた、ともいえるのだ。これら三作品は、吉屋作品に見る少女性、の生成を探るうえでも、重要な位置を占めているといえよう。童話という世界、「良友」「幼年世界」という発表媒体に収まりきれなかつた部分は、やがて同時進行の『花物語』へと方向の転換を余儀なくされたのである。そう考えると不意に登場するこれら三作品は、童話の世界と『花物語』の世界とを結ぶ橋渡しとして位置づけられると考えられる。つまり『花物語』は、いかなれば吉屋が築こうとした新たな「桜の島」であったのだ。

(1) 今回の調査では、「良友」「幼年世界」以外に「少年少女譚海」「小学少女」「金の鳥」「若草」への作品掲載が判明した。

(2) 吉屋童話は現在『日本児童文学大系第六巻 与謝野晶子 尾島菊子 野上弥生子 吉屋信子集』(株式会社ほるぷ出版 昭和五十三年十一月)などで読むことができるが、収録された吉屋童話の作品解説として田辺聖子氏のものが挙げられる。

(3) 「投書時代」(『文壇大家花形の自叙伝』講談社 昭和十一年十月)

(4) 関英雄氏は「大正期の児童文学」(鳥越信等編『新選日本児童文学I』小峰書房 昭和四十四年六月)の中で次のように述べている。

『良友』の発刊で、コドモ社は、幼児、幼年、少年少女と、三段階の雑誌をもつことになり、

大出版社たる博文館の『幼年画報』『幼年世界』『少年世界』の読物誌系列に對蹠的な、童話系列を整えた。

(5) 浜田には『ひろすけ童話読本(全五卷)』(文教書院大正十三年十一月)、『ひろすけ児童読本(全六卷)』(岡村書店昭和五年九月)の刊行がある。また、昭和二十四年、山形県高島町屋代小学校に初めて児童文学書六十九冊を贈って以来、毎年寄贈を続け、二十八年から「ひろすけ文庫」と命名された。三十九年五月には高島町の鳩峰高原に浜田初めての碑となる「ひろすけ童話碑」が建てられ、「ひろすけ童話」の名は広まっていた。

(6) 濱田廣介『濱田廣介童話集』(新潮社昭和五十年三月)内の坪田讓治解説による。

(7) 昭和二十四年一月、湘南書房より刊行された際に「チヨコレートの旅」と改題。吉屋には他に代表的な童話

集として『赤い夢』（洛陽堂 大正六年十二月）、『野
薔薇の約束』（洛陽堂 大正九年三月）、『てんとう姫
の手柄』（湘南書房 昭和二十年十二月）、『茸の家』
（北光書房 昭和二十三年八月）の四冊があるが、吉
屋は「追憶の断片」の中で「その四冊の童話集は私の
文学へのひたむきな若い心の夢を育んだ揺籃として
私の著作の出发点の記念碑となり私にとってはなつ
かしいものとしてあるだけで満足である」と述べてい
る。

（8）駒 尺喜美氏は「吉屋信子 女たちへのまなざし」（思
想の科学社「思想の科学」昭和五十年九月）において、
「女が女を援ける、女が女を上げます、女が女の犠牲
になる、これが吉屋信子の基本パターンである」と述
べている。

第三章 「睡蓮」論 — 『花物語』における少女たちの裏切り —

1. 『花物語』における「裏切り」

吉屋信子の出世作であり、代表作である『花物語』は、花の名前を題名に持つ、短篇連作小説で、冒頭の七話が、七人の少女達が一人ずつ物語を語っていく形式で展開していく。七話を終えたあと、物語は一旦の小休止を見たが、読者である少女達の人気を博し、連載化された。当初『花物語』は大正五、十三年にかけて「少女画報」で連載されていたが、大正十四年の「睡蓮」をきっかけに掲載誌を「少女倶楽部」へと変え、昭和に入ってから「少女の友」誌上にて既発表作品のリライトを行なっている(1)。

駒尺喜美氏は、『花物語』を「女が女を援ける、女が女をはげます、女が女の犠牲になる」を基本としている(2)。

『花物語』は、基本的にアンハッピーエンドの物語ではあるものの、それは、一方的な別れや、死別といった、別離を主とするものであり、少女主体でなおかつ女性が、に優しい小説であることに変わりはない。だからこそ、少女が少女に少女に手酷い仕打ちを与える、あるいは悪意の有無に関わりなく、結果的に少女を傷つけて終わる数編の物語は、注目に値するといつてよいのではないだろうか。中でも少女間における「裏切り」は、後述の、作中の少女同士の間で交わされる「誓い」が、相互間における友情の証として、重要な意味を果たしていることを考えても、いいかに深いものであり、注目に値するかというところが、いえるだろう。

『花物語』全五十二話の中で、「裏切り」という単語が具体的に用いられているのが「ヒヤシン」と「睡蓮」の二作品であるが、前者は主人公の少女が裏切る側の人間として、後者は、主人公の少女が裏切られる側の人間

として描かれているものである(3)。特に「睡蓮」は、少女同士がひとつのものを競い合い、結果裏切られる、という点で、『花物語』の中でも珍しい作品といえるだろう。

明確に「裏切り」という単語が用いられずとも、「少女が少女を傷つけて終わる作品」という大きな枠組みの中で、『花物語』を見通していくならば、「龍胆の花」「黄薔薇」「桐の花」「アカシヤ」「桜草」という作品群が挙げられる。

これらの作品の分布状況から、少女が少女を傷つけたり、手酷い仕打ちをして終わる物語が、『花物語』の後半に集中して見られるようになることが分かる(4)。

「睡蓮」「ヒヤシンス」以外の作品に関しては、「龍胆の花」のように、ある程度の人間関係が築かれる前に、少女の一方的な恋心から生じた思い込みによって、手ひどい仕打ちを受ける筋のものや、「桜草」のように、相手

の少女が罪の意識に苛まれ、懺悔にも似たつぶやきを主人公に託して終わる、といったものもある。『花物語』の中に於ける裏切りの萌芽は、その意味で明確に「裏切り」という単語の登場する「睡蓮」だと考えることもできるが、作品を見渡していくと、「黄薔薇」という一編の作品の中で、ギリシアの女詩人サツフォを登場させ、同性間の友情について次のように語らせていることがわかる。次の引用は、教師葛城と、生徒礼子が将来を誓い合う場面で、葛城がかつて暗誦したという、「わが袖の記」の中のサツフォの記述を聞かせてやる場面である。

『礼子さん、このサツフォはね、美しい同性の友に熱情を捧げて、裏切られた人なので、美しい同性の友にのエレリスの生れ故郷から首都のミチレネの学窓にありし日も――そして最後に可憐な女隷として売られ、来て、自分の侍女としたメリツタを深くも愛した』

芽は、「黄薔薇」という作品において、既に提示されてい
 たということになる。と考えると考えられる。「睡蓮」という作品
 は、少女の裏切りが明確に表現される。「睡蓮」という作品
 は、これまでになく、競い合う少女というテーマが登場
 し、一方で芸術の道を志す少女が離脱していく様を描い
 た物語であるといえる。競い合う少女は、いずれの頃か
 ら見られるようになる。また、少女の裏切りはどうして
 起こつていくのだらうか。本論では誓いと裏切りとい
 う二つの重要な要素が盛り込まれた作品である。「睡蓮」の
 考察から、少女の裏切りと、『花物語』における「睡蓮」
 の位置を考へることを主眼とし、以下に考察していき
 たい。

2 吉屋信子『花物語』挿絵とともに「少女倶楽部」に掲載
 八月、竹久夢二の挿絵とともに「少女倶楽部」に掲載

い ら 筆 さ
る や を 絶 た
。 む を 得 「 睡
ず 再 蓮 」 掲
び 筆 載 の
を 執 の 冒
る 事 頭
に 際
し、
な っ た 少
た 経 女
緯 が 記 雑
さ 記 誌
れ され 希
て 望 望
か

の 此 勉 強 の 春 パンフレット 黒 薔 薇 創 刊 に 際 し 多 忙 と 自 身
誌 編 集 部 か ら 、 少 女 雜 誌 に 一 切 の 筆 を 絶 ち ま し た が 本
う 此 の 上 お 断 り 申 し 上 げ る に 疲 れ て し ま ひ ま し た 。
や む を 得 ず と 申 し ま し て は 失 礼 で す け れ ど も 、 暫 又
か く こ と に 致 し ま し た 。 花 物 語 は 少 女 画 報 に 続 け て
居 り ま し た も の で 、 昨 年 秋 、 故 あり て 中 絶 さ せ て 居
り ま し た が 、 こ ん ど 単 行 本 の 花 物 語 第 五 卷 を 編 む た
め に 、 か き 足 し て ま ゐ り ま す の で 、 そ の 作 を 本 誌 の
御 懇 望 に よ つ て 月 々 御 披 露 申 し 上 げ る 事 に いた し
ま し た 。 (作 者 し る す) (5)

この「睡蓮」との関連付けを次のように述べている。子との共同生活の破綻から女の友情に絶望した出来事と、

画才あふれる少女が、その才能を妬んだ親友に裏切られ、失意のあまり裏切りのもととなった画才を捨て、人生の片すみで孤高を保つて生きる姿を描いた『花物語』「睡蓮」は、ちようどここの時期に書かれた

吉武氏の述べていることは、吉屋の実験と、作品掲載の隔たりについてである。このことは、横川氏も吉武氏を受け取るように自論の中で論じていることである（7）。

仁代寛子が出品したという展覧会は、「帝展や二科会

ほどの勢力はない」とあるように、物語の時間は、大正

三年の二科会創設以降であり、大正八年開催の「帝展」をさかのぼるものではないことがわかる(8)。
なお、ここで少し美術展の歴史について触れておく。
我が国における博物館・美術館の歴史については伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』第十六卷(大空社平成三年七月)に詳しいが、本邦初の美術展覧会は、明治八年國澤新九郎によつて、新橋竹川町に開かれた絵画展覧会であらうと言われている。國澤は、明治五年に絵画研究の名目で英國に渡り、同七年の帰朝後に平川町に彰技堂という画塾を開いた人物で、明治八年の展覧会は、一門その他の画家の作品を展示したものであったという。また、上野公園の竹の台といえは、上野公園の中心となるオースペースのことであるが、周知の通り、これまで数々の博覧会が開催された地として有名である。同十年には上野公園で第一回内国博覧会が行なわれるが、その際中心的存在であった建築物が、美術館の名称を使った最初の

建物であるという事実は大変興味深い。
翌十一年からは、上野公園の日本美術協会の美術展
会も開催され、以降絵画共進会、東京府工芸共進会、白
馬会などが展覧会を行なった。文部省美術展、通称文展
の、明治四十年創設以降は、日本美術院展覧会、二科会
展覧会、国画創作協会展覧会などが開催されている。
ここで気になるのが、仁代と寛子の出品した展覧会に
ついてであるが、それには、大正期を中心に行なわれた、
日本国内の主要な展覧会（博覧会）の中から、当時の美
術を研究するうえで、主要であると思われるものを選
出した『大正期美術展覧会出品目録』（中央公論美術出版
平成十四年六月）にその詳細が載っている。時期と場所
の一致から考えて、考えられるのは「再興日本美術院」
「国画創作協会」「円鳥会」が考えられるが、今回の考察
では残念ながら、更なる特定には至らなかった。

3 仁代と寛子——「夢想的少女」と「非夢想的少女」
 本作品は、「出来るなら絵筆をもつて世に立ちたい切なる
 願いを秘むる」二人の少女、仁代と寛子が登場する。
 仁代は九州博多の産にして明治維新前までは博多長者
 の一人なりしお祖父様、世が移つてお父さんの代頃か
 ら、倉が売られ、山がうられ、果ては庭を売られてそれ
 から家屋敷、屋根の瓦一枚今は我物ならぬ人手に渡つて
 遂に赤貧洗ふが如くに近寄りかゝつた「家の少女であり、
 一世にときめく閨秀画家柿沼玉園女史の内弟子」として、
 家の雑事から師の使いに至るまで、まめまめしく働く勤
 勉な少女として描かれてゐる。また、「今まで少し馬鹿に
 していたやうな門下の人達にもわかにか、手の裏を返した
 ように仁代に言葉をかけたりします」といつた、仁代の
 入選にあつて巻き起くる周囲の反応を見ても、玉園女
 史門下での仁代の位置といふものが伺えるのではな
 ろうか。家庭内の雑事に従事し、「着物なんか贅沢をいふ

どころの騒ぎ」ではない仁代は、「夢想的な少女」として登場し、描く絵にもまた、その特徴が表れているといえる。「画面いっぱい、池の一部分をうっし取って、睡蓮の花を浮べ、空に浮く白い雲のかけほのかに、花咲く水面（みずも）に夢のようにつつた構図」の仁代の絵は、後述する、初期の『花物語』的世界の影響によるところのものであると考えられる。

対する寛子は「予備海軍中将で今はさる生命保険会社の監査役」を務める人物を父に持ち、「学校も学習院とやら、平民どもの行けない様な学校」へ通う少女であり、苦学に励む仁代と対照的な寛子は、「一週間二度のお稽古日に決しておんなじなりをしては来ない」少女として登場する。また、彼女の描く、東屋、踏石といった具体的事物を構図に取り入れたその絵や、のちに引用する言動からも、この少女が現実的な視点の持ち主であることがわせるといえるだろう。

女達がそうであるように、美少女として描かれていたが、
本文中では二人の少女の美しさを認めながらも、「しかし
いさいにこれを検すれば」と前置いたうえで、寛子の美
を強調して異化が図られていた。では、二人の美の優劣は
どの点で差異化が図られていたのだろうか。
作品中では、二人の美の優劣を語る上で、筆頭に挙げ
られていたのが、寛子の家柄であることから、実は少女
の美が、家柄によっても左右されていくことがわらう。分
それは、「学習院へ行ったというにもかかわらずこの人は
至って平民的で」と、寛子の家柄についても再度触れ、仁
代と寛子の立場上の優劣を決定付けるものとして強調さ
れてきていることから、見逃せない要素であると考えられ
る。さらに本文中では、二人の美を仔細に検討したうえ
で、それ以降、仁代の美しさについて触れず、以下
四つの引用に見られるように、寛子の美しさのみに描写

が偏つていることも、注目すべき点ではないだろうか。

美しい顔が、初夏の日の下、影もなく、照らされて、
やや汗ばむ心地、上気した頬、かろき疲れを覚えて
か、うるんだ眸ざし、げにも寛子は美しい処女の姿
です。仁代はしみじみ姿をみつめて半ば夢心地、水
面に咲く花を描かんとする我なりや、はた地に咲く
このうるわしき生命の花を描く我なりやと少し頭が
混乱いたしました。

『まあ、美しい！』と仁代は思わず讚嘆の瞳をみは
つた。

『かんにんして頂戴、私—私—あの指がいけないん
です—指が—』

寛子は青天のへきれき、美しい瞳をぱつとみひらき
ました。

私、取りつくしまがなくて、しょんぼりしていると、
あなたは見ている間に、睡蓮の花の中に影をかくし
ておしまいになるの、まあその時のきれいだつたこ
と、この世のものならぬ美しさ、黒髪も瞳も、胸も
ただゆらゆらと水渡る花の微風に、打ちなびいて、
足許にむらがつて咲く睡蓮の花が、一きわくつきり
と、睡蓮の精！睡蓮の精！

次に、仁代と寛子という二人の少女の立場を最もよく
表しているのが、以下の四つの引用に見る、仁代の寛子
に対する立場や、入選後の仁代の内面描写であるが、「か
たじけなく、「女王」、「侍女」ということばからは、美
と、いうものが、強さに直結し、美しい者すなわち強者に

ひれ伏すことで喜びを感じる少女としての仁代が伺える。

寛子は一つ年上だけに、どこやら姉様らしい物のいいように。そうした言葉もたよりの無い淋しい仁代とあっては、しかく有難くかたじけなく心嬉しき極みであつた。それゆえ仁代は早速賛成し同意を表した。

二人が、写生の位置を定めるのに、あちら、こちらと小半時、絵日傘つぼめて脇におく、その昔を今に返した京風俗の流行の絵日傘も、仁代は寛子から貰つたのです。

『この色おきらい？』と寛子はいぶかしそうに。『せいいた。』あわてふためいた仁代は思わず声を慄わだつた。お気に入らなそうなんですもの。』

かけます。お嬢様を發揮して寛子はお冠りを曲げ
 その様子に仁代はますますあわてふためきました。
 おお、いつその事『睡蓮咲く頃』一つが当選したの
 だった。なら、仁代の心は躊躇もなく喜びに浸れたでし
 よう。なぜならばその幸福の前に酔い疲れた女王の
 如く寛子の傍に、侍女の如くその喜びを分つみずか
 らを、さらに幸福と仁代は信じたのです。
 て、いい記念でしょうと言う寛子の言葉とは裏腹に、
 その実、仁代の絵の題は寛子がつけた一方で、寛子の絵
 の題名は二人で、つまり寛子の介入があつたからいた
 ものである。ところがわかるが、仁代の見たり知夢ともい
 べきもの。対し、「まあ、大変私がロマンティックな姿で

夢の中にあらわれたわけねえ、睡蓮の精になるどころか、私の画いたあの睡蓮の絵が入選か落選か、今、天下分目の関ヶ原で、会場の中で震えている最中でしよう」(傍点筆者)と一笑に付した発言からも、寛子の仁代に対する上位的なものの方がうかがえるといえるだろう。加えて、二人の少女の決定的な差異は、身分や家庭の境遇に加え、装いの差にこそあると思われる。寛子は「其の数凡そ四十八通り」の白粉を使うような、「化粧をする少女」として登場するが、「化粧をする少女」は、『花物語』全五十二話の中でも極端に少なく、確認した限りにおいて、次のわずかに三作品にしか見られないことがわかる。以下に挙げたのが、『花物語』における化粧をする登場人物についての記述である。

その姿の円く短かい、金魚の直立したように青い藻
じられる。けれども、けっして金魚のよように青い藻

の陰に水泡を吸うという紅い可愛い影ではない。
 宝石づくめの櫛を三枚くつつめぐらし、後生大
 事に囲んだ大きな束髪、もちろんそれからは分の髪
 毛では無い、作りあげた黒髪の形を後からのせて、
 冠せたまもの相違ない。
 円くて血色がよいと、いって、蓄薇色の頬という
 ことは許されない。細かな皺の下に濃く白いものを
 塗つて、その上にトマトの液の浸み出たようにと
 でも思われる。油じみた顔である。眼も鼻も口もす
 べて無意味で、愚かな欲望と小さな虚栄のため、
 使われる道具のようにも思われる。
 (「燃ゆる花」)

千鶴子嬢と――そして初音様、何んたる対照ぞ、紅と
 白、墨と雪、灯の前相対す二つの姿よ、豊頬に紅

さして眉を描き白きをほどこし眼ざむるばかりの色
とりどりの衣うち重ね、あまつさえ黄金の鎖をまと
うて誇らしき人の前には、薄き化粧の跡だになき寂
しき面に侘しき襟もと、古びし紫の袂も萎えしその
ひと。

(「寒牡丹」)

のっそりと出て坐わったのはその夜の読み役を一手
に引き受けたさる婦人―新橋の女髪結お何さんの
新年の傑作でも言うのか番外型の大きな丸鬘を頭
に戴き顔には真白きものを塗り肥えたる肩にすべら
す衣紋、羽織の紐が金鎖でなけばがまんできぬと
ばかりに光らし灯の下に大きくなつてそりかえり
ました。

(「寒牡丹」)

鉾山をこのうち「寒牡丹」では豪家の令嬢千鶴子と、無益の
 が登場するが、化粧の有無によつて、両者の性格の描写
 のコントラストをより際立たせていることがわかる。「浜
 撫子」では、少女の化粧について唯一好意的な描写がな
 され、化粧が、あくまで薄化粧である。少女以外の人物
 が施す化粧に、同じく「寒牡丹」と「燃ゆる花」
 の二箇所が確認され、同じく傲慢で横柄、理不尽さを
 漂わせ、中年女性の描写を助長するものとして用いられ
 ている。

よやくして桜貝の琴爪ができてきた。その宵琴を
 佐紀子はうれしかつた、その桜貝の爪でその縁先へ
 弾いて試みようと思ひ立つた。初秋の氣冷たい縁先へ
 薄化粧をして袂を更えて、
 琴を運んで絃に触れた。

(「浜撫子」)

このことからも、寛子という少女が、仁代に比べ、年齢のうえで年長であるという点とは別に、大人びた少女としての寛子、つまりは大人の女の持つ狡猾さや、計算高さをにおわせた少女としての寛子をあらわしている点ととれるのではないだろうか（9）。

「睡蓮」本文にかえってみると、仁代と寛子との間にある美しさの僅差は、化粧の有無に由来するものであり、
「寒牡丹」で見られた二人の少女のコントラスト同様、
化粧をすす少女は必ずしも良いイメージとしてとはとらえ
られておらず、内面からもたらされるものではない、作
られた美を前面に出す少女としての位置づけがなされて
いるといえるだろう。

また、仁代と寛子と比較するうえで重要となるのは、
「夢」という単語の使用頻度であるといえる。なお、『花
物語』における夢、幻の単語の登場については、既に高
橋重美氏によって指摘されている（10）。論の中で高橋

氏は、「彼女たちの涙に霞む瞳に映った少女たち」が、「惜しみなく与えられた修辞の中で必ず一か所は「夢」や「幻」に喩えられて」いることに触れている。ここで重要なのは、「睡蓮」という物語が、「夢」という単語の最多登場作品であり、夢の世界に同意しない特異な少女が登場するという点で注目すべきであるということだろう。

「睡蓮」本文中には、確認した限りにおいて十八箇所にわたって「夢」という単語が認められる。例を挙げるならば、仁代が寛子をまなざす描写、「しみじみ姿をみつめて夢心地」がその代表的なものであり、仁代が寛子に語る暗示的な夢の場面は勿論のこと、物語全体が「げにも夢のごとく―夢のごとく」といった、幻想的な描写で一貫していることがわかる。「夢」に関する描写は、「睡蓮」の場合、圧倒的に仁代の内情、言動に集中しており、暗示的な夢を見るのが仁代のみであることから、そこには「夢想的少女」としての人物像が浮かび上がってくる。

また、「睡蓮」という花の名には、昼に開花し、夜に閉花するところから「睡眠する蓮」と名付けられた、という由來があることから「睡蓮」のテーマに睡蓮の花を持ち出し、仁代の行動からは、彼女の夢想的な一面が伺えるのではないだろうか。一方寛子という少女は、仁代と対照的に「現実的な少女」として描かれていゝる。その最たるものゝが次の引用に見られるといえるだろう。その最たるものゝ

その仁代はかく語りつつ、いかにも淋しそうだった、その夢を思い出したのは、華やかな笑い声を立ててこの人々のやや持ち前らしいうきうきとした調子で、この『まあ、大変私がロマンティックな姿で、中、あ、わたわねえ、睡蓮の精になるどころか、天下分目の画いたあ、睡蓮の絵が入選か、今、天、下、分、目』の関ヶ原で、会場の中で震えていゝる最中でしょ、う

寛子にとってその夢は仔細もなき笑い話にすぎな
かったのです。

この場面は、暗示的な夢の話を告げた仁代に対する、
寛子の対応である。夢見る少女を一笑に付す少女の構図
は、勿論他の『花物語』作品には登場しないといつてよ
い。夢を「仔細もなき笑い話」に過ぎないとする寛子は、
少なくとも「夢想的少女」の側には属さない少女、つま
り「非夢想的少女」であるといえるのではないだろうか。

4 競い合う少女たち

「睡蓮」という作品は、『花物語』の中でも珍しく、二
人の少女が一つのを競い合う物語として描かれるが、
『花物語』連載再開の一作目である「睡蓮」に、そして
この時期、『花物語』に、「少女同士が競い合う物語」が
登場してきたのは何故だろうか。仁代が寛子に裏切られ

ることになったのも、展覧会という、勝ち負けの生じる競い合いがあったことに起因するが、その意味で少女たちの競い合いが、どうして生まれたのかを探る必要があるだろう。その理由を探るために、「睡蓮」が掲載された雑誌「少女倶楽部」に目を向けてみたい。

「少女倶楽部」は大正十二年以降大日本雄弁会講談社より発刊され続けた少女雑誌であるが、冒頭でも述べた通り、「睡蓮」が発表されたのは大正十四年七月八月のころであり、一時中断していた連載の、再開直後の作品として書かれたものであった。

実は「睡蓮」が発表された大正十四年当時、誌上で、少女達のひそかな人気を集めていた、一つの小説ジャンルが登場があった。それが「運動小説」と呼ばれた一群である。「少女倶楽部」に掲載されていた作品群は、「少女小説」の他に「歴史物語」「学校小説」「長篇小説」「お伽小説」といったいくつものジャンルが多岐に渡って存

在していた。「運動小説」が初めて「少女倶楽部」誌上に登場したのは、大正十三年二月、福田正夫「小さき女王」であり、続いて同年十二月に、小泉葵南「静枝さんの初陣」が発表されている（111）。

運動小説の特徴は、スポーツに励む少女を主人公にした物語で、少女同士の友情や葛藤、父親からの期待や、代表選手としての自分に課せられた責任などの要素を盛り込みつつ、勝ち負けが明確に描かれている点である。

たとえば今福雍之助「地を噛む熱球」（「少女倶楽部」大正十四年四月）という物語は、主人公である愛子が、友人文枝の影響で庭球に目覚めていく話であり、毎年その地の女子師範学校主催で、県下の高等女学校程度の学校から一組までの選手を出場させて挙行する庭球大会に出場することになる、という作品である。紆余曲折を経て選手の座を手にした文枝であったが、直前になり肋膜炎を痛めて出場を断念し、全てを主人公である愛子に託す。

愛子はおさめることにならなう「勝の歌」を受け、見事勝
利をおさめることにならなうのがこの物語の結末と
なっている。いずれも運動小説ではこうした勝ち負けを明確に描い
ており、少女同志が競い合うことがメインになつてい
ることがわかる。また、「地を嘯む熱球」の末尾には、編集
者の注であろうと思われ、次のようなことばが付されて
いる。「運動は身体のためばかりで無く心の修養と言ふ方面
からも考へなくてはなりません。さう言ふ意味から運動
小説は非常に大切なものだと思ひます」このことばか
ら、運動が、少女の心身にとつて勉強同様重要な視さ
れ、そのことがつまりは「日本の女子も運動を少しでも
よいから習つて置きません」と母としてかはゆい子供を
強くそして元気よく育てる事は出来ませない「私の
母さん」「少女倶楽部」大正十二年六月」といふ訓戒へと
通じているといえるのだらう。

運動小説に關しては、まだ考察の余地があり、今回の考察における個々の作家、作品に關する調査については、次章で述べるが（12）、ペンネームから推測するに、これら運動小説の多くが、男性作家の手によるものであろう。このことから、少女雑誌における少女たちの競争という概念が、少なくとも男性社会における競争原理からもたらされたものである、ということがいえるのではない。同時に、この時期これらの運動小説の登場があつたことによつて、少女小説の中に「競争原理」がもたらされ、作品に影響を与えていたのでないかという可能性が考へられる。『花物語』連載再開一作目である「睡蓮」に、競争する少女が登場するのも、こうした時代背景が要因の一つとして挙げられると考へられるのではないだろう。か。では、こうした競争の結果、裏切られることで一方が

離脱することになる本作品の、重要部分となる誓い、そして裏切りについて、以下に詳しく考察していきたい。

5 少女の裏切り

以上の流れを受けて、仁代と寛子という二人の少女は、共に芸術の場において競い合い、勝者敗者の関係になり、一方の裏切りによって、一方が打ちのめされ、挫折の道を歩んでいく、という結末を迎える。寛子は共にスケッチをした睡蓮の池のほとりです、「私のあなたに捧げる友情に誓って――と仁代の手の秘密を守ることを約束するが、仁代の入選に至って、寛子は仁代の手の人並みならぬことを周囲にほめかしてしまふ。「どうせ当選するよう那人は、特別な人よ」「だって、どっか不具だったりする方が意気込みはそりゃ私達の遊び半分のようなものとはちがうでしょうものね」といったことばから、明らかに受賞の喜びの最中、話題の渦中にいた仁代を指している

ことがわかる。寛子のことばを聞き、「思わずしんとした
一座」は、名指しこそしていないけれど、寛子の発言が
暗に仁代を指していることを周囲が悟ったことによると
考えられる。本論で扱う「睡蓮」における裏切りは、寛
子が、仁代の手の人並みならぬことを秘密にすることに
誓ったにも関わらず、その内容を周囲にほめかし、結
果仁代本人も秘密を守る誓いが破られたと自覚した点に
あるとする。では寛子は何故仁代を裏切ったのだらうか。
逆にいえば、仁代は何故裏切られなければならなかった
のであろうか。『花物語』所収の「紅薔薇白薔薇」を取
り上げてみたい。この作品は、伊太利のヴァイオリニス
ト、ミス・サイラーのものと七つの春よりヴァイオリン
を習い続ける二人の少女、麗子と雪子の物語である。舞
台はミス・サイラーの帰国前夜、送別の宴を開いた卓上
で、多くの美味の皿と共に二つの花の鉢を囲んだ二人の

少女が、ミス・サイラー立会いのもと、友情の誓いを交わす。

『先生、きつと私達は、いつまでも、たとえどのようになくとも、仲よくして、聖い友情を持ちます——私たちは、今先生の前に誓います』
と、二人は感激して、声をそろえて、かく答えた。
その答えを聞いた時、ミス・サイラーの顔は、若き聖母のごとく美しく輝いた。
卓上の紅と白の薔薇の花は顫えながら、その喜びを囁き合うようであった。
その夜、二人はさらに誓った。
『ふたありで、ゆびきりをして、一生仲よくすると、約束しました。』と、麗子が仇気ない唇を開いた。
『ええ、きつと、お約束してよ、もし、この約束を破ったら、このゆびはくさってしまふのね』

と、雪子は言いながら、この幼い二人の可愛い小指は二つ組合つて、ゆびきりの誓いを結ぶのだった。

「睡蓮」と並んで芸術に携わる二人の少女というモチーフ、誓いを交わすという場面の共通性がある両作品で、唯一異なるのがこのゆびきりのシーンであるといえる。「睡蓮」で特徴的なのは、仁代の手の指に（絵を描くことにさしつかえないとしながらも）障害がある点である。「花物語」における障害者は、「山梔の花」において、年まだ若き女流彫刻家の滋子が出会う口の利けない少女や、生まれつき左右の足の長さが異なる少女である。「曼珠沙華」の幸ちゃんという少女が挙げられるが、仁代の障害が、足や耳、その他の部位ではなく、手、しかも薬指と小指とがくつついたままであるという特定の部位に限定されていたのは何故だろうか。仁代の薬指と小指がくつついていなければならなかった理由、それは小指がゆび

きりを交わすための重要な指だったからである。ゆびきりを交わすための小指が封じられていたことによつて、仁代は寛子に裏切られるべくして裏切られた。仁代の指の障害は、生来のものであり、寛子のいうような「偶然」では決してない。それは仁代自身も口にする「運命」ともいうべきものだからなのである。ここで、少女たちの「運命」について論及する前に、当時の少女雑誌に見られる、興味深い変化について触れておきたい。次の引用は「令女界」(大正十五年七月)の読者欄「茶話会」によるものである。

▽吉屋先生の(返らぬ日)にいつもながらの先生独特のうるはしい詩の様なけれど力強きを失はない物に、私はひしくと胸せまる思ひが致します。余りに現実化されすぎること頃の少女の世界にかゝるお作はほんたうに私たちは喜びたい位です。美し

き弥生さまの切なる純情よ信子先生ならではの感謝
に涙ぐまれて了ひますものを。(須川 みどり)

吉屋信子『返らぬ日』は「令女界」大正十五年四月十
月に連載された。のちの単行本には収録されていないが、
『花物語』の最終話とされる「薊の花」が「少女倶楽部」
大正十五年三月に掲載された、直後の作品ということに
なる。「先生独特のうるはしい詩の様なけれど力強きを失
はない物」という読者の印象は、つまり、少女たちにと
つての『花物語』世界の印象であると考えてよいだろう。
では、「余りに現実化されすぎるこの頃の少女の世界」
とは、具体的に何を指しているのだろうか。次に引用す
るのは、「少女画報」(大正十三年一月)の読者による短歌
の投稿欄の選者の言葉である。

短歌もまた詩と同じく優れたものがありました。

た。そして無暗に淋しくもないのに、淋しがつたり、
悲しくないのに悲しがるのはまことに芸術としてよ
くない傾きでありますから、どうか深く注意して下
さい。

書 　　そ
　　が 　　し 　　て、 　　同 　　年 　　三 　　月、 　　次 　　い 　　で 　　五 　　月 　　の 　　読 　　者 　　欄 　　に 　　は 　　以 　　下 　　の 　　投
　　見 　　ら 　　れ 　　る 　　。

△皆様。新年号の短歌の欄の一番初めを御覧になり
ましたでせう。「無暗に寂しくないのに淋しがり、悲
しくないのに悲しがる。」全く是は、今迄私が常に
苦々しく思つてゐた事でありました。人生の花をと
云はれる乙女時代に於て、大きい希望と理想と空想
と憧憬があらうとも、決して、悲しがつたり淋しが
つたり又。そう矢鱈に悶えがあらう筈がありません
皆様！お互いに、誇張や虚偽は止めて、真面目に芸

術の道をたどらうではありませんか。(讃岐なげき)

△誇張や虚偽をやめてほしいとは私も痛切に感じて居りました。美しい修飾語の行列より地味でもいゝ。真実の一語がどれだけのぞましか知れませぬ。皆様、ほんとうに誇張や虚偽はやめませうね。(島根れい子)

は 同様に同時期である「少女倶楽部」大正十四年九月に以下、の投書が寄せられている。

□始めから終り迄今更あらたまつて表紙がよかつたの口絵が気に入つたの記事がよかつたのと同じことばかりでは面白くないし読まなくつても大して苦痛でもありませんもの。少倶と読者の仲よし倶楽部

体」ともいふべきものであり、「夢想共有体」である少女たちは、同時に自らの境遇、相手との不条理な別離を「運命」としてとらえ、涙でかすむ視界の先に閉じ込めてしまいが、実は『花物語』における少女たちが、ことあるごとに口にするこの「運命」という単語は、全五十二話中、三十八回登場していることが確認されている。

横川寿美子氏は、少女たちの無力に関し、「少女たちはたいてい相手の悲しみに対し何をもなさないし、仮になしたとしても、それは、父親の助力によっていつとき相手の苦しみを救うか（「5 山茶花」）、心をこめて慰め励ます（「7 名も無き花」）といった程度のことで、根本的な解決につながるものにはならない」としているが（13）、横川氏は、こうした少女たちの態度から、「相手の人生に深く踏み込むことは許されないのだという、あらかじめ設定された関係性の遮断」を読み取り、彼女たちを「安全な傍観者」としてとらえている。傍観者となら

ざるを得ない、少女という非力な立場や、己の無力さ、
 自らの力では、どうしようもない現実が、つまりは少女
 たちにとつての「運命」なのではないだろうか。
 「睡蓮」でいう運命とは、すなわち仁代の指であり、
 先のゆびきりの誓いの重要性を考えると、小指の封印さ
 れていた仁代が、寛子に裏切られたことは、運命である
 といえる。

仁代が寛子に裏切られるという構図はすなわち、夢想
 的少女仁代が非夢想的少女寛子に否定されていく構図に
 的しいといえ、先に取り上げた読者欄に見られる当時の
 風潮を象徴したものであるといえるのではないだろうか。
 それは感傷に訴えた従来『花物語』世界を迎合する少
 女たちを、現実的なものを好む少女たちが批判し始める
 動きを指すが、こうした読者欄に見られる当時の風潮
 が、寛子の仁代に対する裏切り行為に投影されたことは、
 『花物語』的世界の少女たちが、抗いがたい当時の風潮

ろ。ここで仁代が作っていた人形こそ、博多人形なのだ。だが、その源流については、異説が複数存在し、判然としない。博多人形は、「明治時代の中期に至って大きく質的・能的転機を遂げ、それまでの単なる「遊び」としての土俗的人形から観賞用・装飾的対象物へと変化して」いった（14）。「産業史的見地からすれば明治期は博多人形産業にとつて一大画期の時代として位置づけられることになる」とされる博多人形は、大正期に入り、更なる躍進を遂げる。大正時代に入ると、より写真実性を高めようとする動きが見られだし、九州大学医学部の解剖学研究と、室での人体解剖の講義の応用などを始めとし、「武者物製作の場合などでは武器等の考証にも念を入れ、また動物を作るときは動物園に出向いて写生に励む、といふように人形制作に携わる者の格段の努力によって、今日の博多人形への着実な進展がみられるようになった」とさ

てい。当時、写実的な傾向になりつつあった、立体的
芸術品として、博多人形を、仁代が作り出した、いくこと
になつた奇妙な設定は、大変興味深いといえるだろう。
物語の最後、女人形師となつた仁代を描ききつた吉屋の
本意は何だつたのだろうか。
仁代の作り出すその人形は、「己れを裏切りし美しきか
の人に似てゐた。仁代が寛子に似せた人形を作ること、
それは、夢想的な少女が今度は自ら手で新たな少女を
生み出す、つまり夢想的少女が、非夢想的少女を構築し
ていく様を表しているといえるのではない。この物語のラ
スト代末路は閉ざされたわけではなかつた。この物語の
シーンには、書かれない物語の結末を描いた
もの、少女の再生産といつて書かれたものである。
も、だからだ。だからこゝろ、より具体的には少女を表現
き、日本画といふ二次元の表現方法から、博多人形と
いう三次元の表現方法がとられたと考へるのである。
い

ここで仁代が作っていた博多人形は、寛子をかたどつたものであると推測できるが、それは玉園女史が「なかんだか見覚えのある知った人の面影に似通っているようにでした」が、さてそれは誰であるかを思い出すほどの暇も無いと言わしめてしまふほどのものであつた。この一文からは、それが玉園女史の中で寛子の位置づけをあらわしているものであること、また当初は仁代と並んで優れた才能を発揮していたとされる寛子の、芸術家への道のり、離脱、玉園女史の元を同じく去つていった一人の少女として、の可能性を想起させる。仁代が人形に込めた「美しい」は、芸術の域にまで高められた「損なわれぬことのない美」であり、たとえそれが寛子の備えていた美を、たどつたものであつたこと、の域にまで達することのない、利那的な美であつたことをうかがわせる。また、見方を変えれば、仁代が寛子を思い描いて作り

出した博多人形の美しさ、芸術品としての美というものが、あまりに高められすぎ、玉園女史の目にすら、モデルとなつた寛子の佛を見出せないほどになつていた、という可能性も考えられる。物語冒頭で、仁代は自らの境遇から、「石に囓りついても、女の子ながら、志を立てねばならない」と決意し、玉園女史に女中專業の人を別に雇い入れるさせるほどの熱意を見せていた。物語の中盤、仁代は寛子という華やかな少女に主導権を握られ、物静かな少女として描かれるが、仁代の内に秘めた寛子に対する強い情熱や、『花物語』のヒロインにあつて特異ともとれる意志の強さは、既に冒頭において提示されていたのだ。だからこそ、仁代はそこまでの作品を作るこゝろができたのであり、それこそが、玉園女史の惜しむべき仁代の才能だつたと考えられるのである。

仁代のその後については、自らの画会のため長崎を訪れた玉園女史の訪問によつて、我々読者に知らされる。「睡蓮」という作品は、以下の四つの引用に見られるように、「語り手」の個性と「聞き手」の存在感がここここに感じられる作品である。

富士を描けば雲が湧き、琵琶湖を描いたらおのずと船が浮んだなどはちと仰山ですが、まあ物に例えれば、このくらいお上手なんだそうで、

フェルトとか申す厚ぼったい草履（これは内緒の話だがお背の足りない方が大変重宝がるそうで、よく売れますってね）

ですから、鏡台の前に坐つてご自分の顔を彩色する

時間と、絵絹に向かつて彩る時間といずれが多きかと、なにも頭をひねって考えなくても好うござんす。なぜならば、こんな問題は女学校の試験には決して出ませんからね。

『それは好いけど、植物園の睡蓮の花はどうしたの
つて？』

まあ、そう急かずに聞いて頂戴、

では、最後の最後に玉園女史を登場させ、仁代のその後を見届けさせたのは何故だろうか。『花物語』には、「睡蓮」と同じく、「その後の登場人物を見届ける者」を登場させている作品として、前述の「黄薔薇」という作品が挙げられる。「黄薔薇」では、冒頭に登場する葛城みさをの友人、小山さんの叔母にあたる関夫人の話が登場する。関夫人は、結婚によつて退職し、その後任として選ば

れたのが葛城さんであるとい
この関夫人といいう設定にな
さんの噂話に上るのみで、本編には全く介入しない人物
である。それが物語の最後、葛城さんが礼子との将来の
誓いを果たせ、失意のままに教職を辞し、行方をくら
ましてしまった跡を追って、尋ねいくのが関夫人なの
である。物語の最後、冒頭では小山さんの叔母であるとい
定であった。つたはずの関夫人が、葛城さんの叔母であるとい
う設定に取れる描写方が、それはおいても、吉屋の誤謬で
あると推測できるが、それは最後までになって登場してくる
に關係のない関夫人が、何故最後になつて登場してくる
のであろうか。○
最後を見届ける者が、通常の語り手ではなく、関夫人
でなく、はならなかつた理由、それは関夫人が葛城さん
と同じく教師であつたこと、それがどれ。「同業者」であ
ると同じく、関夫人の眼から見た葛城さん、は、どのよう
に映つたのか、

だろ。次の引用は、あと一歩のところ、葛城さんにとり着けず、会えず仕舞いとなつた関夫人の様子である。

かくて、才秀でて思想人に優りてその前途を望み、多しと祝福された若き葛城さんが、その学究も捨て、肉親も去つて、遠く異境に流離のさすらい人となり、つつ影をかきす、その思ひは、かの一聯の謎の詩句ととも、人々には解す事はできなかつた。――ただ、そのれを解しうる人は一人の美しく悲しきかのひとの胸のみであるものを！

「前途を望み多しと祝福された若き葛城さんが、その学究も捨て、肉親も去つて、遠く異境に流離のさすらい人となりつつ影をかきす」とのことになつてしまつたかもしつて、知ることは、関夫人にとつて不可能であつたかもし

れないが、元教師の眼から見ても、優秀であった葛城さんの、教師としての資質は、関夫人の認めるところであつたので、教師としてどうか。だからこそ、女生徒に対する恋情に溺れ、教師という才能を生かせる道を断念した葛城さんの、女ゆえの弱さと教師としての才能を惜しむ気持とを理解する者、見届ける者として、関夫人の登場がなく、それはならなかつたと考えられるのである。そう考えてみると、「睡蓮」において、仁代のその後を見届ける者として登場するのが、玉園女史であり、彼女こそ、単なる語り手では捕らえきれないことのできない、仁代の、芸術家としての真の才能を見届ける者としての役割を担っているといえる。芸術家の道は断念したものの、「やつぱり絵筆にあればどの才ありし子の業ゆえにと、今さらながら「仁代を惜しんだ玉園女史のまなざしは、生活苦に負けて作る博多人形に込められた、仁代の芸術家としての才能をとらえきつていたと考えられるのだ。

以上、「睡蓮」の特異性と、少女像の変化について考察
してきたが、『花物語』における少女たちの裏切りは、「睡
蓮」に至って、新たな少女像を生み出す契機となったと
いえる。夢想的少女が非夢想的少女に裏切られていく過
程からは、従来の『花物語』的ヒロインとの決別、そし
て新たな少女の構築が見られるが、この物語が、芸術家
を志す少女の物語であつたことが、「睡蓮」という作品に
もう一つの意味を与えているといえる。寛子という少女
は仁代の秘密を漏らし、誓いを破ることで仁代を裏切つ
たとはいえるが、寛子は仁代にとつて単なる裏切り者であ
つたといえる。だろつか。
仁代が寛子に惹かれていたのは、外見の美しさが第一
にあつたが、同時に「先生のお宅の西日のあたる四畳半
のせいまいへやに絵絹をのべねならぬ仁代を思いやつて
涼しい我が家の居間へと招くのです」といった親切心や、
それに対する仁代の、「今さらながら、かくも優しい友の

心遣い、仁代の瞳には涙がそつとにじみ出るのでした。と、いつた感謝の心から、「優しく妹をいたわるように仁代の背を撫でて、抱きすくめぬばかり」の寛子の態度に見られるような、内面に秘められた寛子の「処女としての美しさ」をもとらえていたのは、仁代以外の何者でもない。だからこそ仁代は寛子をモチーフとした博多人形を作ったのではないだろうか。『花物語』では、数々の少女たち「少女の美」、外見のみに止まらない、内面に込められた「少女の美」というもの、芸術の域にまで高め、昇華し、表現していった少女は、『花物語』の中でも仁代以外にはないといえる。それが玉園女史なのであり、芸術家としての仁代といおう一面を語る立会人として、機能しているの

本論では、『花物語』における「睡蓮」に至って、少女像が変遷の一転機を迎えていたこと、そしてそれが少女の「裏切り」によつてもたらされたものであつたことが推測され、芸術を志す少女という観点からは、少女の美といふものを、懂れるだけでなく、自らの中に取り入れ、芸術の域にまで高める少女が登場していたこと、といふ二点が、結論として導き出された。少女の「裏切り」は、『花物語』以降の吉屋作品にもしばしば登場し、そのとに關しては今後の考察にゆだねる部分が多いが、今回の考察では、初期の裏切りを考察する上で、代表作といえる『花物語』に搾り、「睡蓮」という作品の位置づけができたといふことが、提示できる一つの結論としていえることである。

(1) 少女雑誌に関する研究としては、中川裕美「『少女の友』と『少女倶楽部』における編集方針の変遷」(『日本出版史料』第9号)『日本エディタースクール』四月)に詳しい。

(2) 駒尺喜美『吉屋信子―隠れフェミニスト』(リプロボート 平成六年十二月)

(3) 『花物語』は、「少女画報」大正五年七月の第一話掲載以来、「少女倶楽部」大正十四年十月の「曼珠沙華」に至るまでの総数全五十二話を全容とすることが多い。実際は、大正十五年に「からたちの花」「薊の花」の発表があるが、これら二編は、のちの単行本には収録されていない。

(4) 今回の調査では、以下の通り初出が確認された。『花物語』は掲載誌を変えてのリライトも存在するため、初出誌の確定には困難を要する。

「龍胆の花」(「少女画報」大正十一年十二月)、
「黄薔薇」(「少女画報」大正十二年四月、五月、七月)、
「桐の花」(「少女画報」大正十三年三月、五月)、
「アカシヤ」(「少女の友」昭和十二年二月)、
「桜草」(「少女の友」昭和十二年七月)。

(5) 作者のことばに見られるように、同年春吉屋は、交蘭社より、一月から毎月一冊「吉屋信子パンフレット」と題された個人雑誌「黒薔薇」を発刊している。「黒薔薇」は八号までしか発刊されなかったものの、吉屋主宰の個人雑誌ということ、その内容も意欲的なものとなっており、吉屋の作家としての独立をうかがわせる。また、「睡蓮」の執筆に際し、掲載誌を「少女画報」から「少女倶楽部」へと変えたことも、作風の変化に少なからぬ影響を与えていたといえよう。

(6) 吉武輝子『女人吉屋信子』(文藝春秋 昭和五十七年十二月)

(7) 横川 寿美子 「吉屋 信子 「花物語」の変容過程をさぐる
— 少女たちの共同体をめぐつて —」(美作女子短期大
学部紀要 平成十三年三月)

(8) また、「フェルトとか申す厚ぼったい草履」の記述
からも、この物語の時代設定が大正時代であることが
うかがえる。宮本馨太郎『かぶりもの・きもの・はき
もの』(岩崎美術社 昭和四十三年一月)によると、女
子が着用していたという「重ね草履」や「表打草履」
などの材質が、藁草や竹皮などからコルク・フェルト
にとって代わったのは大正時代に入ってからのこと
である。なお、この草履は同じく『花物語』所収の「桐
の花」、石川星影「春なれば」(「少女倶楽部」 大正
十三年三月)にも確認された。

(9) そのひとつの根拠として、寛子の用いる白粉が四十
八通りであることに注目してみたい。四十八という数
字からは、この作品の題名が「睡蓮」であることから、

仏教用語である「四十八輕戒」の想起という可能性を考へることにはできないだろうか。四十八輕戒とは、大乘戒の中で罪の軽い四十八条項からなる戒のことを指すが、その中には師友を尊敬しない、人の苦しみを放置する、利益を求めて授戒の師になる、などがある。寛子の使用する白粉の数に込められた意図は、寛子の容姿に対するこだわりを表し、のちの裏切りを予期させる、罪深き女としての一面をほのめかすことにあるといえるのではないだろうか。

(10) 高橋重美「夢の主体化―吉屋信子『花物語』初期作のへ叙情を再考する―」(『日本文学』平成十九年二月)

(11) その他のスポーツに関連する特集のひとつとして挙げられるのは、「女子運動選手を訪ねて」(大正十二年十一月)、「運動選手の内証話」(大正十三年十一月)、「霸権は誰が手に」(大正十四年三月)などが挙

げられる。

少女雑誌には、当時の女学校を取材したものや、才能ある少女を取り上げたものなど、いくつかの口絵写真が用いられているが、当時の「スポーツ」に励む少女」を詳しく知る上で、こうした詳細な口絵写真は、大変貴重なものであるといえるだろう。

(12) 「少女倶楽部」に掲載された運動小説の変遷について、第三章「少女倶楽部」における運動小説について」で考察した。

(13) 横川寿美子前掲論。

(14) 九州産業大学商経論叢第三十九卷第一号（九州産業大学商学会 平成十年七月）

※なお、『花物語』各話の引用は、国書刊行会版『花物語』

（上）（二〇〇三年八月）、（中）（二〇〇三年十月）、（下）（二〇〇一年一月）によるものとする。

第四章 「少女俱樂部」における運動小説について

1 運動小説の起こり

少女雑誌「少女俱樂部」は、兄妹雑誌である「少年俱樂部」に遅れること、九年後の大正十二年に創刊された。創刊直後の大正十四年七月には、「少女画報」での連載を一時中断していた吉屋信子『花物語』の、連載再開第一作目となる、「睡蓮」が掲載されている。芸術家を志し、競い合う二人の少女が登場する「睡蓮」を考察するにあたり、同時代の同誌他作品を見ていく中で、「睡蓮」掲載当時、密かに「少女俱樂部」誌上に登場していた、あるジャンルの小説群の存在が浮かび上がってきた。「運動小説」と呼ばれた一群である。本稿では、「少女俱樂部」における運動小説に着目し、同誌の創刊から終刊までを追い、運動小説の変遷を時代背景とともに考察していく

(1)。

「少女倶楽部」に初めて運動小説の名が登場したのは、大正十三年二月の福田正夫「小さい女王」（目次では「小さい女王」）であつた。身体が小さく、周囲から「小さい人形さん」と呼ばれることに不満を抱く美佐子は、S校とのテニス対校試合で活躍し、上級生達が果たし得なかつた勝利を手中に収める。周囲の注目を集めた美佐子は、同時に「小さい女王」の称号をも手にする——といつたストリープである。運動小説という分類は、「少女倶楽部」誌上の目次などの作品名に付してある呼称に基づくものであり、その時々において付されていたりいなかったりと、不統一になつてゐるが、本論で扱う運動小説は、「少女倶楽部」創刊から「少女クラブ」改変を経て終刊に至る四十年間に見られる、「スポーツ」に携わる少女、またはスポーツに関連するものを描いた創作作品」、およそ三十五作品を該当作品としてゐる（「少女クラブ」はやがて「週刊少女フレンド」へ引き継がれるが、今回は考察に含ま

ない)。内訳は、テニスもの十三作品、野球もの九作品、運動会もの六作品、陸上もの四作品、水泳もの、バスケットもの、競馬ものが各一作品ずつとなつてゐるが、これら運動小説とは別扱いとし、後述するノンフィクション作品十三作品、映画などの実写となつた作品二作品の存在も確認してゐる。

2・「テニスを描いた運動小説」
「少女倶楽部」における運動小説の始まりがテニスものであつたように、前述の大正十三年二月福田正夫「小さい描かれてゐる。前述の大正十四、十五年、昭和二年に多く見られる。」「微笑む友情」で終わつてゐる。昭和九年七月浅原六郎「大正十三年十二月小泉葵南「静枝さんの初陣」は、日本女子庭球協会主催の日本女子庭球選手権争奪戦出場選

手に抜擢された少女静枝が登場するが、実在する全日本選手権は、大正十一年の日本庭球協会とともに発足され、当初は男子のみ（シングルス・ダブルス）であった。大正十三年からは女子も実施されるようになり（ただし昭和十三年まで期日もコートも男子とは別）、女子テニス普及の時期と一致していることがわかる（2）。日本にテニスが入ってきたのは、世界最古の競技大会『ウインブルドン』が始まって二年目の明治十八年と言われているが（3）、日本発祥の軟式テニスは、硬式ボールの輸入難から明治十七年ゴムボールを代用したのが始まりである（4）。大正二年には軟式から硬式へと移り変わっていくが、小説内におけるテニスが硬式軟式のいずれであったかは、判然としない。唯一確認できたのは、加藤まさを「最後の一点」（昭和六年十一月）における、「可愛い少女選手の戦う軟球のシンブルスの面白味といふものは格別だったの、見物人からも非常な期待が懸けられてみました」と

いう一文のみである。のちの昭和四十八年には、国際軟式庭球連盟が発足し、平成六年のアジア大会では正式種目になることから、日本における軟式テニスの普及率と支持率の高さは、この頃から既にうかがえる。テニスものに限らず、運動小説全般に見られる特徴として、対校試合の場合、少女達の奮闘の裏には、常に母校の名誉が付きまとっている点が挙げられる。過去の対校試合において、涙をのんできた卒業生達から「今年こそはきつと恥を雪いで下さい。我校の名誉のため！」と期待をかけられ（今福雍之介「地を嘯む熱球」大正十四年四月）、少女は「石に嘯りついても勝たねばならない。」（白井桃村「強き祈り」昭和二年十一月）と心を奮い立たせる。勝利を取めた少女達は、「万歳！町立××女学校万歳！」「長谷川さん、よく働いて下さった。」と、学校長や教師達から感謝の言葉を、生徒達からは賞賛の言葉を与えられる―というのがパターンとなっている。また、

それがダブルスの試合だった場合、ペアをめぐる少女同士の友情、嫉妬、葛藤といった要素が特に顕著に見られ、後述する野球や陸上競技、その他のスポーツには見られない、テニスものの大きな特徴として挙げられるといえる。

白井桃村「覇権を得るまで」(昭和二年五月)では、「百万長者で、貴族院議員の一つぶ種、四年イ組の組長として、全校の生徒から、女王のように敬愛せられる、気高く、美しい、そして博い心の持主」である吉田みどりとのペアを望んでいた百合子が、貧しい百姓娘水鳥早苗にその座を奪われたことで嫉妬する。全国女学校庭球大会の初日の夜、高熱で苦しむ百合子を、早苗は一睡もせず看病してやる。寝不足の早苗は、翌日の試合で腕が揮われない。「たとひ敗けたって、自分のやったことは正しい。勝利は一時、友情は永遠だ」と力を振り絞り、試合に臨んだ早苗は、百合子の声援を受け、結果的に「勝利と友

情と、両ながら贏ち得、「慈雨の如きあたかな涙が、こゝろよく頬を伝つて流れるのを感じ」る。また、森竹夫「聖き祈り」(大正十四年八月)では、主人公齋玉翠が、K女学院の創立者を祖父にもち、大いに権力を振りかざしている志田鶴代から、何うぞ私の妹になつて下さいといふ内容の手紙を貰う。玉翠は、小野というテニス選手少女に心惹かれていたのだが、鶴代の嫉妬による妨害で、ペアを組んでいた小野と千代子は、代表選手になる機会を奪われてしまう。急遽玉翠は、小野の代わりになる合に出、ダブルス試合で千代子と共に優勝を収める。物語最後は、思惑にも屈せず、耐え抜いた玉翠らに、鶴代が「罪深い私を赫して下さい」と謝罪し、それを見ていた校長が、「よろしい！すべて赫します！」と、「美しい友情に結ばれてゐた小野さんを加へての三人」を褒め称える、という結末になつてゐる。いづれも、少女雑誌に書かれたものであるという前提

がある以上、そこに少女の友情が描かれるのは自明のこととして、ことにテニスものには、「知子にとっては何事か梯子」(百田宗治「涙の勝利」昭和二年四月)といった、少女間の姉妹のような関係、エス的な結びつきや、前述の反目しあう少女達が描かれる余地があるといえる。そして、互いの友情を深め合って終わる、という結末には、少女達を友情という「調和」へと導く作者の意図が考えられるといえよう。

3 野球を描いた運動小説

テニスものに次いで多く描かれるのが、野球を描いた小説であり、このジャンルには、やはり他の運動小説には見られない特徴がある。「少女倶楽部」における野球ものは、北横「勝利」(大正十四年五月)であり、以降、昭和十二年十月の富田常雄「愛の栄光」に至るまで、随所に点在している。「少年倶楽部」「少女倶楽部」

部「の二誌にわたり執筆していた作家の一人として、小泉葵南が挙げられる。小泉葵南は、大阪毎日新聞社に買収される以前の東京日々新聞記者から、読売新聞記者を経て、大正八年三月までの七年間、雑誌「野球界」の主幹を務めた他、様々なスポーツ、中でも野球に傾倒し、その普及に尽力した人物である（5）。

また、「少年倶楽部」に野球小説や野球記事が多数掲載されるようになった大正十年以降は、丁度加藤謙一が編集長を務めていた時期にあたるのだが、加藤謙一は大正十年から昭和七年まで同誌に尽力した、敏腕編集長であり、のちに「漫画少年」という雑誌を、家族総出で創刊するのことになる人物である。手塚治虫や石ノ森章太郎が見出されるきっかけとなったこの雑誌に、日本で最初の野球漫画であるといわれる「バット君」（井上一雄）が掲載されることを考えれば、加藤の編集長時代の始まりとの縁を考えれば

いられない。

話を元に戻すと、ここで興味深いのは、「少女倶楽部」の野球ものは、「運動小説」であり、「野球小説（物語）」ではないということだ。実は「少女倶楽部」よりも創刊の早い大正三年刊の「少年倶楽部」大正四年十月には、「ゴムマリ団の遠征」（關鐵腕子）という野球ものが確認されており、そこには「野球物語」と付されている。以降「少年倶楽部」には、多くの野球小説（物語）が登場し、「少女倶楽部」の「小さい女王」に遅れること二年後の、大正十五年五月、安倍季雄「野球納豆」において、初めて運動小説という言葉が題名に付される。「少女倶楽部」における野球ものに、「野球小説」と付されない理由、それは一つに、少女小説における野球ものに登場する選手達が、少女達の兄、または弟であり、少女は、それを「見守る者」として登場し、野球自体には重きが置かれて描かれていないことによるものだと考えられ、邦枝完二「選

手の妹」(大正十五年五月)、岡田三郎「選手の妹」(昭和八年十月)、サトウ・ハチロー「勝て勝て兄さん」(昭和十年四月)といった題名からもそのことが伺えよう。つまり、「少女倶楽部」における野球ものは、少女が、プレイヤーとしてではない、観戦する側、選手をサポートする側の人間として描かれていくという点で大きく特徴付けられるのである。ただし、大正十二年には、大阪毎日新聞社主催の女子軟式野球大会が開催されているが、この頃の運動小説を見る限り、依然として野球は少年のスポーツであり、少女における野球の普及率は低かったと考えられる。

少女達は、支える者としての立場を意識し、兄の中学が負けたことを「私が行かなかつたからだわ。私が応援したらきつと兄さんの方が勝つたんだわ。ねえ、さうでせう？」(北極)「勝利にかがやく」(大正十四年五月)と言

い、「姉さんや、木村の姉さんが、皆の勝利を折って上げ

たから勝てたのだよ——と弟たちに言い含める。また、貧しい家庭環境の中で、両親に先立たれ、「弟の母さんになつて、兄さんの奥様のやうに世話をして、そして、小さな『勇敢な主婦』になり澄まさなければならぬ」立場（富田常雄「明星に捧ぐ」昭和五年四月）を要求される少女達は、良妻賢母予備軍そのものであり、彼女達の細やかな心配りは、後述の、「スポーツ美談」として語られるのである。

4・運動会、陸上競技を描いた運動小説からノンフィクション小説へ

意外にも多い運動会ものは、その内容に、マラソン（廣田花崖「愛の少女選手」大正十四年九月）、ランニング（水野葉舟「運動会の日」大正十四年十月）、クラスリレー（白井桃村「輝く路」昭和二年二月）といった徒競走ものから、綱引（田郷虎雄「勝者への道」昭和十二年十月）といったも

のまで含まれる。「日本で最初に開催された運動会は一八七四（明治七）年、東京・築地の海軍兵学寮（のちの海軍兵学校）で催された「競闘遊戯会」だとされており（6）、「運動会とは、タテマエとして遊ぶことを隠したが、富国強兵と殖産興業で遊ぶことを否定された時代に、本当は遊ぶことが大好きな日本人が、からだの底から湧き出す本性によって創り出した、すばらしいスポーツ・イベントだった」のだという（7）。

昭和に入ると、戦前までの間、誌上には陸上競技ものが多く見られるようになるが、ひとえにそれは、女子陸上選手の活躍によるものが大きいであろうと考えられる。オリンピックに初めて女子の陸上競技が加わったのが昭和三年、アムステルダム大会であったが（競技は百メートル、八百メートル、四百メートル・リレー、走高跳、円盤投の五種）、実はそれ以前の大正十一年、「女性の五輪」と銘打った、陸上中心の女性だけの国際競技大会が、パ

リで開催されている（8）。それまで「五輪の真の勇者は男性。女性の役目は優勝者をたたえること」と言われ続けていた中で、女性五輪開催に奮闘すべくうって出たのが、フランスのアリス・ミリアであった（9）。

しかし、日本における女子陸上選手、中でも歴史に名を残した人物を挙げるならば、人見絹枝を忘れてはならないだろう。「少女倶楽部」はこれまでも各女学校の誉高き運動選手をグラビア写真によって追いつけてきたが、その間人見の姿は幾度か「少女倶楽部」誌上に登場し（口絵「或る日の選手」昭和二年九月、「少女グラフ」同年九月）、自身も「世界的記録を目ざして」（昭和三年四月）、「和蘭女王陛下に拝謁の思ひ出」（同年十二月）、「思ひ出の優勝盃」（昭和五年四月）、「万国女子オリムピックを目指して」（同年五月）といった記事を執筆している。

人見絹枝は明治四十年、岡山県に生まれ、現在の日本女子体育大学である二階堂女塾に入学後、既に三段跳に

おいて世界記録を樹立。のちに同塾の専門学校昇格決定
後、大阪毎日新聞社に入社、第二回万国女子オリンピック
ク大会出場後、個人優勝を果たし、走幅跳で世界新記録
を出すなど、昭和に入ってから、多くの輝かしい成績
を残し、世界新記録をも樹立している（10）。昭和六年
八月に、二十四歳という若さでこの世を去った彼女の人栄
光の軌跡は、その年の十月に「スポーツ界の恩人・人見
絹枝嬢」（森田俊彦）といった追悼記事や、昭和七年二月
「人見絹枝物語」と題した陸上競技研究会製作、文部省
後援による「スポーツ教育映画」の写真などのダイジェ
ストによつて紹介されている。
事実、昭和十四年以前の誌上は、多くのスポーツ関連
記事と、いくつかの運動小説が掲載され、その背景には
オリピックの影響があることはいまでもない。日本
八回オリンピック初のオリピックであるが、昭和十五年の第十二回オリ

ンピックは当初、東京が開催予定地であつたにも関わらず、日中戦争によつて大会を返上したという背景がある（11）。昭和十三年五月の「女子スポーツ相談会」では、文部省体育官栗本義彦、東京女子高等師範学校助教授戸倉ハル、後述のスポーツ美談などを執筆した清閑寺健らと、女学校生徒ら数名が座談会を行つてゐるが、そこでは「銃後の護は女子が進んでやらねばならないのですから常に御国に盡くせるやう、体を鍛へ、丈夫にせねばなりません」（栗本）、「今までの運動のやり方は、男のやる事だつたら、女だつてやれないことはないだらうといふのでよくやつたものですが、今はさうでなく、立派な婦人、よい主婦や母を作るための運動といふ風な考へが強くなつて来たやうです」（栗本）といった発言が見られ、「国民を生み育てるための女性」としての体力増強、という意味での運動が、ここでは意識されてゐるといえる。また、それより少し前の昭和五年からは、アムステル

ダム大会で活躍した松木喬の生い立ちを綴った野村愛正「輝く選手」(昭和四年四月)を始めとし、一九三〇年度仏蘭西庭球選手権試合の第四ラウンドで、フランスの強豪ポロトラと力闘した太田芳郎の物語、「運動美談」と銘打たれた、「太田選手」の義侠(昭和五年八月)や、昭和五年十月「十哩競泳の花形」報知新聞後援の競泳大会初島・熱海間を泳ぎ通した唯一の女子選手栗村徳子嬢(「といつたノンフィクション作品が、運動小説に混入し始めるといった特徴が見られる。これらのノンフィクション作品は、昭和九年になると、スポーツ感激小説 竹田敏彦「友よ勝利へ」(昭和九年十一月)、スポーツ美談 清閑寺健「涙の本壘打」(昭和十二年六月)、スポーツ感話 清閑寺健「天国の友に」(昭和十二年八月)といった、「スポーツ××」という位置づけがなされるようになる。「スポーツ」という言葉は、既に昭和八年八月の体育グラフにおいて、「スポーツといふ言葉がよく使はれるやうになりました」

という記述があるが、ここで用いられる「スポーツ」という言葉からは、それ以前に大正十五年に登場していた「スポーツページ」というコーナーの、「運動の宮様方の御近況」や、「バスケットボールの仕方と秘訣」「初めてテニスを習ふ方へ」といった、後の「少女クラブ」におけるスポーツ関連記事に通ずるハウツーマニュアルの要素を含んだ意味合いを持つもの、つまり戦前戦中の国民体力増強という意味での運動とは異なる存在、「スポーツ」としての運動が登場し始めたのだと考えられる。先に述べた野球もので選手達を支えた妹（姉）の苦労は、吉村久夫「茨を越えて」（昭和十二年七月）のサブタイトル、「若きリーグ戦の花形投手、赤根谷選手とその妹の苦闘純愛物語」に集約されているといえるが、それがのちの、根性や苦闘の物語を美談で綴るスポーツ漫画へと繋がっていくといえるのではないだろうか。

5 運動小説の消滅とその後

昭和十四年から終戦に至る昭和二十年まで、運動小説は姿を消す。以降、「少女倶楽部」には運動小説や、それに付随する作品は減少していくが、「少女倶楽部」における運動小説の終焉を見出すならば、昭和十三年二月のスポーツ小説「南方の花」(小山勝清)がそれに該当するだろう。

この時期、「少女倶楽部」には、運動小説に代わるものとして、昭和十四年十一月「かうして体を鍛えませう」(斉藤一男)といった記事や、昭和十五年五月「『体を鍛へよ』大懸賞」と題した懸賞応募(一等商品は支那事変貯蓄債券、二等がリュックサック、三等がフットボール)となっており、七等が跳び縄となつてゐる)、昭和十六年四月「見学グラフ「体を鍛へる学校めぐり」」(川村みお)、同年十一月「お国の体をきたへる子供集団体錬お話会」、また昭和十七年には一年間にわたり、東京女子

体操音楽学校長・藤村高等女学校校長藤村トヨによる特集記事、「胸を強くする運動」(一月)や「お腹と腰を強くする運動」(二月)、「ラジオ体操第一」の正しい仕方(五月)などといった、戦争に関連する体の鍛錬にまつわる特集記事が誌面を占めることとなる。

戦後に入ると、昭和二十一年、「少女倶楽部」は「少女クラブ」へと変わり、小説よりも漫画に傾倒した雑誌になつていく。手塚治虫の「リボンの騎士」を掲載していった、以降の「少女クラブ」には、運動小説と考えられる読物は皆無といつてよく、それに近いものとして昭和二十六年正月特大号の傑作読切小説、小鶴誠を描いた「本のホームラン王」(清閑寺健)、翌年五月の感激実話、「ほまれの日本女子選手」(大門大亮)、以降は昭和二十八年七月、少女が巨人軍の選手をインタビューする記事、「川上選手をたずねて」や、グラビヤ「レスリングの王さま」力道山道場訪問」といった、スポーツ関連の記事

に止まり、「リンクにさいいた三色すみれ」(昭和三十二年一月)が最後のノンフィクション作品として確認できるだけである。

少女達のスポーツに関する興味は、昭和三十三年の一年間にわたって連載される質問相談「教えてちようだい」のコーナーに見られるような、「スケートがうまくなるには」(一月)「卓球がじょうずになるには」(二月)「かけっこに勝つには?」(五月)といった、スポーツ上達のコツから、「せいが高くなるには」(三月)「ふとりすぎではずかしいわ」(十月)といった美容の悩みへと、関心が移っていき、終刊の年となる三十七年十月に至り、「特集あなたもバレーがおどれます」といったハウツーマニユアルの要素を多分に含んだ記事を最後に、幕を閉じるのである。

冒頭において、吉屋の「睡蓮」という作品に、芸術家を志し、競い合う二人の少女が登場することを述べたが、それと「睡蓮」掲載当時、同じ誌面を飾っていた運動小説の、勝利を求めて競い合う少女達は、たしかに一見位相の異なる二つの世界にあるといえるかもしれない。玉木正之氏は、その著書において、体育と芸術、文化との関わりを次のように述べている。

現在のオリンピックでは、芸術・芸能は競い合うものではない、との考えから競技種目からははずされていく。が、「芸術週間」として残され、オリンピックの開催都市は、その期間中、身体競技を開催する（身体文化を見せる）だけでなく、芸術文化（精神文化）を披露する芸術祭を開催することが義務づけられている（111）。

さらには玉木氏は、明治時代に入り、スポーツの流入に伴ない、日本人がスポーツを身体競技としてのみ理解したこと、今日の我々の中には今もおハスポーツ||体育≠文化Vと、いう考えが根付いていることを指摘しているが、その言葉からは、両者が「文化」という枠組みの中で、一体であるべきものであることが読み取れよう。『花物語』において初めて競い合う少女が登場することとなる「睡蓮」が登場する背景には、既に「少女倶楽部」誌上においで、運動小説が台頭し、スポーツという分野で「競い合う少女」達の下地が用意されていたというところが、一つの可能性として考えられるのではないだろうか。

注

(1) なお、「少女の友」をはじめとする、同時代の他雑誌において、運動小説の存在を確認できたが、今回は除外した。

(2) (3) 池田郁雄『激動のスポーツ⑧ テニス』(ベースボール・マガジン社 平成元年九月)

(4) 『写真・絵画集成 日本スポーツ史② 近代スポーツ

の現在』(株式会社日本図書センター 平成八年四月)

(5) (6) 小泉葵南『野球ローマンス』(実業之日本社 大

正八年十二月)はしがき、小泉葵南『通俗野球新教範』

(岡村盛花堂 大正九年四月)はしがき

(7) (12) 玉木正之『スポーツとは何か』(講談社現代新書 平成十一年八月)

(8) (9) 結城和香子『オリンピック物語 古代ギリシャ

から現代まで』(中公新書ラクレ 平成十六年六月)

(10) 人見絹枝『人見絹枝 「炎のプリンター」』(株

株式会社日本図書センター
（11）波多野勝『東京オリンピック
社 平成十六年七月』
平成九年六月）
の遙かな道』（草思）

1 『花物語』以降の少女小説

『花物語』は、多くの少女読者を獲得し、吉屋の名を世に広めた作品となったが、一方でその連載期間の長さゆえの悩みもたらした。『花物語』には中断期間が存在する。叶井晴美氏は「この『花物語』連載終了から再開までの期間が、吉屋信子にとって少女小説を捨てるかどうかの判断を下す重要な時期であつた」と指摘している(1)。『花物語』は大正五年七月「少女画報」に一話目となる「鈴蘭」が掲載され、大正十三年十一月まで連載された。約半年間の中断期間を挟み、大正十四年七月「少女倶楽部」に「睡蓮」を掲載。作品を数編書き継いだのち、大正十五年三月をもって終了した。連載再開後の一作目となる「睡蓮」掲載の冒頭に際し、吉屋は次のように述べている。

此の春パンフレット黒薔薇創刊に際し多忙と自身の勉強のため少女雑誌に一切の筆を絶ちましたが本誌編集部から、たいへんに寄稿をお望みになつてもう此の上お断り申し上げるに疲れてしまひました。やむを得ずと申しましては失礼ですけれども、暫くかくことに致しました。花物語は少女画報に続けて居りましたもので、昨年秋、故ありて中絶させて居りましたが、こんど単行本の花物語第五巻を編むためにかき足してまゐりますので、その作を本誌の御懇望によつて月々御披露申し上げますことにはいたしました。(作者しるす)(2)

刊行一度筆を断つたはずの『花物語』であつたが、単行本にあたり不足分を補うため、再び筆を執つたといういきさつが書かれてゐる。しかし、「故ありて中絶」の「故」

が何であつたのかについて詳しく触れられてはいない。
このことはのちに触れる『三つの花』執筆の際、「作者の
言葉」で明かされる吉屋の内実が深く関わっていると思
われる。「睡蓮」は二人の芸術家が競争者となる物語であ
る。吉屋はこれまで『花物語』の中に描かなかつた競い
合う少女という新たなモチーフを取り込むことによつて、
掲載誌の変化に伴い、『花物語』中断後の転換をはかつた
といえる。美しかつた友人に似た博多人形を作ることで、
芸術家としての深化を果たした少女を描く終わり方は、
あくまで自分を裏切つた少女との過去を永遠に閉じ込め
ておきたいと願う少女の姿を強く印象に残して終わる。
だが、その博多人形は、師匠である玉園女史の眼にも、
そのモデルが誰であるかを判別できないほど昇華された
形で表現されていた。このことは仁代の芸術性の高さを
示すものであると同時に、裏切りによつて仁代が受けた
傷が芸術の世界に解き放たれることによつて癒され、克

服されたことを物語っている（3）。それをある種の仁代の成長であるとするのもできよう。一旦の終了を見た『花物語』を経て、吉屋は大正十五年一月から一年間、「少女倶楽部」誌上で『三つの花』の連載を開始する。作品の冒頭の作者の言葉からは、この頃の吉屋が、再びある決断を迫られていることがわかる。以下の部分は「作者のことば」からの引用である。

私は少女小説の筆を断って、大人の小説の世界へ専心したい——こう願ひ、心にも誓つていましたのに：少女雑誌の御依頼の重なるままに、去年の春からひととせの間、又一心に書き出したのが此の『三つの花』の長篇でございます。（4）

吉屋は、「少女小説の筆を断って、大人の小説の世界へ専心したい——」と願ひ、心に誓つていたが、「大人の小

説の場合にも、少女の方達への作品の場合にも同じ心持と努力で「臨む」という結論を導き出す。『三つの花』は吉屋にとつて、自身の「過去の少女小説の型を破つて、或る変化を示したものだ」がよくわか「つた作品であつた（5）。それと同時に「『三つの花』の長篇」（傍点論者）とあるように、この作品が「長篇」であることを意識していることがわかる（6）。少なくとも分量の点で『花物語』とはま「つた」く異なつたものが、少女の読み物に求められるようになつたのである。吉屋にとつての『花物語』は、「過去の少女小説の型」と見なされ、そこから脱するために『三つの花』は書かれたのであつた。

「少女小説」と「大人の小説」二つの道を並走することを決めた吉屋は、次第に長期連載による作品を多く執筆し始め、テーマの転換をはかることで、『花物語』世界からの脱出を試みようとした。『三つの花』は、三姉妹の物語であるが、父の死後、母と共に家庭の危機を乗り越

えようとすゝる物語展開は、『若草物語』を想起させる。長女は妻となり、次女は父の意志を継いで学問の道を選び、三女は伯母夫婦の娘として生きるという結末は、なすすべもないまま運命に翻弄されてきた『花物語』の少女たちとは異なり、三人の少女がそれぞれの生き方を自ら選び取つていくところとくに特徴がある。そこには吉屋が『花物語』世界から脱却しようとしていた動きが読み取れるだろう。

以降、吉屋は継続的に一つの作品を執筆するようになる。それらの連載期間は平均して一年に及ぶものである。初期の連載小説としては、他に『白鸚鵡』『七本椿』『紅雀』といった作品群があるが、昭和八年「少女の友」誌上に連載された『からたちの花』もその一つである。実は本作には同名タイトルの短編があり、吉屋はそれを、『花物語』の連載終了後、単行本未収録作品として書いている（7）。二つの共通する作品タイトルを考え、

まず想起されるのは北原白秋作詞による童謡「からたちの花」の存在である。白秋作詞による「からたちの花」は二作品に先行するものとして発表されていくが、三つの「からたちの花」の連関はどのようなものであるのか。短編「からたちの花」と長編『からたちの花』はタイトルを同じくしているが、物語内容に強い結びつきがあるわけではない。容姿のせいでも家族から疎まれる少女という設定は、『花物語』所収の「心の花」において既に用いられている。吉屋は設定を同じくする「心の花」に對し、『からたちの花』でどのような差異を見せたのだろうか。『花物語』が終了した大正末期から『からたちの花』が書かれた昭和初年までの間には、吉屋の実生活において大きな変化が見られる。それは一年間にわたる渡欧体験であり、そこで出会った一冊の本『少女ゼット』は、吉屋の手がけた唯一の翻訳書となった。『少女ゼット』は

『からたちの花』と共通するテーマを持つものであり、この二つを考察することは、「心の花」から『からたちの花』に至る変化を結論付けることにもつながると考えられる。『からたちの花』はそれまでの吉屋が描かなかつた特異な少女が登場するが、その変化は『少女ゼット』によつてもたらされたのではないか。『少女ゼット』に『少女ゼット』との出会いを経た吉屋が、それを『からたちの花』へとどう生かしたのか。『からたちの花』という作品が吉屋の長編少女小説の中でどのような位置を占めることとなつたのか。以下に考察していきたい。

2 ・ 短編 『からたちの花』 ― 少女のための花として
 2月 短編 『からたちの花』は『少女倶楽部』昭和元年一
 人の少女を中心を描いてゐる。雑誌では二号にわたる掲
 載のうち、前編が章子の視点、後編が久代の視点から話

られ、前後編は関東大震災によつて分けられている。本作に関する先行研究としては、渡部周子「少女たち」の「Sweet Sorrows」——吉屋信子『花物語』単行本未収録作品「からたちの花」について——（近代文学研究）二〇一一年四月）が挙げられる。「からたちの花」は初出誌において「花物語」と角書きされているにも関わらず、単行本の際には未収録となつていている。渡部は、この物語は少女たちが困難を乗り越えるために「連帯」して行動し、友情を通して「感傷性」と「現実性」の調和した人格が形成される過程を描き、「自我に目覚め」、「魂を深め成長させゆく」少女像を示す物語であると指摘してゐる。それゆえ「少女の「連帯」と「成長」を明確に示した「からたちの花」は、『花物語』全体の構成から見れば異質さが際立つため、単行本に収録されることはなかつた」とするのが渡部氏の指摘である。そのため、少し長

い が こ こ で あ ら す じ に つ い て 触 れ て お く 。
章 子 は 小 学 六 年 生 の 時 、 両 親 と 共 に 大 塚 に 引 っ 越 し て
き た 。 隣 に は 家 主 で あ る 久 代 母 娘 が 住 ん で い た 。
久 代 は 近 所 の 少 年 たち か ら 章 子 を 守 り 、 女 学 校 の 試 験
勉 強 に 関 し て も 章 子 の 苦 手 な 数 学 を 教 え る な ど 、 積 極 的
な 少 女 と し て 描 か れ て い る 。 章 子 は 女 学 校 の 試 験 に 落 ち 、
久 代 と は 学 校 が 別 々 に な る が 、 二 人 の 距 離 は 章 子 の 父 の
転 勤 に よ っ て さ ら に 離 れ る こ と に な る 。 青 森 へ 引 っ 越 し
た 章 子 は 久 代 に 手 紙 を 書 き 送 る が 、 久 代 は 感 傷 的 な 章 子
の 手 紙 を た し な め る よ う な 手 紙 を よ こ す 。 前 編 は 、 関 東
大 震 災 の 報 を 告 げ る 号 外 を 手 に し た 章 子 の 描 写 で 終 わ り 、
後 編 の 冒 頭 は 震 災 に 直 面 し た 久 代 母 子 の 描 写 で 始 ま る 。
母 子 は 無 事 で あ っ た が 、 経 済 的 困 窮 が 二 人 の 身 に 重 く
の し か か る 。 久 代 は 学 校 を 諦 め ざ る を 得 な く な り 、 そ の
悲 し み を 章 子 に 書 き 送 る 。 章 子 は 学 費 を 免 除 し て く れ る
青 森 の ミ ッ シ ョ ン ス ク ー ル を 勧 め 、 自 ら の 貯 金 で 工 面 し

た北海道までの旅費も同封する。親からの反対を恐れた二人は誰にも告げずに青森で落ち合うが、途中で警官に保護され、家族の元へ返されてしまふ。章子の両親は援助を申し出たが、久代の母は依頼への危惧からこれを断る。生活の厳しさは母子に多くの忍耐を強いたが、久代を支えたのは章子の「純厚い友情」であつた。やがて新しい春と共に、会社が復興し、久代母子の経済的困窮が解消されたといふ吉報もたらされる。物語は「災後の都に復興の花を、かたち垣に思ひ出の花を、そして二人の少女の友情的結びの花を咲かせて春は地上万物を慈母の如くに包み込んだのである」といふ言葉で閉じられる。『からたの花』を含め、これら二つの同名作品を考へる場合、そのタイトルから想起されるものは北原白秋作詞、山田耕筰作曲による「からたの花」である。

北原白秋の詩は「赤い鳥」(大正十三年七月)に発表さ
 れ、童謡集『子供の村』(アールス 大正十四年五月)に収
 録ののち、童謡集『月と胡桃』(梓書房 昭和四年六月)
 に再録された。童謡「からたちの花」は、大正十四年一
 月、この詩に山田耕筰が作曲すること、生みだされ、同
 年五月の「女性」に掲載された。曲は、詩のことばを生
 かすべく四分の三拍子と四分の二拍子を交互に用いな
 ら進行し、語りつうたい、うたいつつ語るという性質を
 持つ(8)。「からたちの花」は白秋と耕筰の花にまつわ
 る思い出が込められた作品である。白秋のからたちの花に
 まつわる思い出として、郷里の福岡県柳川で自宅から矢
 留小学校まで毎日通った小道にからたちの垣根があつた
 こと、死の前年である昭和十六年三月に、一家で帰郷の
 旅をした際にも、からたちの垣根の美しさに心ひかれて
 か、軽やかにその小道を歩いたことなどが伝えられてい
 る(9)。

一方、山田耕筈については自身の言葉で次のように語られてゐる。

――私は枳殻の垣まで逃げ出し、人に見せたくない涙をその根方に灌いだ。そのまま逃亡してしまはうと思つた事も度々ではあつたが、蹴られて受けた傷の痛みが薄らぐと共に、興奮も静まつた。さうした時、畑の小母さんが示してくれる好意は、嬉しくはあつたが反つてつらくも感じられた。漸くかわいた頬がまたしても涙に濡れるからだ。枳殻の、白い花、青い棘、そしてあのまろい金の実、それは自営館生活に於ける私のノスタルヂアだ。そのノスタルヂアが白秋によつて詩化され、あの歌となつたのだ。(110)

母の兄である叔父の家に養子にやられた耕筈は、父の

死後、巢鴨の自営館という活版工場に入れられる。それは内部に夜学校のある勤労学校で、近所では耶蘇学校と言われていた。寄宿舎に入った耕笹は工場で職工たちから辛い仕打ちを受ける。耕笹とからたちの花にまつわる思い出はその時生まれたのである。

「からたちの花は白秋の『郷愁』、耕笹の『ノスタルジア』といった言葉によつて共有される花であつた。昭和三十年の白秋童謡選のタイトルに用いられるほか（11）、寺崎浩による山田耕笹の評伝作品のタイトルにも用いられるように（12）、二人にとつてこの花の持つ印象がいかに強いかを物語つてゐる。同時に、『この期の最大の作』であり（13）、『白秋・耕笹コンビになる傑作』（14）として評価され、人々にも広く知られた童謡である。

吉屋信子「からたちの花」にも、からたちの花を詠んだ詩が登場する。しかしそれは白秋のものではなく、作中人物章子が作つたものである。以下に引用する。

花にならばや
からたちの花、
からたちのはな

君が家守る垣に咲き
君が瞳にふれたさに

木の実とならばや

からたちの実、
からたちの実

黄金色づくまろき実を

君がお指のふれもせむ（15）

この詩は、青森と大塚に離れ離れになった章子が、「好
でくならなかつた久代」を「詩の中に歌つて、慕うた
めに詠まれたものである。本作が執筆された当時、既に
白秋作詞による童謡「からたちの花」があつたにも関わ
らず、吉屋は章子にからたちの花を題材にして詩を書か

か て ち
ら し の 届
、 ま 花 か
次 っ に 可
の た よ 可
よ 二 っ 可
う 人 の て 可
な の 示 想
こ 距 さ い
と 離 れ 、
が 強 同 散
わ 調 じ っ
か し 月 て
る て 眺 ま
。 い る め っ
が な が だ
、 こ ら あ
の も ろ
二 遠 う
つ く か
の 離 ら
詩 れ た

か 君 こ 夕 眉
ら が よ 月 と
こ た 家 ひ の 句
の ち の 、 ふ
ゆ の 門 み や
ふ 花 の そ
ぐ ほ ら
れ と に 浮
に り の び
散 り け
り け
む む

の て は る
、 い っ 。
想 る き こ
い こ り こ
は と 明 で
理 が 示 い
解 わ さ う
さ か れ 「
れ る ー 君
ず (1 と
、 6) は
再 。 久
び 章 代
詩 子 「 指
を は 君 し
作 久 が 、
る 代 特 所
に 詩 の 他 の
送 者 を 者
る も 示 作
の し 中

をのるはでこはるらいる慕少年の少女る
 作で、、しまと、点たるの象の詩女こと
 らあ少自身つ、つあの白徴の思展士で目
 せる女身をた花にの。秋とし出をあ代の章
 た。が作かこ仮託しからとを表現した分の想いも実るこ
 理こつた少女の花に見る。つまり章となくしと詠ぼん
 由こでた少女のたのてい。まり章となくしと詠ぼん
 を裏吉屋が白秋の詩を、い、童謡一、章子に詩
 付屋が白秋の詩を、い、童謡一、章子に詩
 けが白秋の詩を、い、童謡一、章子に詩
 る白秋の詩を、い、童謡一、章子に詩
 も秋の詩を、い、童謡一、章子に詩
 の詩を、い、童謡一、章子に詩
 と詩を、い、童謡一、章子に詩
 しを、い、童謡一、章子に詩
 て用なく、童謡一、章子に詩
 、い、童謡一、章子に詩
 童謡一、章子に詩
 一、章子に詩
 か、童謡一、章子に詩
 ら子に詩
 たに詩
 ち詩

の花「が収録された単行本に注目してみたい。
 昭和六年采文閣より出版された『白秋童謡読本』は、
 収録作品にそれぞれ注が設けられている。「からたちの花」
 の項では、「拘橋。花の咲くのは春の末です。比較的大き
 い白い花です」という注に加え、「この主人公は男の子で
 す」という注が書かれている。つまり、この童謡のモデ
 ルが男児であることを敢えて断っている。この限定は作品に
 通雅は男女の別の断りの注に対し、「この限定は作品にと
 って決定的なものではない」としているが（17）、吉屋
 の作品にあつてはこの詩が誰にとつての詩なのか、男児を
 描いた詩なのか女児を描いた詩なのかという点は極めて
 重要である。しかし吉屋の短編「からたちの花」は『白
 秋童謡読本』以前に書かれた作品であるため、執筆前の
 吉屋がこれを前に書かれたものはない。
 童謡「からたちの花」が少女のものではないと判断す
 るもう一つの手掛かりは、同作品が収録された『子供

村』にある。本書は吉屋の「からたちの花」の一年前に
アルスより刊行された。巻末には「挿絵の方は全部清水
良雄さんにお願いました。で、この「子供村」は私
の童謡集であるとともに清水さんの画集でもあります」
と白秋の言葉が添えられてゐる。つまり、本書は詩だけ
ではなく、絵に關しても同等に重きを置いてゐるのであ
る。「からたちの花」のページにはからたちの花の垣根の
前にたたずむ、男児と思しき二人の子供が描かれてゐる。
本書を通読して気付くのは、この書が『子供村』とい
うタイトルを持ちながら、実はその大半の挿絵が男児を
モデルに描いてゐるといふことである。吉屋の短編「か
らたちの花」は、章子から久代という、少女から少女に
贈られた個人的な詩を登場させたことに意味がある。だ
からこそ、吉屋は白秋の詩ではなく、二人の少女の世界
に限定し、他者の介入を許さない詩を章子に詠ませる必
要があつたのである。

このように短編「からたちの花」では白秋の詩と似たような形式を用いながらも、そこに少女の同性的要素を読み込みながら差異を見せた。一方、長編「からたちの花」では、北原白秋による「からたちの花」が二度登場する。一度目は主人公である麻子がさまよい辿り着いた家から聞えてきた曲として、二度目は麻子自身が歌う曲としてである。長編「からたちの花」は短編「からたちの花」とは異なり、少女同士の友愛を描く物語ではない。ここでは童謡「からたちの花」を用いることによつて、歌詞の持つある特性を生かしていると考えられるが、以下、「からたちの花」の考察を通して、作中歌「からたちの花」の意味について考えてみたい。

3 長編「からたちの花」――過去に取り残された少女
長編「からたちの花」は昭和八年一月から一年間、「少女の友」に掲載された。物語は三度にわたる麻子の変化

によつて、大きく四つにわけることができる。麻子の幼少期、北海道での音楽会、大病、温泉地での出来事、の四つであり、そこに関わつてくるのは、母親、貝沼夫人、叔母さまという三人の女性たちである。

この物語の最大の特徴は、美しい姉蓉子と妹の櫻子に挟まれた麻子が、「姉さんの蓉子さんよりはどうも面白くない様」(18)な容姿を持つて生まれた点にある。だが、麻子の「醜さ」が具体的に書かれることはない。麻子の「醜さ」は、自身が自覚して生まれたものではなく、「男の子なら兎も角、女の子は顔がきれいな程、しあはせなんだから」という考えを持つ母親、「お姉さんの蓉子ちゃんの様綺麗でないけれど、その代り心をきれいに」するよう告げた叔母さまの言葉によつて生まれたいものである。容姿のせいで母から疎まれる娘という設定は、『花物語』における「心の花」と共通性を持つが、そのことは吉屋の実体験と関わりを持つものである。父

に似て生まれ、針や割烹といった母の求める価値基準を
 満たせない吉屋は、母が示す愛情と自身が生かされた過
 が異なることに失望する（19）。妹を幼くして失った過
 去も、「心の花」と『からたちの花』の設定に生かされて
 おり、二つの物語が吉屋個人の体験に密接なかわりを持
 つことが伺える（20）。麻子の母親は麻子の取る行動が「恥」につな
 がることを頻繁に懸念することからわかるように、非常に体面
 を重んじる利己的な人物である。母親は幼くして死んで
 しまった櫻子のために訪れた弔問客に次のように述べら
 る。『ほんたうに、残念で思うし、かへつて死ぬもの。』

この言葉は母親が自らを慰めるため、もののはずみで口にした言葉であつたが、それを聞いた麻子は「死んでいゝ子」が自分であると思ひこみ、家出をしてしまふ。歩き疲れた麻子は、とある家の前にある、野薔薇の花の灰白く目立つ低い垣の傍にうづくまる。その時、麻子の耳に聞えて来たのが、「からたちの花」の歌であつた。その家には藍子という麻子と同級の少女と、その母である貝沼夫人が住んでいた。貝沼夫人は麻子に優しく接し、麻子にとつての理想的な母親として描かれる。夫人は麻子が持つ「芸術家らしい魂」を見抜き、その才能を開花させるきつかけとして重要な役割を担う。麻子に最初の変化のきつかけをもたらした存在である。子が、藍子の親戚の住む北海道へと旅立つ様子が描かれる。麻子と藍子と貝沼夫人の三人は、そこで開催される音楽会に出演することになる。自分の番になりステージ

に立つた麻子は、緊張のせいで声が出せなくなる。藍子によつて窮地を救われた麻子は、アンコールを乞われ、
「からたちの花」を選曲する。最初からたちの花」が登場する重
要な場面は二か所ある。最初に麻子が歌を耳にした場面
と、夏の音楽会で歌う場面である。麻子が最初に歌を耳
にするのは、家出した先で辿り着いた藍子の家の前であ
った。「その歌は麻子も知つてゐる歌」であり、麻子は「追
はれて来た小犬」のように見知らぬ人の家の垣の傍にう
ずくまつて歌を聞く。麻子に変化が訪れるのは、歌の第
五連「からたちの花」のそばで泣いたよ／みんなみなやさし
かつたよ」というフレーズに差し掛かつたときである。
麻子の眼は「涙がいつばいになり、やがてぼく流れ、
暫くすると顔中涙で汚れてしまふ。
佐藤通雅は「からたちの花」の構造について、一連か
ら四連までを、「からたちの春から秋にかけての様子の特

徴をそれぞれの変移においてとらえた、いわば写生であるとし、「現在における状態」を歌ったものであるとしている。しかし第五連は明らかに過去のことを示し、「今まで現在のからたちをうたっていたのが、そのまま泣いた」過去の時点へと移行し、みごとなまでによりみがえったのだ」と指摘している（21）。

麻子は第五連を耳にした時に涙を流している。それはこの歌が現在から過去の時点へと引き戻された瞬間を描いた箇所である。佐藤は最終連の「からたちの花が咲いたよ／＼白い、白い、花が咲いたよ」というフレーズが最初の連と全く同じでありながら、五連を通ることにより重みが倍加したと述べる。「再び現在の状態に立ちかえったはずなのに、そのままのかたちで過去へも清楚な花を咲かせ続けているのである」という指摘の通り、この歌では最初と最後に同じフレーズが繰り返されることによつて、過去から現在へと引き戻される構造になっている。

しかし、麻子の聞いた「からたちの歌」はあくまで第五連までしか記されておらず、最終連までは描かれていない。そのことは、麻子が振り返った過去から立ち直れないまままでいる状態をあらわしている。つまり麻子の時間は過去の悲しみに囚われたまま現在に立ち戻れないでいるのである。

童謡「からたちの花」は、麻子にとって「あの宵の自分のみぢめな哀れな幼ない姿」を思いださせるものであ

る。だが麻子は夏の音楽会でその歌を最後まで歌い切る。そのことは麻子が最終連に至って、過去に囚われていた自分を解放し、時が動き始めたことを意味するものであ

る。「からたちの花」を歌うという行為は、辛かった過去の体験を聴衆の前に開示して見せることであり、それが「大拍手の渦巻」に迎え入れられることで、麻子は「自分といふもの」に初めて自信を抱く。麻子が突如始めた化

粧にあらわられる。だがその化粧は姉が「ふき出すほど無
器用きはまるもの。」「であつた。この麻子の化粧のアンパ
ランスさは、北海道で得た自信をも麻子に。麻子が学校で示
した自己開示の様子を暗示するものでもある。二学期を
迎え、麻子は欠員が出た音楽部の委員に立候補をする。
見事当選したと認識するが、麻子は再び自分が周囲から認めら
れたのだと認識するが、その認識は麻子を一級第一のお
出しやの子に、藍子とも絶交に至つてしまふ。この
ことはアンパランスな化粧に象徴されるように、麻子の
自己開示が周囲とのバランスを欠いて、正しい化粧を教
える。藍子は、麻子の化粧を、なめて、正しい化粧を教
の藍子と絶交する。これは、麻子にとつて自分と認識して
くれる存在を失うことでもある。麻子は転校生としてや
つてくる美少女佐紀の関心を、麻子のおつとめ、しや
自慢話を披露する。佐紀の心を、麻子のおつとめ、しや

復し、「自分を認識させる為」の欲求を満たす存在として
要請される存在であるといえよう。
麻子は社交家である藍子の脅威を恐れ、藍子の悪口を
言うことで佐紀子との距離を縮めようとする。だが、次
第に佐紀子は藍子と交流を深めるようになる。佐紀子の
関心を引き付けた麻子は、受け持ちの先生に宛てて、
学年が変わってからも、今のままの席順にしなくてくれよう、
匿名の手紙を書く。麻子は匿名の手紙の差出人が発覚す
ることを恐れ、そのせいにか高熱を出して寝込み、急性肺
炎になつて入院してしまふ。
家族の面は、麻子が家族の中でも最も注目を集め、
家族の対する愛情をめぐり、家族と麻子の場面であ
し、同時に愛情をめぐり、家族と麻子の場面であ
き出して、いとよい。お見舞いに訪れた姉蓉子に
対し、麻子は「私死ぬかも知れない」と告げる。蓉子
は「もし麻ちゃんさんがそんなになつたら、みんな泣いてし

まふわ「とたしなめるが、「ほんとに泣くかしら？」とい
う麻子のひとことが蓉子をはつとさせる。「妹が今まで少
しも自分達の肉親の愛情を信じて居なかつた」ことに気
付く蓉子の様子は、蓉子たち家族が実は麻子に愛情を抱
いていたこと、それにも関わらず麻子は自分が家族から
の愛情を得ていないと思つていたこと、という二つの事
実を浮かび上がらせる。
麻子は日頃から家族に甘え慣れていなかつたため、わ
がままを言うことなく寝ていたに過ぎないのだが、医師
は、麻子を「忍耐強く病氣と闘つて医者と言ひ付けをよ
く守られる少女」と解釈する。その一言が、母親の麻
子に対する認識を変え、「この女の子になか／＼並すぐれ
た善い氣質」があるのを発見した気さ起こさせる。医
師の一言によつて、再び麻子の心情は家族から見過ごさ
れてしまふのであつた。態度と心情とが乖離したまま、麻
子は周囲の評価に合はせ、涙もろいおとなしい少女へと

だ
と 同
し じ
、 く
気 手
付 紙
か を
な 読
い ん
が だ
、 佐
藍 紀
子 子
は は
手 麻
紙 子
を の
読 変
み 化
、 を
失 病
望 の
す せ
る い
。

私 ど や つ て も す 『
魅 、 つ け 、 私 も だ
力 こ ば ら 意 の の っ
を ん り れ 地 好 き ほ て
感 な あ て の 強 な ん も
じ 弱 の 、 何 い の は と う
な 虫 人 に 度 喧 が こ 私 せ
い の に 親 切 し し や セ ン ち な 麻 子 さ ん と て も 好 き な の よ
わ の 泣 い て ば か り 居 る 麻 子 さ ん だ け 私
』 て ば か り 居 る 麻 子 さ ん だ け 私

き る の 変
送 存 在 藍 わ
つ 在 と 子 っ
た と し であ っ
手 紙 て 登 場 先 っ
を 読 ん だ 藍 子 の 台 詞 に 現 れ て いる 。 床 から 書
。 読 ん だ 藍 子 の 台 詞 に 現 れ て いる 。 床 から 書

このことは藍子の観察眼の鋭さを物語っているといえよう。
ここでは麻子と藍子と佐紀子の関係性を考えてみる。藍子は母からも上級生からも愛される少女であり、「愛に驕れる高慢な小さき女王」でありながら、鋭い観察眼を持ち、「幼ない日から愛情に餓えて居る」麻子にとって、羨むべき存在である。佐紀子は「美しいしつとりした花のような佛」を持つ美少女であり、その美しさは麻子を圧倒させるものでもある。この二人が、いずれも麻子にはないものを持っている入れられないものを持つ少女たちとして配置されていることがある。いわば麻子の持つコンプレックスを体現した存在であるといえよう。麻子の最終的な変化は、この二人との関係性の変化によって最終的に変化する。この二人との関係性の変化によってもたらされる。唯一の最終場面、温泉地での出来事では、家族の中で麻子を

子は叔母さまの娘であるマリコと、藍子佐紀子とともに
近く、の山に登るが、突然の天候の變化に見舞われ、おま
う。麻子は三人の少女たちを宿の女中から聞いたお堂へ
と連れて行き、口もきけずお堂の隅で震える藍子と佐紀
子を保護してやる。中央の御神体の鏡の前には額づいた麻
子は「どうぞ従姉妹とお友達をお守り下さい、私の身に
代へても――と祈る。その時、雷鳴がとどろき、御神
体の古い銅鏡に光が差す。麻子は鏡の中に映った自分の
姿に驚く。

麻子が瞬間ちらと見たその鏡の中の顔は、これが
自分の顔かと思ふほど美しく凛々しく、神々しく溢れた。
口許は引きしまった面の眼には愛情と熱情が溢れた。
つた。は健気な勇気が満ちた賢い立派な少女の顔だ、。

れ、美しい「若き叔母」が登場するが、実は吉屋に叔母は存在しなかった。田辺聖子は架空の叔母を姉とはせず、敢えて叔母とした点について、「姉よりもつとへ母になるものに近く、靈性を獲得するよう思えたからであるろう」と述べている（22）。先にも述べたように、この作品には吉屋の過去の体験が生かされている。母から愛されていけないと思ひこむ少女、麻子を吉屋が自分に見立てた時、必要となるのは叔母様の存在であった。母なるものを求めながらも、実の母とはうまく関係を結べない時期の吉屋が創出した母こそ、この架空の叔母様であったのでは、ないだろうか。「からたちの花」における叔母様は嫁ぐ際、「あなたは蓉子ちゃんのように誰れにも可愛がられる様になる代り心をきれいにして誰れにも可愛がられる様になるのね」と麻子に言い残し、その言葉は幼い麻子に様々な感情を与える。叔母さまは麻子が四つの年に家を出、夫の都合でアメリカへと旅立った数年間、麻子の前からは姿

と成るとに就て、賢く想像と判断を下された。変化
 される、叔母は姪の麻子が御自分の留守の間、
 うな弱者の位に置かぬ子になつたのだ。
 れ大切に扱はれたら、今度は自分も病人のや
 ばりになり、偉いものに苦しむ、家の人から同情さ
 分を人々に、偉いものに苦しむ、家の人から同情さ
 強めたのだし、それから途で、ふと動機で自
 て、又お母様の不注意から、さういふ性質を更に
 と思つた。最初は、麻子が常に人に求めばかり居るから
 困果関係を見抜き、次のような判断を下す。

ここの叔母様は、不在の間の麻子の態度の変化と原因とを見事に分析している。この観察眼の鋭さは、藍子にも通じるものがあるが、叔母様は藍子よりも一段上の高みから麻子を分析していることがわかる。お堂で未来の自分の顔を見た麻子は、普段の生活の中でその顔に近づこうと無理をするが、叔母様は「自分でさう意識してもお顔はどうにもならない」のだと告げる。「神様」にお任せしておけばいいようにしてくれ、「神様」は無駄の苦しみをお与へにはならない。「のだと言い聞かせるのである。叔母様の台詞で目に付くのが「神様」という単語であり、麻子が生まれた時に「心のきれいな人は顔のきれいな人よりも神様は好きなのよ」と発言している。叔母様は麻子の名付け親であり、家族内にしておく麻子の立ち位置を規定し、麻子の行動、心理を見抜くことで麻子の正しい道筋を示そうとする。その高みか「神様」という単語は、高みを想起させる。その高みか

ら見下ろすという叔母様の行為は、麻子の言動を見抜き、判断を下す、といった俯瞰的な母親の立場を示している。麻子は「叔母様こそ麻子の生長を助け、麻子の心の飛躍を見守つて下される方なのだ」と思う。麻子は藍子と佐紀子が帰った温泉場で、叔母様と二人きりになる。お堂の中の鏡の話をしたあと、交わされる言葉はなくなり、やがて沈黙が二人の間に流れる。沈黙してはいたが、「麻子にも叔母様にもお互いの気持はよく分つてゐた」。叔母様の手が麻子の手を握りしめた時、麻子は「愛情が心に溢れ、温かいものが身も心も包んでゆく」のを感じる。二人の間には愛情が通うことで、叔母様と麻子は融解を果たし、麻子は「私はいつまで私——でもそれでいいのだわ、この私をこのまま大切に守つて——という一つの確信を得る。叔母様は麻子に対し、常に俯瞰的な立場で判断と想像を下していたが、叔母様と麻子とが愛情を介して溶け合うことで、麻子は叔母様のような俯瞰的立ち位置

から自分のことを眺める力を身に付けることとなる。このことから、この物語は麻子が叔母様へと接近し、自身の中に取り込むことで成長する物語であるといえよう。以上のように、麻子は三度にわたる変化を経ること、最終的に自己のコンプレックスを乗り越えていく。ここで麻子の見せる成長こそ、「心の花」から『からたちの花』への飛躍を可能にするものである。『心の花』は久代が自らの罪を償うことで浄化され、美しさを獲得する物語である（23）。久代の持つ容姿へのコンプレックスに対する克服は、犯した罪の浄化へと目的がすり替えられ、美は信仰の結果としてもたらされる。久代の獲得した美しさは、あくまで信仰の世界における美しさであり、鏡に映った自分の姿に美しさを感じるのは、教会の中だからである。それを裏付けるように、久代の容姿が教会の外で評価されることはない。過去から現在に至る久代の心的変化が記されることはない。過去、

五歳の久代が、二十歳でキリストの花嫁となるまでの五年間の記述は欠落している。その間の久代の記述を敢えてしないことは、五年間という期間に、久代が信仰に費やした期間としての意味合いをより強める効果をもたらす。

一方、麻子が大きく自己を変容させていく過程には、麻子の持つ「敏感」さが理由のひとつとして挙げられる。本作には「敏感」という単語とともに、「心理」や「感情」という言葉が多く用いられ、「虚栄心」「勇猛心」といった心理感情をあらわす単語も確認できる。このことは、この物語が麻子の心理的な動きを継続的に追いついていくことを示している。そして、「心の花」では描かれなかったものである。では、「心の花」から『私たちの花』に至る、その変化をもたらしただものは何であつたのだろうか。『私たちの花』に至るまでの吉屋の

仕事を眺めた際、まず気付くのは渡欧体験である。昭和に入り再びモチーフを同じくする作品を描いた背景を考えた際、この渡欧体験が吉屋の創作において決して小さいものではなかつたであろう。吉屋は、フランスで一冊の少女小説を手にして、その本は帰国後、『少女ゼット』と名付けられ、翻訳出版された。千代年譜にはこれが吉屋にとって唯一の翻訳書であることが記されているが、『少女ゼット』は昭和五年に刊行されており、時系列で見れば「心の花」と『からたちの花』の間に位置する。『からたちの花』は『少女ゼット』から受けたと思われる影響がいくつか確認できるが、以下、『少女ゼット』と『からたちの花』の比較を通じて、吉屋が『からたちの花』に反映したもの、変容し、取り入れたものを考察していく。

4 吉屋の渡欧体験、『少女ゼット』
大正末期、時は円本ブームに入る。新潮社文学全集の
中に『海の極みまで』が収録されたこと。二万円もの印
税を手にした吉屋は、かねてからの願望であった洋行を
決意する。同行者として、吉屋の生涯の伴侶となつた門
馬千代を伴つての旅であつた。直前には長谷川時雨主催
の壮行会も開かれ、与謝野晶子は歌を詠んだ。菊池寛は
餞別として「文藝春秋」に掲載した「童貞女昇天」に多
すぎるとほどの報酬を送つたという(24)。
昭和三年九月二十五日に日本を出立した吉屋は、途中
まで山高しげり、河崎なつ子、新妻伊都子らの鮮満視察
団に同行、モスクワで中條百合子、湯浅芳子と会い、ド
イツ、ベルギーを経てパリに到着。翌年五月まで滞在し
た。その後欧州を回つた吉屋はアメリカを経由し、昭和
四年九月十三日に帰国する。旅先での体験は、帰国後『異
国点景』(民友社 昭和五年六月)にまとめられた。

数々の国を巡った中でも、吉屋にとって最も印象深い都市はパリであつたと思われ。吉屋がパリに到着したのは昭和三年十月のことだ。吉屋が投宿していたのは「エトワール」の大通りのホテル・モン・フロリー」であるが、ホテルの位置などは不明である（25）。一方で「セーヌ河畔のケイド、ジャベルのマダム・ブルヌ」の家庭に入つた」という記述から、「一五区のミラポール橋に近い現在のジャヴェル港（Port de Javel）」に相当する場所と思われ。と竹松良明は推測する。竹内によれば、石黒敬七が編集発行していた『巴里新報』一四六号（一九二九年一月十三日）の消息欄に吉屋の移転先として「キャトルファージュ街一四番地が記載されてい」という（26）。雄夫、五年には金子光春、岡本一平、かの子・太郎一家、堀口大学、深尾須磨子、六年には林芙美子がパリを訪れている。数々訪れた外国の中でも、吉屋がパリに印

象を深くした理由としては、滞在期間の長さもあるが、パリが吉屋にとつて憧れの土地であったことが挙げられる。岡本一平・かの子らにとつては「貧困のパリ」であった。が住む地「でであつたとすれば（27）、吉屋にとつての「息子である太郎」は「女が強いくいられる国」であつた。吉屋は「読売新聞に、依頼されたパリ便りを書き送つていゝる。」

フランスは日本と同様婦人に参政権があゝりません。フランスでも勿論婦人の参政権を欲しがつてゐる人は沢山あります。しかしフランスでは「我々は十分に尊敬されてゐるからいい」と云つた風の婦人も多い。権を必要としな、い、なんとなれば女性として十分に様です。

(中略)

先進国のフランスでさへ婦人が参政権を貰つてゐないから日本婦人ももらはなくたつていゝなどと云ふ人があつたらそれは飛んでもない間違ひです。フランスは日本の程男女の差別がはげしくなく、婦人は社会の裏面では日本程虐待されてはゐません。この間も、ある姦通した妻に對してその夫が訴へた所が始め、夫の思つた様な云ひかへれば男に有利な判決であつたと云つて男の人達が手を打つてよろこんだ程です。から一般に法律の上でも婦人の位置がどうであるかがお解りでせう。(28)

吉屋滞在当時のパリは「本格的な消費社会・大衆社会」の到来とともに、いろいろな文化が、この間に花咲いた、いわゆる「狂騒の時代」(レ・ザンネ・フオル) (29) であり、女たちが生き生きとした場所でもあつた。そのことが吉屋のパリ滞在をよ

り色濃く印象付けたのだらう。

吉屋の関心は「少女の読み物」にも向かった。帰国後の昭和五年、吉屋は一冊の少女小説を翻訳出版している。千代年譜によると吉屋唯一の翻訳書である。フランスの本屋で見つけた一冊の少女小説は、『少女ゼット』と題され、婦人の友社から出されたフレンドライブラリーシリーズの四冊目として出版された（30）。

本書の原作はマルグリット兄弟による共著である。フランスでは一九〇二年に刊行された。兄のポール（一八六〇—一九一八）は初め文部省の役人であったが、自叙伝『わが父』で文壇に出る。自然主義に属したが、ゾラよりもゴンクールに私淑、一八八七年ゾラを非難した「五人宣言」に署名した。ロシア作家の影響を受けたポールは、写実主義に心理描写を交えた『事物の力』が最も優れているとされている。弟のヴィクトール（一八六六—一九四二）は初め軍人であった。文筆に転じたのち、社会問題に

興味を持ち、女性解放や民族の親和に心を尽くし、次第にコミニスムへ傾いていった。解放された女性を描いて物議をかもした『ガルソンヌ』が最も知られている（31）。兄弟の共同著作は一八九六年から一九〇八年の間行なわれ、『少女ゼット』もその時期に書かれている。

と弟であるヴィクトールの名を広く世に知らしめることとなつた『ガルソンヌ』は一九二二年にフランスで刊行され、日本でも昭和二十五年に創元社より刊行された。自立した女性の自我を描く刺激的な一冊の本は、フランスで想像を絶するほどの大ベストセラ―となつた。吉屋がフランスに赴いた時期も『ガルソンヌ』熱が冷めやらぬ状況であつたと思われ。吉屋が本屋で勧められたと、いう『少女ゼット』も、フランスでは何度も版を重ね読み継がれたものであつたが、日本では吉屋以外の訳書が管見の限り見当たらないのも事実である。ここで気にな

るの吉屋の語学力の程度であるが、正確な裏付けは今

の ところ見当たらず、わずかに洋行前にアテネ・フラン
セに通つていたという記述が確認できるにとどまる。そ
れは吉屋が千代と出会つてからのことであり、二人は將
来フランスに留学してソルボンヌ大学で文学と数学をそ
れぞれ学ぼうと決意していたとされている(32)。した
がつて、吉屋の語学力に関しては、まったく読めなかつ
たわけではないという程度にとどまる。
『少女ゼット』と『からたちの花』は、いずれも一人
の少女の誕生から十五、六歳までの出来事を描いている。
両者を結び付ける共通点は少女の成長を描いた物語であ
るといふことである。同時に、少女の成長は「心の花」
と『からたちの花』を隔てる大きな要素として挙げられ
よう。それでは、『からたちの花』に少女の成長をもた
らした『少女ゼット』とはどのような物語であるか。
吉屋は『少女ゼット』を、「美しいく文章で構成され
た少女の肉体と心理発展の描写を持つて始まり、それ

に終つてゐる散文詩めいた本であるとし、この物語が
「多くの少女小説のやうに」筋があるものではなく、女
主人公ゼットの「十六歳までの心のスケッチ」であると
述べている（33）。

藍子や佐紀子、叔母様といった多くの人物が登場する
『からたちの花』に比べると、『少女ゼット』は、登場人
物が少ない。両親と従兄弟のポーム、乳母のドロテが主
要な人物である。従兄弟のポームは最も身近な異性であ
り、その点は異性の登場しない『からたちの花』と異な
つて、その点は異性の登場しない『少女ゼット』が家庭に
校生活も描かれなため、『少女ゼット』が家庭における
少女の生活を描いた物語であることがわかる。吉屋版訳
書では十七章に分けられ、ゼットの誕生を描いた「赤
やん」（第一章）にはじまり、ゼットの好きな「チョコレ
ート」（第四章）、「お人形」（第六章）、「街にやっ
てきた」曲
馬団」（第十二章）、「仮装舞踏会」（第十三章）、「最初の

んで死んでいくモイズを見たゼットは、「我を忘れて悲し
みの激しい涙にむせぶ。ゼットは初めて愛するものを
失う悲しみを獲得したのである。この最後の死に
向かってゼットが死を理解するよう仕向けられている。
少女にとつて死とは必ずしも最初からすべてが悲しみ
に直結するものではない。ルシルが壊れたことと死であ
ると捉えたゼットは悲しむ。ルシルが去られた頃には、
「押し入れの中のあの可哀いさうなこはれた人形達の中
に葬られて、描かれるのは少女の持つ残酷さである。で
あ。そこにも過ぎ去つたものを持つ残酷さである。女
子のリムと遊ぶでいる時に祖父の死を知つたぜットは、
女中のリナが、「おぢいちゃんのお出かけで、皆様がお見
送りいらつしやつたのですよ」と言つたことに対し、
「何故「おぢい様は死んだ」つて言はないのかしら」と

思う。このことは、大人の気遣いによって表現された死とゼットの中間にある死への理解が食い違っていることを意味する。大人が考える以上にゼットの中には少女の持つ冷静さが潜んでいるのである。ゼットは愛犬モイズの死に至って初めて悲しみに暮れるが、この三つの死は少女が死を理解するまで、そして死というものが悲しみと結びつくまでには段階があることを示している。その段階を描くことが、この物語におけるゼットの成長の描写の一つであるといつてよい。

『からたちの花』における死は櫻子の死である。家族が櫻子ばかり可愛がるので、麻子は病気の櫻子に対し、「櫻ちゃんやん甘えっ子で嫌ひ、死んちまつても、かまはな

いや」と言い放つ。やがて櫻子が死に、姉の蓉子から「麻ちゃんやんが、あんなひどいことを言つたもんだから、櫻ちゃん死んじまつたのよ」と言われた麻子は、「櫻ちゃん、ほうたうく！」と妹の身体を揺すって身悶える。それを

見た父が「櫻子はあんまり可愛ゆい子だから神様が早く天国へ連れて行つておしまひになつたのだよ」ととりなし、麻子は自分のせいで妹が死んだのではないのだと安心する。しかしすぐそばから「櫻ちゃんは今家中に可愛がられて、それで足りないで神様にまで可愛がられて――」と、羨み嫉ましい気持ちで麻子の心を占める。ここで重要なのは、麻子には「死ぬことの恐れ」がはつきりしなかつたとしながらも、櫻子の死を悲しみではなく嫉妬心で表現しているという点である。このことは大変興味深い。少女小説において死というものは、友人、家族との別れの一つとして多く描かれる。たとえば全五十二話あつた『花物語』の中で作中死を描いたものは十話ある。それらの死は「やるせない悲しみ、さびしさ」(コスモス)を抱かせ、「一人残る悲しい自分」(釣鐘草)が、「泪さしぐみ合掌し」(合歓の花)するようなものとして、いづれも悲しみと強く結びついているものである。それに

対し、『からたちの花』の麻子のように死に對し「羨み嫉ましい氣持」を抱いて終わる物語は存在しない。『からたちの花』以前の連載小説に關しても同様である。つまり、吉屋作品における『からたちの花』とは、死に直面した少女の感情を悲しみ以外で表現した初めての作品であるといえる。そのことは、『少女ゼット』における三つの死の描き方を通して、死に對する少女の感情の新たな描き方を吉屋が獲得したことを示しているのではないだろうか。

『少女ゼット』は、ゼットという一人の少女を描くだけではなく、少女から見た大人の世界を描いてもいる。そのことが最も現れているのは「嘘」と題された第十章の物語である。

ある時、ゼットはホームとともに留守番を命じられる。二人は「好奇の本能」の赴くがままに大いに遊ぶ。「家中が自分達の支配下」にあることを考えたゼットは、家の

中を探検して回り、「正式の違反」である梅の実をとつて
むさぼる。「現実と空想の入りまじつた妖精の世界」でゼ
ットはアラビヤのお姫様となり、ポームは強いアラジン
となつて遊ぶのである。帰宅した母親に、一日の出来事
を尋ねられたゼットは、図書室で本を読み、庭を散歩し、
自分たちが「随分大人しく」していたことを報告する。
傍で聞いていたポームは、ゼットの報告に嘘があること
を知つていたが、口を挟む余地がない。そこまでは、「ゼ
ットは仲々気が利いてそれに大した嘘ではない」と思つ
たからだ。だが、ゼットの話が、自分たちが歓待しなか
つたはずのグローシユさんの話に及んだ時、ポームのう
そだ！「と一言が、ゼットを窮地に陥れる。母親
はゼットに嘘をついた理由を尋ねるが、ゼットは答えら
れない。
ゼットは何故嘘をついたのか。ゼットをそうさせたの
は、「彼女が見たり聞いたりする毎日の実例」であつた。

父が汚い帽子を被った男の訪問者に対し居留守を使って
いたこと、母がクリスマスに宿泊させたヴァリツシュ家
の人々を笑顔で送り出したあとに、「おゝうるさい人達！」
と言つていたことを、ゼットは「見て」いたのである。
大人の世界を垣間見たゼットは、「眞実は時々、とても無
器用で馬鹿げた残酷なものであつて、少しの手かげんは、
事をしばく「善く」することを知る。ゼットは「決して生
れつきのうそつき」ではなかつたが、「少し位の修飾や、
事実を曲げる事で、みんな具合よくなれば」という思い
から嘘をついたのである。ゼットのついた嘘は大人に対
する嘘であると同時に、大人のつく嘘でもある。この物
語の特徴は、ゼットが大人の眞似をする少女であるとい
うことであり、ゼットの「スケッチ」した大人の世界が、
ゼットによつて再現されるという関係性は、少女を「ス
ケッチ」することと少女のありのままを描き出す、作品
全体の構造と重なるものであるといえる。

一方、『からたちの花』では二つの嘘が描かれる。一つは三年生になった麻子が春の遠足でついた嘘である。麻子は列に遅れた生徒が、先生に優しく手をひかれているのを見る。自分もそうして欲しいと願った麻子は、「わたし、足が痛いのに――」と嘘をつくが、その嘘は先生によつて暴かれてしまう。妹の櫻子が死んで麻子が家を飛び出した時のことである。さまざまよつた麻子は辿り着いた家で貝沼夫人とその娘藍子に出会う。夫人は麻子に家出の理由を尋ねるが、麻子は妹が死んで悲しかったのだと告げたところである。葉を途切れさせてしまふ。家族からの日頃の扱いに不平不満を持ち、母の一言をきつかけに家を飛び出した。貝沼夫人は、多くを語らない様子から、麻子が亡き妹の幻を追つてさまよつてきたのだと想像して、麻子が意図せぬうちに「美しき嘘」を麻子の中に見てしまふ。

『か
 からの
 たちの
 花』
 とは
 少女の
 欲望を
 描いた
 物語で
 あると
 いえ
 よう。
 。

『私
 はいつ
 まで私
 ーでも
 それで
 いゝの
 だわ、
 この私

をこ
 のまゝ
 大切に
 守つて
 ーと
 麻子が
 最後
 に残し
 た台

詞は、
 これ
 まで安
 定しな
 かつた
 麻子の
 自己が
 安定し、
 確

立して
 いく物
 語の結
 末を示
 すもので
 ある。

だが、
 次の
 立

くつか
 の点か
 ら「私
 はいつ
 つま
 で私
 ー
 の言
 葉は違
 う意
 味を
 はら
 んで

もう一
 度考
 え、
 みた
 時、
 そ
 の言
 葉は
 違
 う
 意
 味
 を
 は
 ら
 ん
 で

く
 るの
 であ
 る。
 。

『か
 らた
 ちの
 花』
 が連
 載さ
 れて
 いた
 のは、
 昭和
 八年

月、
 『か
 らた
 ちの
 花』
 が連
 載さ
 れて
 いた
 のは、
 昭和
 八年

現時
 点で
 は四
 月、
 十二
 月ま
 でし
 か確
 認で
 きな
 かつ
 たが、

読者
 の反
 応に
 は興
 味深
 いもの
 がいく
 つか
 確
 認さ
 れる。

『少
 女の
 友』
 に「ト
 モチ
 ヤン
 クラ
 ブ」と
 い
 う少
 女た
 ち

の投
 稿欄
 が巻
 末に
 設け
 られ
 てい
 る。

や
 編
 集
 部
 へ
 の
 要
 望、
 同
 じ
 読
 者
 で
 あ
 る
 少
 女
 同
 士
 の
 通
 信
 文
 な

どが掲載される。中でも『からたちの花』の感想は最も多い。「からたちの花」の麻子ちゃんに思はず泣かされました。「仙台 小波麗子」(四月)といった麻子の境遇に同情するものが多い中で、「からたちの花」、大好きよ。麻子ちゃん、私と似てる様な気がします」(宮城 丘葉子) (五月)と、麻子との類似を訴えるものが多い。か存在する。「性質も身の上もすべてのもがあまりにも私に似た」からたちの花」の麻子が大好きです」(奈良 中西英) (七月)と、類似を強調するものや、「信子先生の「からたちの花」何んていゝんでせう、私大好きですわでも、私と麻子とよく似てるんですもの、私と麻子、姉妹よ、そして吉屋先生が私達のママなの」(門司 花) (十一月)といったものまで確認できる。確認可能な号の読者欄を確認した中で、『からたちの花』の麻子との類似を訴えるものは全部で三通あった(35)。ハガキの掲載総数からすれば少ないかもしれないが、「次号が待遠し

くてもなりませぬ。「ほんとうにいいわねえ」といった漠然とした感想が多い中で、自己との類似性を訴える投書が『かからたちの花』に集中しているという事実は見逃せない。読者である少女たちが麻子に自身との共通性を見出すというこのことは、麻子の中に潜む欲望を自身の中にも見出すというこのことである。麻子の欲望こそが、読者の内部に潜む少女の欲望を刺激し、二つを強く結びつけた。『かからたちの花』において吉屋が挑戦したのは、読者である少女たちを「スケッチ」することであり、そのきっかけをもたらしただけのものこそ、『少女ゼット』であったのである。『少女ゼット』を読んだ吉屋が感じた「スケッチ」という言葉は、少女の持つリアリティを意味する。ゼットは周囲から愛される少女であったが、吉屋は麻子を愛される少女に設定しないことによつて麻子の欲望を引き出した。麻子の欲望こそ、吉屋の描き出した少女のリアリティであったのではないだろうか。このことは、「少女の友」

に掲載された『からたちの花』の最終回の「新年号予告」からもうかがい知ることができる。

いろく大な意味で大きな問題を残したまゝ、からたちの花は終りました。麻子がこれからどんな生長をとげるか、それはみなみな様の御心の次第であらふと思ひます。鏡の中に見出した、すぐれて心気高い乙女麻子にして下さいます様に切に皆様にお願ひ致します。

「麻子がこれからどんな生長をとげるか」を「みなみな様の御心の次第」であるとする書き方は、麻子の成長を讀者である少女たちにゆだねる立場をとっている。これは麻子という少女が、実は讀者である少女たちの内部に在るのだということを示している。麻子を「生長」させるということは、少女たちの中にある麻子「自己」を生

長「させる」ということである。「すぐれて気高い乙女麻子」に「して下さいませます様」という言葉からは、自己を高めて育てることこそ、読者の少女たちの使命であることを暗示しているのである。その意味で、この作品は読者にとつてすぐには解決しえない、「いろく」な意味で大きな問題」を抱えているといえるだろう。吉屋自身は、単行本にする際、この物語について、次のように述べている。

このお話の主人公麻子の、小さな魂のけなげな成長の道を、ちつと見詰て下さる時、心優しき皆様は仄な涙と、それ以上に一つの『考へ』を、持つて下さる筈と信じて、私は此の書を世に送り出します。

ここでの一つの「考へ」とは、読者の少女に対し、吉屋が与えた課題でもある。『からたちの花』における成長とは、麻子の気付きである。『からたちの花』における成長とは、麻

子を読者である少女と接続し、これまで虚構の世界で描
いてきた少女を現実世界へと解き放つことを意味してい
るのではないだろうか。
5 母の物語から父の物語へ
以上のように、『からたちの花』について考察してきた。
本作は、麻子と読者である少女を接続させ、読者に対し
て問いを投げかける、吉屋作品にとって新しい試みであ
った。だが、この作品の持つもう一つの特徴が、以降の
吉屋作品の転換点になったという意味でも、見逃せない
作品であるといえるだろう。最後に「少女の友」誌上に
連載されてきた他の作品を取り上げ、『からたちの花』と
の差異を見ることで、本作が以降の吉屋作品をどう変え
ていったのかについて見ていく。
『昭和八年当時、「少女の友」誌上において『からたちの
花』と同時期に連載されてきた作品に、横山美智子『青

空の子』と上田エルザ『二つの揺籃』がある。『青空の子』は宮部マリ子という少女の放浪物語である。初出誌散逸のため、四く十二月までしか確認しておらず、単行本にもなっていないため、すべてを確認することはできなかつたが、一貫しているのはマリ子が生き別れた母親を探して放浪する少女であるという点である。繰り返しマリ子が口にする、「あたいは、やつぱりあたいの本當のお母さんを探しに行くわ」というマリ子の台詞がそれを象徴している。曲馬団に売られたマリ子は、光の家に保護されたのち、出会った東條夫人の家に暮らしたあと、ロシア人舞踏家のパブロフに実力を認められ、渡欧する、と結末になった。いる。実には東條夫人こそマリ子の本当の母親なのだ、最後まで親子の母親であること、を明かせない身分にある。最後まで親子の名乗りを果たさぬまま、マリ子は旅立っていくのであ

母と共
 に家庭
 の危機
 を乗り越
 えよう
 とする
 『三つ
 の花』、
 考
 えられ
 る。『花
 』以前
 の吉屋
 作品も
 また、『
 父の死
 後』、
 の子』
 と同様
 に、こ
 の物語
 を母と
 娘の物
 語に
 して
 いる
 と
 親を思
 う双子
 の気持
 ちが重
 なり合
 うとい
 う結末
 が、『青
 空』
 少女で
 あると
 いうこ
 と、最
 後は天
 国にい
 っし
 まった
 『青空』
 好転さ
 せると
 少女で
 あるこ
 と、そ
 の真帆
 子が二
 人の母
 親を持
 つ
 り付か
 ない実
 母の寂
 しさを
 埋める
 ことと
 、『様
 々な状
 況を
 ラスメ
 ーソの磯
 子を心
 優しい
 少女へ
 と導き
 うしほ
 が寄
 病気で
 育てら
 れ、冷
 たい態
 度をと
 る父親
 の性格
 を変え
 、
 元気で
 育てら
 れ、実
 母の元
 へと帰
 っとい
 く。真
 帆子は
 母の妹
 にあ
 たる叔
 母の
 を経て
 絆を深
 めてい
 く物語
 である
 。双子
 の母親
 は身体
 がお
 が、別
 れ別れ
 に育て
 られ、
 再会し
 、兄の
 失踪、
 母の死
 、『二
 つの揺
 籃』は
 、双子
 として
 生まれ
 た真帆
 子とう
 し

考 奇 考
え 妙 え
て な て
み 一 み
る 致 る
と は と
、 、
同 垣 同
じ 根 じ
花 の 花
の 用 の
題 い 題
名 ら 名
を れ を
持 る 持
つ と つ
二 二
つ の 二
の 花 の
作 性 作
品 の 品
の 質 の
性 格 性
格 巧 格
の 巧 巧
み の 巧
み の
。

注

(1) 叶井晴美「吉屋信子の少女小説における少女像——花物語」の少女像」『児童文学研究年報』一九九三年三月

年三月

(2) 吉屋信子「睡蓮」(大正四年七月「少女俱樂部」)

(3) 第三章「睡蓮」論——『花物語』における少女たち

の裏切り——参照。

(4) (5) (6) 吉屋信子『三つの花』(講談社 昭和二年)

(7) 他に『花物語』未収録作品として、昭和元年三月号

「少女俱樂部」に掲載されたとされる「薊の花」が挙げられるが、「薊の花」については資料散逸のため未

見。

(8) (9) 『日本童謡事典』(東京堂出版 二〇〇五年九月)

(10) 『山田耕筰著作全集』三卷(岩波書店 二〇〇一

年十月)

(11) 『からたちの花がさいたよ』 北原白秋童謡選』(岩波書店 昭和三十九年十二月)

(12) 寺崎浩『からたちの花』 小説山田耕筰』(読売新聞社 昭和四十五年十二月)

(13) 藤田圭雄『日本童謡史 I』(あかね書房 昭和四十六年十月)

(14) 中路基夫『北原白秋―象徴派詩人から童謡・民謡作家への軌跡―』(新典社 平成二十年三月)

(15) 以下、本文中の引用は「少女倶楽部」昭和元年一月と二月による。

(16) 「此の小さひ幼なげな小曲の作者は、青森の女学校の瀧川章子さん。又此の詩の中の君は府立××のひと、美少女にして姓は三輪、名は久代――二人の家は前には揃つて小石川大塚仲町のほとり、からたちの垣根越しの隣家同志だつたといふ」(「少女倶楽部」昭和元年一月)

(17) 佐藤通雅『白秋の童謡』(沖積社 昭和五十四年十月)
二月)

(18) 以下、本文中の引用は吉屋信子『からたちの花』
(実業之日本社 昭和十一年六月)による。

(19) 田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子』(上)(朝日新聞社
平成十一年九月)

(20) 「文章倶楽部」(大正十五年十月号)には、生れて
一年後に死んだ妹貞子のことを書いている。

(21) 佐藤通雅、前掲書。

(22) 田辺聖子、前掲書。

(23) 「心の花」で繰り返し書かれているのは、久代が
罪を犯した少女であるということである。五つの構成
に分かれた物語のうち、結末部の「五」に至るまで、
「罪」という言葉は九回登場する。反対に結末部では
罪と対比する形で「純白」「聖げに」といった、罪の
浄化を強調する単語が占めている。

(24) 『吉屋信子全集』十二巻 年譜 (朝日新聞社 昭和五十一年一月)

(25) (26) (27) 和田博文、真銅正宏、竹松良明、宮内淳子、和田桂子『パリ・日本人の心象地図 1867-1945』(藤原書店 二〇〇四年二月二十五日)では『異国点景』に書かれた吉屋の記述を元に、パリの足取りを辿っている。

(28) 田辺聖子、前掲書。掲載された「読売新聞」について は年月日不明。

(29) 渡辺淳『巴里・1920年代 シュルレアリスムからアール・デコまで』(丸善株式会社 平成九年五月)

(30) 『日本児童文学大事典』第二巻 (大日本図書株式会社 平成五年十月)によれば、叢書「フレンドライ・

ライブラリー」シリーズは全七巻とされているが、現在確認した他の巻については以下の通り。ディッケンズ原作／松岡久子『ニコラス・ニツクルベイ物語』(第

一卷)、シャーロット・マリリー・ヤング原作／蘆谷蘆村『小さい公爵』(第二卷)、アンリ・ファール原作／小出正吾『ファール昆虫物語』(第三卷)、上澤謙二『動物愛読本』(第五卷)、沖野岩三郎『ユートピア物語』(第六卷)。

(3 1) 『フランス文学辞典』(白水社 昭和四十九年九月)

(3 2) 田辺聖子、前掲書。

(3 3) 以下、本文中の引用は、マルゲリット原作／吉屋信子『少女ゼット』(婦人之友社 昭和五年三月)による。

(3 4) 『少女ゼット』と同年に出版された吉屋の『紅雀』の最後は、まゆみという少女が珠彦という当主である青年と婚約する結末を迎えて終わる。物語の冒頭には「個性のはつきりした少女、寂しくきつい誰にも馴れえぬ悲しい性を持つゆえに苦しい(まゆみ)この美しく冷たい少女が、どう心を成長させたか、それを描い

この物語に見られる異性愛の成就、少女の成長という要素もまた、『少女ゼット』の影響を受けていると考えられる。

(35) ほかには登場人物と自己を同一化した投書として、「私は「二つの揺籃」の眞帆子様の気が致します、」(広島 白百合)(十一月)を発見したが、それ以外には確認できなかった。なお、今回『からたちの花』連載中の号に関しては、入手可能な四、十二月の読者欄を調査した。

(36) 『吉屋信子全集』十二巻 年譜(朝日新聞社 昭和五十一年一月)

※ 『からたちの花』の初出である「少女の友」に関しては、昭和館所蔵(昭和八年八月、十二月)、神奈川近代文学館所蔵(同年九月、十月、十二月)、三康図書館所蔵(同年四月、十一月)をそれぞれ確認している。

第六章 「新しき」ボルネオ論

1 『新しき日』における『風下の国』

吉屋が「主婦之友」の専属特派員として同誌に記事を書き始めるのは昭和十二年のことである。蘭印、仏印をめぐったのは昭和十五、十六年の頃であり、十七年には『新しき日』という作品を執筆した。そこに登場する一冊の本『風下の国』はアメリカ人作家であるアグネス・キースによって書かれたものである。本書は、キースが良人の仕事の都合によりボルネオに滞在した際の生活記録で、*Land Below the Wind*としてまとめられたあと、昭和十五年十月に三省堂より邦訳『風下の国』として出版された。

ボルネオは戦時中、日本の占領下にあった。吉屋はボルネオの周辺地域ではあったものの、現地へ赴き、帰国後に『私の見て来た蘭印』（主婦之友社 昭和十六年五月）

を執筆している。吉屋と並び称される作家に林芙美子がいるが、ペン部隊の紅一点として漢口一番乗りを果たした事件は世間の注目を集めた。アグネス・キース『風下の国』は吉屋と芙美子がともに愛読した作品である。いわばキースは植民地文学を描く作家であり、国と国とを横断する作家である。キースと吉屋を一律に比較することはできないかもしれないが、本論は、インタテクスチュアリテイとしての『風下の国』を通して『新しき日』を読むこととして、ボルネオといふ土地に関わった多くの作家の中の一入として、の吉屋を捉え直すものである。

現在、マレーシア、インドネシア、ブルネイの三つの国によつて国境を分断されているボルネオ島は、十九世紀、北西部をイギリスに、南部から東部をオランダにそれぞれ支配されてきた。第二次世界大戦を迎え、日本が占領下に入り、旧イギリス領は陸軍、旧オランダ領は

海軍の主担当地区としてそれぞれが防備と軍政を担当することとなった。ボルネオは日本人にとつて見逃すことのできない土地として意識され、現地を扱った多くの作品が書かれたのである。

ボルネオの歴史を大きく分けると①十九世紀以前②十九世紀以降(イギリス・オランダ統治時代)③日本統治時代④第二次世界大戦後、の四つに分けられる。本論では作家自身の滞在経験に基づいて書かれた作品を「滞在型」、それ以外の作品を「領地型」とし、具体例とともにそれぞれのカテゴリの特徴を考察していく。以下、時代を追って見ていきたい。

2 イギリス・オランダ統治時代

今日、マレーシア連邦の東半分を形作っている北ボルネオ地域は、かつてブルネイ侯国の支配下にあった。ブルネイは、元来ブルニと呼ばれ、現在のブルネイ侯国付

近を指す名称であつたが、のちにこの地が東西道路の要衝として栄えるようになる、この地名が島全体を指す名称として使われるようになる。十六世紀、ボルネオは周辺地域に於いてスペインならびにポルトガル勢力が活動を始めた時期であつたが、十六世紀末にブルネイ侯国の勢力が衰え始める、国内に内乱が巻き起こつた。そこへ「富と冒険を求めて東洋へやつてきた探険家の一人」であるジェームズ・ブルックが「イギリス政府とサラワクの関係改善をはかるため、ムダ・ハシムへの手紙をとどける役目」によつて訪れ、内乱を鎮め、「王（ラジャ）」の称号を得るに至る（1）。「一八四一年から一九四一年の第二次世界大戦勃発に至る百年間のサラワクの歴史は、ブルック王家の歴史そのものである」（2）といえ、およそ百年にわたつて白人王の時代、ホワイトラジャの時代は続く。やがてボルネオは「1842年に至つて、両者の間に協定が

でき、パンジェルマシンをふくむ南部地方はオランダの領地とするかわりに、同島の北部地方はイギリスの領有を許す（3）ことになる。

日本において、ボルネオを描いた初期の書物のいくつかは聞き書きによるものであった。筑前の国唐泊の廻船伊勢丸に乗っていた船乗りである孫太郎の漂流体験をもとに描いた作品の数々である。以下は、代表的な聞き書き作品『南海紀聞』（石井研堂編校訂『漂流奇談集』博文館）明治三十三年七月からの引用である。

此編は、往年渤泥各国に漂到せし、本州韓泊の水手孫太郎を語る者を、数回余が家に召ひ、本府開船より帰国に至るまでの顛末を、仔細に語らしめ、地理方位等を詰問し、必詳細ならしめて、是を筆記するものなり。

江戸時代、鎖国下にあった日本は難破した船乗りたちが帰還後に語る体験談から、まだ見ぬ外国の知識を得た。宝暦十三年、鹿島灘沖で遭難した伊勢丸は、翌明和元年正月にミンダナオ島南部付近に漂着する。乗組員二十人のうち、生存者十一名は、スールー海域の海賊と思しき住民らに奴隷として売られたが、水主の孫太郎のみがボルネオ島で華僑に買い取られオランダ人の助けを借り、明和八年に帰国を果たした。いくつか存在する聞き書きの中で、『南海紀聞』を中心に聞き書きの整理を行なった八百啓介は、孫太郎への聞き書きによって作成された『南海紀聞』や「漂夫譚」が、「西洋諸国による植民地支配とイスラム教の東南アジアへの浸透が強く認識されたボルネオのイメーヂ」を作り出すきっかけとなったことを指摘している(4)。明治時代になると、夏目漱石『彼岸過迄』にも登場する児玉音松のような冒険譚としてのボルネオが語られるが(5)、次の児玉音松『南

洋』(光華堂 明治四十三年十月)からの引用に示される通り、そこには既に「悉く殆んど無尽蔵と云ふも決して誤りない」資源が眠る土地としてのボルネオがまなざされてきていることがわかる。

▲ボルネオの木材伐取

重なる産物は先づ椰子、珈琲、ゴム、藤蔓、煙草、蜂蜜、樟腦、胡椒、檳榔子、材木象牙、石炭、鉱物(金銀銅)の如きもので、是等は悉く殆んど無尽蔵と云ふも決して誤りないのである。

江戸時代以降明治において描かれるボルネオは、未知の土地の発見に基づいた漂流譚、冒険譚によるものが多かった。日本においてボルネオを扱った作品は、次の日本統治時代にあたる昭和十七年前後に集中しており、そこにはボルネオという土地を意識的に捉え、意味を見出

していきこうとする積極的な姿勢が読み取れる。以下に見ていきたい。

3 日本統治時代—領地型

徵用令が文学者に適用されるようになったのは昭和十六年十月のことであり、徵用は第一次から第三次、再徵用に及び、昭和十六年から十九年にかけて多くの文学者が南方に派遣された。同年十二月、日本の陸海軍は英領ボルネオの上陸を開始し、翌年一月には英領ボルネオ、英領ブルネイを占領、二月には英領ボルネオ、バンジエルマシンの占領を果たす(6)。それまでの「北進南守」から「南進北守」へと変わり、南方への関心が高まり出す時代背景の中で、滞在による見聞録が数多く書かれたが、体験によらず作品を書いた作家たちもいた。ここではそれらを「領地型」作品とし、作家たちの見なかつたボルネオがどのように書かれていったのかをみていく。

まだ見ぬボルネオをはじめとする南方は、少年少女向けの読み物の中に多く見られたが(7)、ここでは横溝正史と南洋一郎の作品を取り上げてみたい。横溝正史『南海の太陽児』は、昭和十五年十一月から翌年八月にかけて「譚海」に連載された。東海林龍太郎という十八歳になる美少年が、亡き父の遺言にしたがって蘭領印度の未開の地にあるという日本人の国「やまと王国」の危機を救うため海を渡る物語である。「やまと王国」は蘭領印度のある島にあり、「純粹の日本人が日本語を話しながら形なり成なりしている」王国として登場する島であるが、現地人とも「やまと王国」を目標して向かう一行の経路からは、ボルネオというひとつの島の姿が浮かび上がってくる(8)。

『少年小説大系 第十八巻 少年SF傑作集』(三一書房 平成四年五月)解説には、この物語が「日米通商航海条約の廃棄」という時代背景の中で、「SFの古典的なテ

「ママ」である。「失われた種族」をもとに、「倭寇の子孫と
いう日本独特の要素」を加え、描かれた作品であること
が指摘されている（9）。

本作品の持つ性格を最も端的に示しているのは、次に
引用した、やまと王国に伝説として語り継がれる「燃え
る水」が発見されるという場面である（10）。

「斧丸、見ろ、見ろ、あの水を……壁をつたつ
て落ちる、あの水を……」

「へえ、旦那、あの水がどうかしましたので。」

「あれは普通の水ぢやない。あの匂ひを嗅いでみ
ろ。あれは燃える水だぞ。」

あゝ、いかにもそれはふつうの水ではなかつた。
滴々として壁をつたつて落ちる液体――まぎれもなく
それは強い臭ひもつた（原文ママ）石油――原油なの
だ。かうして、こゝにその石油が、滴々として垂れ

てゐる以上このうへには、大油田が横はつてゐるに
ちがひない。

横溝は、まだ見ぬボルネオを、熱帯資源に活路を求め
始めた日本の関心に合わせ、「やまと王国」に重ねた。石
油とゴムは代表的な熱帯資源として注目を集めていたが、
油田をつけねらう白人ジョンソンと、やまと王国の生き
残りである龍太郎との戦いは、ミステリー要素を持ちつ
つも、油田を巡つて争う国同士の縮図となつてゐる。同
じく横溝の「八百八十番目の護謨の木」は「ゴム」を話
題に取り入れたミステリー作品であるが、蘭印で産出さ
れる天然のゴムは当時、マレー半島とともに世界最大の
産出量を誇つていた（111）。

「八百八十番目の護謨の木」は、昭和十六年三月、「キ
ング」に掲載された読みきり作品である。大谷慎介は南
洋で護謨園を経営する緒方順蔵に見込まれて秘書として

働いていたが、事業共同者である日正龍三郎殺害の疑いをかけられてしまふ。結婚を約束していた恋人美穂子は、慎介を窮地に追い込んだきつかけとなつたダイイングメッセージの謎を解き明かし、行方をくらました慎介の疑いを晴らすためボルネオへと赴く。日正の残した「〇谷」というメッセージが、映画に写つていたゴム園のゴムの木を観たことで、実はゴムの木につけられた番号「八八〇」を示すものであつたと気付くことが事件の謎を解く鍵となり、事件の真犯人は白人とマレー人の混血児ヌクラであることが明かされる。字星の下に『ゴム』を扱つた作品である、南洋一郎『南十字星の下の探偵要素とは異なり、邦人による現地での成功』横溝の探偵要素とは異なり、邦人による現地の成功物語の聞き書きという体裁をとつてゐる。十六歳の時から二十年間ボルネオでゴム園を経営し相当の成功を収めた小林二郎氏が、亡き父の意志を継いで兄と力を合

せて見事ゴム園を成功させるまでのいきさつを描くものである。物語の冒頭は次のように始まっている。

私の父は大正十年に北ボルネオのサラワク王国の西部クチン地方の土地を払下げてゴム園の経営にとりかゝりました。

今でこそ同地方には日本人が多く進出し、大商会のゴム園をはじめ個人経営の小農園が五十近くもある。りますが、当時はまたそれほどでなく、ことに父が払下げた土地は非常に不便だった。日本はまだ一人も行つてゐなかつたので、日本はまさに、父の父は同地方の日本人の草分けだったわけ

おきこ
きたい。ボ
サラワ
クで最
初にゴ
ム園を
開いた
のは明
治四

十一年頃のこと、清水伝四郎という人物による清水ゴ
ム園の経営であった。その後サラワクで初の日本人企業
となる「日沙商会」を設立した依岡省三が明治四十三年
にサラワクに調査に入る。調査の目的はゴム栽培事業を
興こすことにあった。ゴム農園地を租借した日沙商会（当
時はクチン商会）は事務所をクチンに構えたが、本社は神
戸にあり、クチンはその支店となった。大正六年には資
本金百万円の株式会社となり、ゴム栽培だけでなく、ゴ
ムの製造部門にも着手、徐々に規模を拡大していった。
当時のサラワク王国は、国外企業活動を厳しく制限し、
十社の企業に限って活動を許可していたが、その一企業
であった日沙商会は日本人企業として活動を許された唯
一の企業とされている。したがって、引用において確認
される「大商会」とはこの日沙商会のことであると考
えられる（12）。

『南十字星の下に』において兄弟が立ち向かう困難に

は、猛豹、野象、オランウータンといった猛獣たちとの
戦いはもちろん、「ジョーンソン」という名のイギリス人に
よるゴム園乗っ取りがある。先に挙げた横溝の『南海の
太陽児』においても「白人ジョーンソン」は油田を見つけね
らう悪役として龍太郎の命を脅かす存在として登場して
いる。事局の関係上、執筆に制限があった当時、南洋に行か
ずして描かれた作品の関心は南洋に眠る豊富な資源にあ
つた。そこには「資源をめぐる人々の欲望が反映された
ボルネオ」が描かれ、密林といる状況は、その曖昧さか
ら未開の地に眠るロスワールドの舞台として活かされ
た。スパイと白人との混血児、ゴム園乗っ取りをたくらむ
悪人と、その白人といっただ配役は、特に児童読み物にお
いて分かっていたやぶすい善悪の対立の構図を持ち込み、「日
眼差していたボルネオ」という視点からくる国同士の縮
図を描いていたといえるだろう。

4 日本統治時代―滞在型

では、滞在による経験からボルネオを描いた作品にはどのようなものがあり、特徴を持つのか。ここでは実際に現地あるいはその周辺に赴いた作家たちを対象に、その作品を「滞在型」と名付け追っていく。築地藤子、吉屋信子、林芙美子を取り上げ、吉屋信子と林芙美子を結ぶアグネス・キースの滞在記『ボルネオ―風下の国』（以下『風下の国』）について見ていきたい。

築地藤子はアララギ派の歌人として知られるが、大正七年、別所直尋との結婚により、作風に大きな影響を受けることとなった人物である。藤子は明治二十九年、横浜市元町に生まれた。神奈川県立第一高女を卒業し、英和女学校裁縫科に入学するも、リュウマチのため、ほとんどなくして退学している。大正四年、「アララギ」に入会し、島木赤彦の指導を受けた。大正七年、別所直尋と結婚すると、夫の仕事の都合でシンガポール、ボルネオ、ジャ

ワ、バタヴィア、スマラン、スラバヤを転々とし、大正十一年、帰国の途についた（13）。夫である別所直尋は、明治二十二年、宮城県に生まれた。大正三年、東京外国語学校馬来語科を第一回卒業生として卒業すると、シンガポールの日馬公司に入り、長期滞在を果たす。大正十一年、シンガポールから帰国すると、翌年に拓殖大学のマレー語講師に就任した。拓殖大学在職期間は、大正十五年から昭和六年六月であるが、キヤプテン・クックのあだ名で親しまれ、学生に海外雄飛を強く勧めていた人物である（14）。別所直尋は、拓殖語学校の設立者であり、校長であったことも知られている。拓殖語学校は昭和二年九月、東当（東京の郊外）にあった。小平村小金井に設立された。東南（東アジア）に研究教育の重点を置いてきた拓殖大学の分校としての性格を持ち、南米化と南洋での活躍を目指す青年、「民族発展の先駆者」の育成を目指した学校であった。

る。拓殖大学の方針であつた精神的側面の強調と、拓殖語学校の理念は根本的に一致していたが、主意書に見られる「国際協調の精神」という表現は、開拓が決して「帝國主義的侵略政策」ではなく、あくまでも「平和主義的文化政策」に沿つたものであることを強調している。拓殖語学校では、精神的修養と道德教育が強調される一方で職業訓練も重視され、語学の他に、農業、商業、工業といふ実学的な科目にカリキュラムの重点が置かれた（15）。

夫の仕事の都合から、藤子は長期間にわたつて南洋での生活を送ることとなるが、その生活の体験は、昭和五十一年六月に古今書院より刊行された、藤子にとつて初の少女小説集となる『南十字星の下に』に反映されてい（16）。

以下の引用は行方不明になつた父を探していなくなつてしまつた母を捜して旅に出る二人の姉弟の物語「ボル

ネオの歌「からの一場面であり、「人間の陳列所」のよう
に様々な人種が行きかう場として、のボルネオが描かれて
いる。

種々の人種が見る波止場は丁度人間の陳列所みたい
やうに大きいのも印度人なら三日も四日も御飯を
食べない人のやうにやせこけた印度人も見えます。
すすきりした軽快な洋装のヨーロッパ人も見えま
すし、やたらに黄金の装身具をつけた支那人も見
られます。日本、馬來人、ジャワ人、馬車が走
り自動車が通り田舎生れのイザヤ達はすっかかり
のまれてしまひました。

一 場 面 続 く 引 用 は 「 椰 子 の 葉 か げ に て (紀 子 の 日 記) 」 か ら の
う 様 々 な 国 籍 の 人 々 の 姿 で あ る 。

町 に 入 る と さ す が に 灯 が 明 る い 。 こ こ に も 和 蘭 人
の 青 年 や お 嬢 さ ん が 笑 ひ さ ぶ め い て 町 を 歩 い て ゐ る 。
こ の 人 達 は 自 国 に ゐ る と 同 様 に 楽 し ん で 暮 ら し て ゐ
る ら し い 。 否 か へ つ て 幸 福 な の か も し れ な い । 。 彼
ら に と つ て 水 浴 は 欠 く べ か ら ざ る も の な の だ が 市 中
の 川 で 平 気 で 水 浴 し て ゐ る の は 目 に つ く 。 勞 働 者 も
夕 方 で 仕 事 を 打 ち 切 つ て 食 事 を し 、 水 浴 し て 洗 濯 し
た 着 物 に 着 か へ て 散 歩 に 出 る の だ 。

小 説 築 地 藤 子 の 描 く 少 女 小 説 に は 、 単 に 南 洋 を 舞 台 に し た
で 終 わ る こ と の な い 、 生 活 者 と し て の 視 点 が あ る 。

女中であるモイの身の上語りによって展開される物語
「美しきカプアスの流れ」や、「アマネリー」というオラン
ダ人の官吏の令嬢につかえる土人娘ミンミーの流転譚
「カカトワの島をたづねて」など、現地人の視点で書か
れた作品もある。
ここでは三人の日本人女性作家をまとめて取り上げる
が、次に挙げる吉屋、林と築地の間にはある種の偏差が
存在する。築地には、吉屋、林の持つような職業作家と
しての側面がない。現地においての生活者としての築地
の視点は、後述のアグネス・キースに近いものであると
いう印象を受ける。続いてひとまず吉屋、林に触れ、二
人をつなぐアグネス・キースについて見ていきたい。
昭和十六年一月、主婦之友社による派遣で台湾沖を出
発した吉屋は、日本を離れて八日にセレスの港に到
着した。旅程は一ヶ月に満たなかつたと推測されるが、
短期間でかなり多くの土地土地を見学して回ったよう
で、

える場面である、サマリンドンダとはボルネオの東カリマンタ
ン州にある、同州最大の土地である。

小生無事目的地に到着仕り候。嘗つて幾度か往復
せしサマリンドンダに早くも、すでに日章旗のひらめ
くを仰ぎし時の感慨、御推察に任せ候。一
「蘭領時代、その奥の小さい唯一の日本権益の油田
を護るために、往復した港がサマリンドンダです」
(17)

『新しき日』は昭和十七年の連載終了後、すぐに単行
本にはならず、二十一年、北光書房より単行本となつて
出された。その際、改題改筆がなされ、軍事的要素が減
らされたほか、牧師の妻である雅代の遺した手帳の記録
や、人物描写の細かな書き込みなどが加筆されてい
る。十八年には向日書館より刊行されたが、タイトルが初

出に戻され、二十一年の改筆をそのまま受け継いでいる。初出から単行本になるまでの改筆箇所はほぼ全編にわたって確認されるが、ここで触れておかなければならないのがアグネス・キース『風下の国』の存在である（18）。本書の存在は初出時には書かれず、昭和二十一年、二十年の単行本刊行時に次の部分が加筆された。

「フェノロサがいかに奈良の仏像のすぐれたものを発見したと言つても、それは単に、彫刻のすぐれたものとして認めただけで――要するに彼は、ただ東洋の島国の古き絵画と彫刻を感心しただけですよ、（中略）もし日本が南方共栄圏の指導を持つとしたら、それだけの資格のある文化国として立ち、まづ自国内の道義を高め、小聡しい国民性を解脱することですな、素子さんにも、北ボルネオのサンダカンのアグネス・キース夫人の生活記録（風下の国）を是非読

んで戴きたいと思つています」

アグネス・キース『風下の国』の日本語訳は野原達夫によつてなされ昭和十五年十月、三省堂より刊行された。吉屋が『風下の国』を読んでいた事實は、『最近私の見てきた蘭印』（主婦之友社 昭和十六年五月）の中に確認できる。

スラバヤの桑折領事夫人は、前任地英領ボルネオのサンダカンの領事夫人時代、その地の林務官夫人のキース女史の著（*Jabon Borneo Home Memoirs*）日本で（ボルネオ）と題し、訳されたものに、（絹地に描いた絵のやうな姿の人）とか、（元氣な東京の奥さん）などゝしるされてゐる方である。

桑折領事夫人の描写は、次に引用した野原達夫訳『風

下の国』「十七友の家」の本文と一致しており、吉屋が同じ本を読んでいたことは間違いない。

絹地に描いた絵のやうな姿の人が、領事の傍にやりそつて歩いてゐた。彼女のフランス型の高い靴の踵が、芝生にとやかな音を立てた。彼女はよく噂に聞いた、あの元気な東京の奥さんに違ひない。

吉屋と同じく林芙美子もまた、『風下の国』を読み、銘を受けた作家の一人である。芙美子がボルネオのバンジャルマシンへ到着したのは昭和十七年のことである。目的はボルネオ新聞の応援のためであり、出発の前に芙美子が読んだ書物に『風下の国』があった。

あと数週間で正月が来るのだけけれど、私は数年前の正月を、南ボルネオのバンジャルマシンと云ふと

ころで、過した事も思ひ出しました。永遠の暑熱に
むされてゐる森林の国ボルネオの町は、思ひ出のな
かでも感動深いもので、米国人、アグネス・キース
女史の風下の国と云ふボルネオの事を書いた小説を
読んで、私は、ボルネオで庸つた下男と下女のみを
あつかつたその作品にどんなにか共鳴するものを感
じたのです。(19)

望月雅彦は、その著書『林芙美子とボルネオ島―南方
従軍と『浮雲』をめぐる』(ヤシの実ブックス)平成
二十年七月の中で、『風下の国』が『浮雲』に与えた影
響について次のように指摘している。

『ボルネオ―風下の国―』は、著者アグネス・キ
ースは米国人、夫は英国人で林務官としてボルネオ
島の英領北ボルネオのサンダカンに赴任していた。

開戦してサンダカンが日本軍に占領されるとキース
 夫妻と子供は三人は敵性国人として収容所生活を余
 儀なくされることになる。ここで注目したいのは林
 務官の夫婦であるといふことである。林務官を農林
 技師と置き換えれば、『浮雲』の主人公の男女が連
 想され、発想の原点になり得ると考えている。

望月氏は、『昭和十八年二月頃、ボルネオで書かれた芙
 美子の日記の記述「すべて浮雲の如く（中略）行くもの多
 き人の世なりき」の部分と、作家の手帳の記述から、『浮
 雲』の原点はボルネオにあったとして、
 注目すべきは二人の『風下の国』に対する着眼点であ
 る。吉屋は「銃後の一女性の感慨をこめて行く」の目
 的である。そして「たのは日本領事官夫人に『風下』にお
 いても着目したの日本領事官夫人に『風下』の描写であ
 った。それは「日本から見た外地」の視点を超えるもの

ではなく、それ以上本書についての言及も確認されない。
一方芙美子は「作家の手帳」において「ボルネオで庸つ
た下男と下女のみをあつかったその作品にどんなにか共
鳴するものを感じた」と読み手の立場を明確にしている。
厳密に言えば『風下の国』は下男下女のみを扱った作品
ではないが、芙美子の関心は現地人の生活の中に溶け込
んだアグネス・キースの観察眼にあった。
それでは、著者であるアグネス・キースとはどのよう
な人物であったのだろうか。アグネス・キースは明治三
十四年、アメリカのイリノイ州にあるオーークパークに生
まれたアメリカ人女性である(20)。ハリウッドに育ち、
カリフォルニア大学を卒業後、一時記者として勤務して
いた。兄の同級生であったイギリス人ハリ―と結婚後、
林務官兼農業監督である夫に付き添い、昭和九年からお
よそ五年間、ボルネオで生活することになる。その時の
生活体験は *Land Below the Wind* にまとめられた。ア

トランティック誌のノンフィクション部門で満場一致の
一位を獲得後、昭和十四年十一月にイギリスで刊行され、
翌年一月にアメリカで刊行された。前述の通り、日本で
は昭和十五年十月に三省堂より刊行されている。

*Land Below the Wind*と邦訳『風下の国』は後述する
一点をのぞき、ほぼ忠実に訳されていると思われるが、
いずれも現地人であるアルサップ、中国人の阿伊といっ
た雇い人たちとの生活が書かれている生活の記録である。
昭和十五年の日本語訳では、原著にあった十八章「*People Whom We Like*」が削除されている。「私たちの好きな二人」と訳される本章は、日本領事官夫妻を訪問するキース夫妻の話となっていて、検閲の都合で削除された。たとえられる本章には、次に引用する場面、領事官邸で聞いたラジオが中国における「日本の英雄たち」の圧倒的勝利を収める様子を告げる場面が描かれている。

「戦争！」と私は叫んだ。
「戦争！」と彼女は答えた。
しかし、私たちはそれ以上続けることはできなかつた。
再びラジオの声は私たちの注意をひきつけ、私たちは雑誌を取り落してしまつた。アナウンサーの英語は発音に問題があつたが、その語調は強く格調高かつた。「我が日本軍は無敵である。日本は英雄たちは、襲来する波のよう、退却する中国軍を一掃した。ロシア紛争が起つたときでも、勇敢なる日本軍は果敢に対処したのである。」
（中略）
そうして、東京のアナウンサーは勝利を讃える賛歌を述べ始めた。「不屈の精神を持つた、勇敢で猛烈かつ大胆な古武士のよう、な兵士たち

よ、勝利へつき進め！かちどきをあげよ！万歳！万歳！万歳！万歳！万歳！万歳！（論者訳）

この直前の十七章は「友の家」という章であり、「今や決定的な局面」に入っている「日本の戦争状態」の中で、中国領事館の娘であるフィフイーユと日本領事官夫妻がキースの家で鉢合わせるという出来事が描かれている。緊張状態にありながらも、三人の女性たちはお茶の時間を過ぎ、解散する。十八章はこの十七章の緊張関係を受けて書かれる日中の戦況であり、キース夫妻が好きであった二人、日本領事官夫妻が、何故軍国主義の国民であるのか、という悲痛な叫びが綴られている。アグネス・キースはその生涯の中で七冊の本を刊行している。そのうちの一冊が *Three came home* であり、日本では『三人は帰った』という邦題で昭和二十四年岡倉書房より刊行されている。現在確認できている邦訳書は

『風下の国』と『三人は帰った』の二冊のみであるが、
 『三人は帰った』は日本人の捕虜となつて過ごした、ク
 チンでの收容所生活についての記事で、ハリウッド映
 画化もされた。山崎晴一によるあとには、アグネス
 が「パール・バックの如き社会思想家的な行き方をす
 る作家」ではないかという見解が述べられてゐる。
 は彼女が日本好きが原因としてあげられるだらう。その
 ことは彼女が *Land Below the Wind* において「私たち
 好きな二人」と題し、日本領事官夫妻のこゝを述べ
 ることからもわかる。加えて、『三人は帰つた』の冒頭
 は、「ハニムウンの途すがらも、日本国中いたるところ
 にある子授けのお寺へ立ちよつては、金色の仏像にお賽
 銭を捧げて男の子を一人授け給えと祈つたと始まつて
 おり、日本軍の捕虜として数年間を描いた物語の冒頭
 に描かれる、新婚旅行に訪れた日本を思い出は、彼女の

悲しみの深さをより引き立たせるものとなっている。
今回新たに入手した、彼女の最後の著書である *Before
The Blossoms Fall Life and Death in Japan* は、アグ
ネスが訪れた日本が時代を経てどのようになつたかを
述べたもので、折り返し部分に「キース夫人にとつての
関心事は、日本の女性の地位の変化である」こと、「一九
三四年の日本と一九七四年の日本を比べてみると、男性
と女性の関係は日本経済が変わつたほどには重大な差が
ないことがかなりはっきりとわかる」(論者訳)ことが述
べられていゝ。本書は三四章から構成され、小見出しは
ついでにない。巻末につけられたインデックスには、日
本各地の地名や著名人などの名が数多く列挙されてい
るが、本書については稿を改めたい。

の交差する土地の一部となり、いくつもの人種と国とを受け入れざるを得ない土地として、のボルネオを描いてい。る。アグネス・キースはもはや忘れ去られた作家になりつつあるのかもしれないが、植民地文学にまで高めうる彼女の鋭い観察眼は、日本に対する関心の高さとともに見直されなければならぬ。

今回「領地型」と「滞在型」の間にはジェンダーによる棲み分けがなされてしまったことは見逃すことができない。い事実であろう。「滞在型」という言葉自体に、夫たちの都合で滞在者とならざるを得なかつた女性たちの境遇が込められていた、といつてもよいが、今回触れることのできないなかつた従軍記の扱いも含め、今後の課題としたい。

戦後初となつたベストセラ―田村泰次郎『肉体の門』

(風雪社 昭和二十二年五月)にはボルネオで戦死した兄を待つ少女が登場する。少女は兄の話ばかりすることから仲間の少女たちには「ボルネオ・マヤ」と呼ばれるが、

そこに少なからず含まれている少女たちのからかい、ボルネオがもはや過去の土地となりつつあることを暗示している。山崎朋子『サンダカン八番娼館』(筑摩書房 昭和四十七年)では昭和の貧困の中、天草地方から「からゆきさん」として売られていった少女たちの悲劇が書かれ、映画化された際のタイトルにもなった「望郷」という言葉は彼女たちが思い描く先にある故郷というものが果たして日本と外地どちらの国を指すものであるか、といった大きな問いかけを観る者に投げかけた(21)。松本國雄『キナバル三十年』(金剛出版 昭和五十年八月)で振り返られるボルネオも自らの半生の回想の舞台としてのボルネオが描かれている。そこにあるのは「回想のボルネオ」である。同時代的となったボルネオはリゾート地としてのボルネオであり、景山民夫によって『ボルネオホテル』(講談社 平成三年二月)とといったミス터리要素を含むフィクション作品などによって受け継がれてい

る
と
い
え
る
だ
ろ
う
。 一
つ
の
島
で
あ
り
な
が
ら
、
い
く
つ
も
の
国
が
重
な
り
合
い
、
塗
り
替
え
ら
れ
た
ボ
ル
ネ
オ
の
イ
メ
ー
ジ
は
、
こ
う
し
た
作
品
の
中
に
書
き
継
が
れ
て
い
る
と
い
え
る
の
で
は
な
い
だ
ろ
う
か
。

注

- (1) *Datuk Zainal Abidin bin Abdul Wahid* 野村亨訳
『マレーシアの歴史』(山川出版社 昭和五十八年八月)
(2) (1)に同じ。
(3) 田村実造 羽田明監修 『アジア史講座 第5巻 南アジア史』(岩崎書店 昭和三十二年五月)
(4) 八百啓介 「江戸時代における東南アジア漂流記」 『南海紀聞』とボルネオ情報 | (「日本歴史」平成十七年八月)
(5) 夏目漱石 『彼岸過迄』(春陽堂 大正元年)には「其上敬太郎は遺傳的に平凡を忌む浪漫趣味の青年であった。かつて東京の朝日新聞に児玉音松とかいふ人の冒険談が連載された時、彼は丸で丁年未滿の中学生のやうな熱心を以て毎日それを迎へ読んでゐたとある。」

- (6) 歴史群像シリーズ「決定版」太平洋戦争③「南方資源」と蘭印作戦(学習研究社 平成二十一年六月)
- (7) 竹松良明「喪失された遙かな南方——少国民向け南方案内書を中心に」『戦時下の文学——拡大する戦争空間 文学史を読みかえる④』(インパクト出版 平成十二年二月)
- (8) 横田順彌『明治おもしろ博覧会』(西日本新聞社 平成十年三月)
- (9) 解説における「倭寇の子孫」という日本独特の要素とは、ポルネオに古くから伝わる「ワカナ」の伝説のことであると考えられる。ポルネオの原住民ダイヤ族に伝わる日本人の英雄ワカナは、倭寇が転じて生まれ、た言葉であると言われており、少年少女向け読み物などにおいても度々登場する。今回の調査で実業之日本社編『日本精神作興歴史読本 南海雄飛記』(実業之日本社編 昭和九年)、里村欣三『里村欣三著作集 第一

九卷（ボルネオ物語）』（大空社 平成九年三月）を確認した。

（10）横溝正史『南海の太陽児』（「譚海」昭和十六年七月）。以下、本文中の引用は初出による。

（11）（6）に同じ。

（12）日本サラワク協会編『北ボルネオサラワクと日本人—マレーシア・サラワク州と日本人の交流史』（ヤシの実ブックス 平成二十三年十一月）

（13）築地藤子『南十字星の下に』（古今書院 昭和十一年六月）

（14）井上治、坪内隆彦「拓殖大学・南洋語（インドネシア語等）及び南洋（東南アジア）研究の系譜」（「拓殖大学百年史研究」平成十四年十二月）

（15）クリストファー・W・A・スピルマン「拓殖語学
校・海外拓殖学校に関する資料」（「拓殖大学百年史研究」平成十二年三月）

(16) 「香港の薔薇」 「ボルネオの歌」 「美しきカプア
スの流れ」 「カカトワの島をたづねて」 「スラバヤの
星」 「椰子の葉かげにて」 を収録。

(17) 吉屋信子『新しき日』 (「東京日日新聞」 昭和
十七年八月十五日)

(18) 石田英一郎は本書を讀了し「アメリカ人の有つ心
憎きまでに健康なたくましさ若々しさに心を打たれ」、
「せめて本書に匹敵する位の植民地文学」が「生れる
のは果して何時の日であらふか」と「些か寂寥の感な
きを得なかつた」と述べている(「書評 アグネス・
キース著『ボルネオ』、パウエル・エミル・ヴィクトル
著『きたかぜ』」(「民俗学研究」 昭和十六年十月)。
(19) 林芙美子「作家の手帳」(『林芙美子全集』第六
巻 文泉堂出版株式会社)

(20) *Sabah Society Journal* Vol. 19 (2002) 87-108
(21) 猪俣賢司「もう一つの南洋と望郷の日本―サンダ

平 カ
成 ン
二 と
十 ア
年 ナ
七 タ
月 ハ
） ン
から
の
鎮
魂
歌
」
（
「
人
文
科
学
研
究
」

1 吉屋信子『安宅家の人々』は、昭和二十六年八月二十日、吉屋信子『安宅家の人々』は、昭和二十六年八月二十日から翌年二月十三日まで『毎日新聞』に連載され、吉屋作品における戦後の代表作とも言われた作品であるが、これまで十分な検討がなされてきたとはいえないだろう。吉屋はそれ以前の作品のいくつかに「障害者」を登場させているが、それらはいずれも身体障害を持つ人物たちである。吉屋信子は大正五年「少女画報」に連載した『花物語』によつてその名が知られ、多くの少女雑誌に作品を執筆し、つきた『花物語』とほそれ、それが花の名前をタイトルにした『花物語』は、短編連作小説であるが、その中の「山梔の花」は物言えぬ少女、優が登場する。温泉地に保養に來て、た若き女流彫刻家滋子は、そこで一人の少女に出会い、

興味をひかれるが、二人が言葉を交わすことではない。「優
さん、母さんの一生の願いは、ただ、ひとことでも、優
さんが物言えるのを聞きたいの、ほんとに、もしも、そ
の望みが叶うならお母さんは命をかけても……」という
優の母親の嘆きによって、滋子、そして読者はこの少女
が「物言えぬ少女」であることを知ることになるのである
。 長谷川潮氏は『児童文学のなかの障害者』（ぶどう社
平成十七年十月）の中で「山梔の花」を取り上げ、「クチ
ナシ」が「口無し」に通じることから、キーワードの花
と内容との密着性を指摘するとともに、吉屋の中に「口
が利けない」口無し「クチナシの花」という伝統的な発
想が存在していた可能性を指摘している。
『花物語』における「障害者」は、「悲しく痛ましい言
葉」（「山梔の花」）や「侘しい侘しい」『孤独』（「睡蓮」）
といった単語と結びつけられ、悲しい、不幸なイメージ

を伴うものとして表象されているが、負のイメージを持
ちつつも、登場人物の抱える「障害」に積極的な意味を
読み取ろうとしたのが、『空の彼方へ』へ「主婦之友」昭
和二年五月、三年四月」という作品である。本作で最も象
徴的なのは、盲目である末子が最後、見えないはずの亡
き姉、初子を見るという場面である。初子の墓前で、茂
と仲子には見ることのできない姉の姿を末子だけが目撃
すると仲子には見ることのできない姉の姿を末子だけが目撃
するといふ奇跡は、彼女が「すぐれたる知覚と神秘的な感
覚と想像力」の持ち主だったからである。そのことはそ
れまでの吉屋作品とは違つて末子という「障害者」に単
なる悲劇のみを讀み取るのではなく、常人には持ち得な
い特別な能力の持ち主としての意味を持たせていること
がわかる。この作品に登場する人物が身体障害を持つもの
として描かれていて、その対し、『安宅家の人々』は知的障
害を持つ人物を登場させている。吉屋は昭和七年十月から

翌年十二月にかけて「婦女界」に『女人哀楽』という作品を連載するが、『安宅家の人々』とモチーフを同じくする作品であり、いわば『安宅家の人々』の原型ともいえる作品である。

『女人哀楽』は、絹子という一人の女性が、「もしも、この良人を（男）として愛し得たら」と思いながらも、良人である廣太郎を愛し得ず、麟之助という別の男性に心が揺れ動いてしまう物語である。この物語において特定の障害名は書かれていないが、「さういふ方面の教育をする××学園」の存在、それは「特殊学級」を指すこと、学校の名を聞いた絹子の抱くイメージから、廣太郎が何らかの知的障害を抱えていることが推測できる。絹子のように「義務として良人を愛さなければならぬ妻」は、この『安宅家の人々』における国子と重なるものであるといえるが、『女人哀楽』では廣太郎の一人途な想いが妻の心を取り戻すという結果を生む。ここでは廣太郎の絹子

に對する恋心を描くことで、「障害者」の中に一途さ、純粋さを讀みとろうとしており、それは『安宅家の人々』における宗一の人物像につながるものといえるだろう。『安宅家の人々』との比較において『女人哀楽』を考えた際、いくつかの点で共通点が見出せる。一つに「特殊学級」という教育の場の存在、配偶者のどちらかが知的障害を抱えていること、結婚するにあたり、絹子が廣太郎の家の執事の娘であったように、夫婦間に身分差が生じていることなどである。両作品において最も異なっているのは、廣太郎の母である民子が、「早く身を固めさせて、孫の顔をも見ないと」と、廣太郎の結婚と孫の存在を強く望んでいるのに対し、『安宅家の人々』では夫婦間における性的困難が問題とされていく点にある(1)。このことは、性的問題というものが、家の側からではなく、夫婦の側からとらえられるようになったことを意味しているが、果たしてそこには本当に夫婦の物語が描かれて

いるのか。『安宅家の人々』は、宗一と国子の夫婦の物語を描きつつも、一方で国子と雅子の物語を並走させている物語であるといえるが、吉屋はなぜ十年後の『女の年輪』において、知的障害を持つゆきとその良人滋の物語を描いたのか。以下、考察していききたい。

2 国子と雅子―描かれる友情の形

『安宅家の人々』は昭和二十六年八月二十日から翌年二月十三日にかけて「毎日新聞」に連載された。駒尺喜美氏は『吉屋信子―隠れフェミニスト―』（リポポート平成六年十二月）において「 \wedge 女の友情 \vee と \wedge 理想の男性 \vee と」という吉屋信子における二大テーマが、ゆきつくところまできた「作品が本作であるとし、「 \wedge 理想の男性 \vee は通常の男にはいないということ、この社会の中で \wedge 男 \vee として生きている男にはいないということ」を「 \wedge 正常 \vee という枠組から外れたところにこそ存在する」ということによる

り国子と雅子は相嫁の関係であるが、二人の結婚は恋愛結婚ではなく、親によって決められた家同士の結婚であった。国子は自らの結婚を、「女の一生の人並の幸福を犠牲にする覚悟でなければ出来ないこと」であると言った。語るが、それを聞いた雅子は「――頭脳は健全な男でも、時として結婚の相手に不幸を与えることがあるのを、国子はゆめにも知らないのだ」と思う。その言葉には、国子にとつては羨ましいのである。う自分の結婚もまた、幸福なものでは決してないのだという雅子の気持ちもまた、幸福なものである。国子と雅子の違いは、その容貌と、宗一への接し方において顕著に表れているといえる。「なんの化粧もよそおいもなく、「実に堅気な律儀なそして知識婦人」という感じの国子に対し、雅子は「ローマンノーズ型の鼻と頬の線」によつて美しさが表され、「少女のよう」とそのあどけなさが描写されている。雅子はこの物語において宗

一と国子をまなざす側の人物として描かれている。それは吉屋がこの物語を書く際、「作中の女主人公雅子にまず頭からかつと、とりのぼせて熱中」したのだというこゝとを明かしていることによるものである（3）。

雅子は宗一との会話から、国子が「あまりに世間の外側への虚栄心のために、良人の愛すべき魂を見失つていゝ」という印象を受ける。それと同時に「いじらしい童子のような義兄の精神の世界に何か役立つこと」を考えたいという思いが生じ、そうすることとが「嫂の国子へ黙つて助力することにもなる」のだと思う。このことによつて雅子の行動は宗一と国子の二方向に向けられることとなる。雅子の考える「義兄の精神の世界に何か役立つこと」は、漱石の『坊ちゃん』（原文ママ）をすすめたこと、テニスを一緒にして「スポーツの喜び」を与えたり、ともにピアノを弾くことにあった。それらの経験は、宗一に「新しい世界がひろがったように」、全身に生気を溢

れさせざる結果となる。それに対し、国子は「自分の良人
に對する態度」を「雅子の美しい澄んだ二つの眼でしじ
ゆう見詰められ批判される氣」がする。
国子は宗一を外部の眼にさらすことを嫌がり、常に世
間体を氣にしている。良人である宗一の「子供じみた」
行動に、国子は「身も世もない心地」に「眉をひそめね
ばならない」が、雅子は「肩を近よせて、一緒に愉しげ
に」宗一に寄り添うことができないのである。雅子は宗一
に漱石の『坊ちゃん』をすすめるので、宗一が理解でき
ることを、あまりに
を知らず、「宗一への今までの読書力の判定が、あまりに
精神薄弱の觀念にとらわれ過ぎていたこと」を知るが、
これらのことから、雅子という人間が先入観をも改める
ことができない柔軟な思考を持った人物であることがわか
る。同時に、国子にとって「子供じみた」行為としてみ
なされてゐる宗一の言動は、雅子の視点によつて「無邪
氣さ」「素直さ」といった美点に読み替えられてゐるので

ある。雅子は共感能力に優れた人物としても描かれてい
るが、雅子の国子に対する態度を説明するものとして、
吉屋は「反射」という独特の表現を用いている。

「あ、あなたは第三者ですから、冷静にそうおっし
やるのです。：：け、けれども、わ、わたしにとつて
は：：」
国子の言葉には、むしろ怨みがまじさがかもつてい
た。
「第三者！いいえ：：私、お嫂様の感情はいちいち
反射していますわ：：御一緒に出来るだけお力にな
ろうと思つて：：」

雅子は宗一に対する態度において、その優れた能力を
発揮し、国子が「あまりに世間の外側への虚栄心のため
に、良人の愛すべき魂を見失っている」ことに気づくが、

一方で自らの良人である讓二に対してはその能力が全く
發揮されていらない。雅子と讓二の間に入った亀裂は次第
に大きくなるが、そのことは雅子と宗一の仲が深まるに
つれて見逃せないものとなり、離婚と宗一の決断を雅子に
下させる。雅子は自分の良人に対しては、国子と同様親
密な感情を持ち得ない妻として描かれては、国子の反応を
子の感情を「いちいち反射」させ、国子の反応を読み取
りながら、その自尊心を傷つけぬよう、宗一を誘導する。
だが、国子の持つ「世間の外側への虚栄心」が解消され
ることはない。それは国子が一貫して「石」にとえられ
れていようにならぬ。国子のかたくなさが強い印象を残すか
らだ、二人の影響関係は、常に国子から雅子へ向かって
おり、国子の感情が雅子を誘発するといふ構図が出来上
がっている。宗一の雅子に対する想いを知ることでは「初め
世のつねの妻のようには良人とよその女性との間を嫉妬す

る妻「となるが、その嫉妬心が発展することはない。「も
うこれ以上の二人の接触は、良人をしていよいよ義妹へ
の恋慕をつのらしむるだけだ」と、雅子を宗一から遠ざ
けた国子は、同時に「いいいようのない寂寞」に襲われる
のである。なぜなら譲二という共通の敵が国子と雅子を
強く結びつけることになるからだ。譲二の煽動によつて
起こつたストライキのため、国子は譲二に退去命令を下
すことを決意するが、言葉の最後には涙ぐみ、それを受
けた雅子も涙ぐむことで二人は感情を共有する。ここで
も雅子の涙は国子の涙によつて誘発されていゝる。土地
を小桜学園に寄附し、保母として生きる道を選ぶ。この
ことは、宗一の子を身ごもることや叶わなかつた国子の
「母」として生きる一つの道でもある。雅子もまた
保母となることを決意するが、「お嬢様：：私も御一緒に
：：小桜学園のこの分校の保母にさせていただけませ

ん：：「という雅子の決意は、国子の言葉を受けて自ら
意思を表明した結果によるものである。二人の結びつき
をその関係性の中で説明するのであれば、二人の立ち位
置は常に国子のあとに雅子が追随するといふ形をとって
おり、「女が女についていく」という形での友情関係が成
立していると考えられる。

3 安宅宗一―母恋いの物語

指導者の小椋学園岩井園長の鑑定による宗一の性質は
「普通人のごとく生存競争の中に立たしむること能わず、
また普通児と共に学課を学ばしむるには困難の智能障害
があつた」とされるが、その外見は「男の白痴美とも一
口にいよいよ切れぬ、気品」を持つ。その点は「女人哀楽」
における廣太郎が「背丈に比して顔は大きく、男にして
は色白過ぎて目鼻立はいかにもぢれつたく、のんびりして

て「いるのとは対照的で、内面の美しさを外面にも反映
 させた人物造形がなされていいるといえよう。「小児のごと
 く無邪気にして、人の死にも奇異の思いをなし、死の意
 味を知らず、死後の幽霊の存在を信ず——その実母の逝
 ける際、母の死を容易に解せざりしが如し——とされ
 る宗一は、死の意味を知らず、亡母である綾子が「キリ
 スト」のよう「復活」すること信じている。
 宗一の通つていたとされる「小桜学園」とは、「特殊児
 童教育に生涯を献げ尽した」岩井篤輔によつて設立され
 た学校であるところだが、そのモデルとなつたのは、明
 治二十四年に創立された、日本初の知的障害児者のため
 の社会福祉施設である滝乃川学園である（4）。田辺聖子
 『ゆめはるか吉屋信子——秋灯机の上の幾山河』（下）（朝日
 新聞社平成十一年九月）には、学園の創始者である石井
 亮一が門馬千代の父の友人で、千代が少女時代父の使い
 で何度か学園に来たことがあると述べられていいる。滝乃

川学園は聖公会系の施設であり、宗教的基盤を持つてい
る。つまり小桜学園という環境が宗一の亡母に対する考
え方を宗教的観念と結び付けさせるきっかけとなつたと
考えられるが、亡き母を追い求める宗一の姿は、この物
語においてひとつの「母恋い」物語を描き出している（5）。

安宅家三十三年忌の法要で赴いた京都で桂離宮を回つた
宗一は、古書院がかつて住んでいた邸に似ていたため、
母がいるのではないかと探し求めるのである。

「：：おぼく、このお屋敷：：原町に似ているから
：：お母さんいないか」と探してたの
（中略）
「人間の死の意味を知らず死後の幽霊の存在を信
ず、これは小桜学園長岩井氏が、かつて宗一の精
神薄弱に生じる現象と特質のそれだつた。宗一の精
「お義兄様、お母様は天国にいらつしやるのよ」

の 烈 穩 か 宗 言 妹
 宗 し な ま 一 葉 、 宗
 一 く 空 い の 母 を 借 枝 一 の
 の 吠 気 を せ ん 騙 っ 譲 二 た ち に 金 銭 を 工 面 さ せ る 。 目 的 は 、 母 の
 葬 え る 察 知 し た 老 婆 は 、 「 …… 国 子 は 少 し 兄 弟 の こ と を
 儀 の 声 で 場 面 は 断 絶 さ れ る 。 こ の 愛 犬 才 ヨ コ の
 際 、 次 枝 の 口 か ら 「 ほ ん と に あ れ だ け は
 、 次 枝 の 口 か ら 「 ほ ん と に あ れ だ け は

お 姿 は も う な い の 、 た ま し い 靈 魂 …… が お 義 兄 様 を
 い ま も 守 っ て く だ さ る の で し ょ う …… こ の 桂 離 宮 に
 い ら っ し ゃ り は し な い の よ …… さ あ あ ち ら へ 参 り ま
 し ょ う ね ……
 雅 子 は 義 兄 の 手 を 引 い て 、 古 書 院 の そ の 間 か ら 出 た 。
 「 そ う …… お 母 さ ん 、 靈 魂 だ け …… 靈 魂 ？ 」

宗一は義妹である雅子に対し恋心を抱くが、本作ではそのことを宗一の「成長」として描いている。宗一は次第に雅子への思慕を募らせていくが、それはやがて恋愛感情になり、性衝動を呼び起こすものへと繋がっていく。性衝動が具体性を伴う少し前に、吉屋はひとつの緊張感を持つてある場面を描いている。それは京都からの帰りついであり、国子が上段にその下段が宗一、その一つ隣の寝台車の出来事である。三人の寝台は上下と下段の下段が雅子であった。

もう真夜中の何時だったか、雅子は浅い眠りが、またも駅を出るときの汽車の速度の出す、自分寝台から呼び起されかけたとき、自分の寝台のカーテンがいきなり左右に押し開かれて、人影がその寝台に入ろうとしたとき、男の手が、ぬつと差し出された。

(あつ)と驚いて……彼女は枕許の豆電球のスイッチを押すと、そこに宗一が立ってこれらも驚愕していた。「ぼ、ぼくの寝台ここでなかったの……」

彼は便所へ行っての帰り、ものみごと、同じ列の一つ隣の寝台と取りちがえたのである。

雅子は、あたりに聞えぬよう声をひそめて――「お義兄様のは、そこですわ……」

と指さしても、なお心配なので寝台から抜け出て、宗一のところまで連れて行った。

真夜中のこと、雅子は自分の寝台に差し出された「男の手」に驚くが、「ぼ、ぼくの寝台ここでなかったの……」と吃驚しているのが宗一であることを知り、「お義兄様のは、そこですわ……」と宗一を自分の寝台まで案内する。その出来事は「ものみごと」に、同じ列の一つ隣の寝台と取りちがえたのである」という一文と、「寝台をおまち

がえになつたの：：なんでもないの「と
 に対する一言によつて「なんでもない
 けられてしまつて、この場面には宗一
 たして単なる間違いであつたのかどう
 欠落している。国子の側には良人の性
 いう思い込みがあるため疑いに余地が
 察知するの「はかなりあとのことにな
 「宗一の手」であつたときにその警戒心
 でもないの「と、という程度の一
 解釈にとどまるほかはない。しかし、の
 の衝動を考えたとき、良人の性欲が微
 する国子の根拠は崩され、この寝台車
 濃く浮かび上がつてくるのである。場
 容 貌 雅子が宗一を惹きつけた理由と
 がある。加えて雅子の持つ匂いもまた
 理由として挙げ

げられるだろう。雅子のつける香水と肌の匂いは暖炉の熱で一体となり、「咲き匂う女体」として立ち現れるが、同じく吉屋作品である『良人の貞操』でもまた、女の持つ色香が「龍涎香の仄かな薫」に示され、男に強い印象をもたらししていることがわかる(6)。「咲き匂う女体」を前にした宗一は、「雅子を抱きしめたい衝動」に駆られるが、同時に生じた「烈しい羞恥心」がその衝動を抑えつけている。昂った宗一の欲望はやがて行動となって現れるが、それは雅子にはなく、妻である国子の身体へと向けられていく。

――宗一はその闇の中に、いきなり妻の身体を抱き締めて……彼女を驚愕させた。結婚後……しばらくの後に、絶えてなかつた良人の振舞だ……大人の本能的微弱に消え果てていく。

<p> : 「 よ も 「 : う す う の そ そ ん み : : れ れ 美 れ : : で ぼ し の 「 こ は く く 花 : 森 の ね 好 て : : の 美 き 、 : : 近 し ? い 子 く く 「 い は に て 句 そ : : い の : : そ : つ る し : も の て い つ り も よ も だ の い ぼ っ : : 句 く た : : い 見 。 な の る ん の す も で す の し る </p>	<p> 知 る は ま が る 出 雅 、 ら 国 こ 来 子 良 も 子 の と 事 の 人 、 は だ だ と に ダ の そ 「 た が な よ ミ 求 れ 良 一 る っ と に 何 人 に 。 て 、 し 応 だ 宗 一 国 子 は 夫 の 行 動 に 秘 め ら れ た 真 実 を 知 る は ま が る 出 雅 、 ら 国 こ 来 子 良 も 子 の と 事 の 人 、 は だ だ と に ダ の そ 「 た が な よ ミ 求 れ 良 一 る っ と に 何 人 に 。 て 、 し 応 だ 宗 一 国 子 は 夫 の 行 動 に 秘 め ら れ た 真 実 を 知 る は ま が る 出 雅 、 ら 国 こ 来 子 良 も 子 の と 事 の 人 、 は だ だ と に ダ の そ 「 た が な よ ミ 求 れ 良 一 る っ と に 何 人 に 。 て 、 し 応 だ 宗 一 国 子 は 夫 の 行 動 に 秘 め ら れ た 真 実 を </p>	<p> の だ だ 一 は 妻 の 身 体 に 雅 子 の 幻 を 描 いた の だ だ 一 は 妻 の 身 体 に 雅 子 の 幻 を 描 いた </p>
---	--	---

「え、きつとお好きでしよう、誰でも好きね」
「わかった！雅子さんだ、そうね」
宗一は眼をきらきらさせて叫んだ。
愕然とした国子の手から、岩井氏著の教育技術書が
床に落ちた……。

書齋から遠ざかり、あれほど熱心に取り組んでいた「彼
相応の数学」や「読方の勉強」をおろそかにしているの
を危惧した国子は、宗一の勉強に自分も付き合おうと、
良人を書齋へと連れて行く。小桜学園園長である岩井氏
著の教育指導法の第一巻を取り出し、「観念連合」の質問
を宗一に出した国子は、「すみれの花」という答えを想定
して、「美しくて」「よい匂い」のする、「森の近くに見ら
れるもの」は何か、という問いを宗一に発するが、「それ
ぼく好き？」という宗一の求めるヒントがきっかけとな
って、結果的に「雅子さん」という答えを導きださせて

しまう。先入観にとられず宗一の能力を伸ばすことを心がけた雅子とは対照的に、国子はあくまで「教育技術書」内の範囲でしか良人の持つ能力を測ろうとしなかった。「愕然」とした国子の手「から落ちた」岩井氏の教育技術書「は、そうした国子の良人に対する接し方を根本から揺るがすかのような衝撃の瞬間を示している。そのことは同時に、「結婚後、……しばらくの後、絶えてなかつた良人の振舞」であつた「大人の男の本能」が雅子に結び付くものであることは知つた瞬間でもある。この描写から、夫婦の間には少なくとも結婚当初、性的関係があつたことと伺えるが、宗一の示した性衝動が、「子供を持つ」という考えに結びついて描かれることは決してない。一方国子は、夫婦の間の性的関係において決して不安を抱えながら、意識的に子供を持つことを避けざるを得ない状況にあつた。

ないこととして「自分の子供」は諦めていゝ。「一つの浴室に入つて」、「裸身で湯気の中に近く身を寄せ合うこと」は「二人の女性に親近感をおのずと覚えさせてゆく」とあるこの浴室の場面は、国子が宗一の妻として、一人の女性として雅子に心を開き打ち解ける重要な場面でもある。しかしかして同時に、国子が心を開き悩みを初めて打ち明けたであらう女性が、やがて良人の心を奪う相手でもあるというねじれた子供関係がそこにはある。国子の漏らした言葉の裏には、子供を持ってないこととの悲しみと同時に子供を持つた場合の怖れがある。雅子はそうしなげなら国子が万が一妊娠してしまつた場合、その先に人は工中絶といふ手段が想定されうるからであり、そのことと可能にしたのは、本作の三年前に施行された「優生保護法」であつたといえる。国民優生法は、それまで明治

末期から専門家の間で議論されていた断種法制定の是非にとつてひとつの帰着点としてみなされている(7)。国民優生法の目的は、「悪質ナル遺伝性疾患ノ素質ヲ有スル者ノ増加ヲ防遏スルト共ニ健全ナル素質ヲ有スル者ノ増加ヲ図リ以テ国民素質ノ向上ヲ期スルコト」(第一条)とされていた。このことはつまり、「悪質な遺伝性疾患の素質を持つ者」に対して不妊手術を促す一方で、「健全な素質を持つ者」に対しては不妊手術や妊娠中絶を厳しく制限することによつて、「健全者」の増加を図つたとされ、ている(8)。国民優生法はもともと純然たる優生断種法になるはずであつたが、人口増強策が一举に推進された時期とも重なつたため、「産めよ殖やせよ」の政策を支え、る事実上の「中絶禁止法」としての側面が強調された形となつた。

の国民優生法に代つて公布された優生保護法は、「優生上
の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性

の生命健康を保護することを目的とし、不妊手術、人工妊娠中絶等についての規定が定められた。戦後急激に人口が増加し危険な墮胎が横行した背景を受けて、母性保護あるいは暴行強迫による望まない妊娠に目的が限定された人工妊娠中絶が初めて合法化されたのである。昭和二十六年六月二十四日の改定では本人または配偶者が精神薄弱者であれば、優生手術、人工妊娠中絶の適用が精神薄弱者であれば、さらに昭和二十七年の改定では、第三条の改正によつて「配偶者が精神病若しくは精神薄弱を有しているもの」が不妊手術の対象に加わつた。『安宅家の人々』が書かれた時期はまさに優生保護法成立から改定の重要な過渡期にあたるが、国子にとつて解決法の一つとしてこの優生保護法が背景にあつたに違いない。おいて母となつたことを選択してゐる。国子は宗一との関係

5 『安宅家の人々』から『女の年輪』へ
『安宅家の人々』の十年後にあたる昭和三十六年、吉屋は「読売新聞」紙上に『女の年輪』を執筆し、ゆきと
いう知的障害者とその良人を登場させた。この年は、吉屋にとつて転機の年であるとも言える。昭和十五年の
年表(9)には戦時中から折にふれ調べていた中国の事柄をもとに、「西太后の壺」「昌徳宮の石人」等の構想に結
実し、作品を書き始めたことが記され、「調べて書くことに興味を持ち始めた」(10)吉屋の様子がつづられてい
る。梨本伊都子に材を求めた書き下ろし作品『香取夫人の生涯』は、昭和三十七年に刊行されたが、三年越しの
作品であり、『女の年輪』と並行して書かれていたことがわかる。昭和三十六年という年は、『自伝的女流文壇史』
の執筆開始年でもあり、吉屋の作品年譜において、以降の評伝作品や伝記的作品に移行するまでの重要な時期で
あるといえる。

『女の年輪』は『安宅家の人々』の宗一が男性であつたのとは異なり、ゆきという女性が障害を持つ人物として登場する。この物語の中心は紀子という一人の未亡人であり、ゆきを中心として物語を読み替えることは必ずしも作品全体をとらえることにはならない。しかし、ゆきという新しい軸を浮かび上がらせることで物語の新たな展開を探ることになると言えり。それは同時に、『安宅家の人々』において吉屋が描いた宗一と国子の夫婦関係が、『女の年輪』へとどう接続していくのかを考察するこゝとにもなるのではないか。

宗一が国子を母化させる一つの方法は、装置のようなものとして描かれてゐる。そこで国子は「わば」母」となるが、雅子もまた最後に「社会的な母」となることを選んでおり、この物語が二人の母親の物語であることとを意味してゐる。二人を強く結びつけ、たものは、「女が女についていく」という形の友情関係で

あり、あくまで「女の友情」に力点を置く、これまでの吉屋作品の域を出るものではない。前出の駒尺氏の指摘の通り、本作は「[^]女の友情^vと[^]理想の男性^vという吉屋信子における二大テーマ」を描いた作品である。しかしそのことは同時に、安宅宗一と国子の夫婦の物語を、国子と雅子の友情の物語に中心をおくことによって、従来吉屋が描いてきた「女の友情」の物語の中に閉じ込めてしまったということもできる。

吉屋のこれまでの作品において「女の」とタイトルに付した作品はいくつかあるが、そのいずれもが、女の友情が結ばれ、あるいは結ばれようとする物語であった。それがこれまでにいくつかあるが、そのいずれもが、女の友情が結ばれ、あるいは結ばれようとする物語であった。

テーマとしているといえるだろう。本作は紀子、喜久子、千勢という三人の未亡人が中心となりつつも、『三聯花』や『女の友情』といった作品のようになりつつも、『三聯花』や『女の友情』といった作品のようになりつつも、『三聯花』びつきを描いた作品ではない。『女の年輪』においてゆき

と滋を描いた理由は、いわば女の友情に取り込まれてしま
うことで描き切れなかつた宗一と国子の夫婦関係を、
もう一度描き切ることにあつたのである。
『安宅家の人々』から『女の年輪』に至るまでの作品
はいくつかあるが、この頃の作品には女の友情に力点を
置かない作品が登場している。昭和二十七年一月四日
五月二十四日「サンデー毎日」に連載された『秘色』は、
容子が「空漠とした孤独の砂漠」に気付き、病弱な良人
である守人と紆余曲折を経て、良人を「これから愛して
行く一人の男」であると発見する物語である。容子は百
科全書の販売員として家計を支えているが、この物語は
働く女性が直面する葛藤や、女としての媚態、かけひき
などを通して、容子が自らの殻を破っていくまでを描い
た作品である。昭和三十三年三月十八日、十二月十一日
「読売新聞」に連載された『風のうちそと』では、「胸の
底からはるか空の彼方へ去ってゆく」前夫の幻影へ「最

後の別の眼差しを向ける妻の姿が描かれる。子の過去の現在が、二人の良人の妻といふ立場から迎えられるが、前夫への思いを断ち切ったのはなかなかぬ子自身であった。このことは、女の友情関係から離れた子ころに女を置いたうえで、女の人生や夫婦の関係といふものを描こうとした吉屋の変化の一部であるともいへよう。

『女の年輪』というタイトルに着目してみた場合、「年輪」とは同心円状に連なるもので、線と線が決して交わることはない。これまで吉屋が描いてきた夫婦の物語は女たちが連なり作り出した一つの輪の中に、おいてあるは、紀子の喜久子、千勢の物語が互いに干渉しあうこと、それぞれの物語を描き切っていない。円を作り出した、女たちが自分で自らの円を作りに出た、同心円状に連なるものではない。吉屋が描いてきた夫婦の物語は、同心円状に連なるもので、線と線が決して交わることはない。これまで吉屋が描いてきた夫婦の物語は、同心円状に連なるもので、線と線が決して交わることはない。

態で新たな友情関係を築くことができた作品であるとい
えるのでは無いだろうか。
滋は「単なる憐れみや同情」からではなく、従兄妹で
あるゆきが「嫌悪すべき女性の悪徳の数々」を持ち得ぬ
女だった点にひきつけられている。だが、「針のない時計」
のようになゆきの美点は、紀子という未亡人に出会うこと
によつて、欠点としても読み替えられてしまふ。滋のゆ
きに對する愛情は、妻としてのゆきを愛するといふ想
ではなく、ゆきの母である亡き伯母への恩義と、「不幸な
ゆきを保護してその一生を見守つてやる」といふある種
の使命感によつて支えられるものであつたといえよう。
つ生活へと戻つていく。その恋が破れたとき、滋はゆきの待
姿を見て、「絶望的な気持の底にかすかに安堵にも似た諦
め」を感じるが、決して成長しないはずのゆきにも、わ
かながらの変化を見出す。滋の服にブラシをかけるゆき

(1) この物語は絹子が廣太郎の母から母の立場を譲り受ける物語と読むこともできる。それは、結婚後廣太郎が絹子に言った台詞「君がゐてくれ、ば大丈夫だね、もう——僕母さんなんてゐなくてもい、や」にも象徴されるが、二人の心が通うにしたがつて、絹子の廣太郎に対する態度が次第に母なるものへと近づいていき、最後は姑である民子が身を引くことを決意して終わるのである。このことは、廣太郎が実母の民子から絹子という新しい母を得ていく物語でもあるということのできるのではないだろうか。

(2) Sarah Frederick's *Women of the Sun and Men from the Moon* : Yoshiya Nobuko's *Ataka Family as Postwar Romance* (U. S. — Japan Women's Journal, 2002)

なお、引用文中の日本語訳は論者による。

(3) 吉屋信子「わが小説」(「朝日新聞」昭和三十六年十二月十六日)

(4) 中村満紀男、荒井智編『障害児教育の歴史』(明石書店 平成十五年十月)には、滝乃川学園について次のような記述がある。「わが国において、最も早く知的障害のある子どもたちへの組織的な対応を開始した施設は、石井亮一が創設した滝乃川学園であった。(中略)学園は、前進の孤女学院から施設名称を変更した明治³0年頃に「白痴児」の募集を開始する一方、新たな「孤女」の引き受けを中止し、しだいに知的障害のある子どもたちの生活・学習施設へと展開していく。一方で、1900(明治³³年)には「小学校令(改正)」において、「瘋癲白痴又ハ不具 廢疾」が就学義務の免除対象に規定されることとなる。」

(5) そのことは、宗一の書齋にアミ―チスの「クオレ」が収められていたことによつても示唆されていると考えられる。「クオレ」は少年の日記形式で展開されるが、少年たちが課題として出される綴り方の講話の一つが「母を訪ねて三千里」であり、日本でも有名になつた物語である。昭和三十八年、吉屋は講談社の絵本ゴールド版において文章担当で執筆しているが、古くは大正四年三省堂より刊行された『青年英文学叢書』の三十一篇に収められている。

(6) 『良人の貞操』(『吉屋信子全集』第五卷(朝日新聞社昭和五十年二月))では、信也が未亡人である加代に感じる魅力のひとつを匂いによつて表現している。

「左の腕でございますつて」
と、息をはずませて、すぐ信也の左腕へ黒紗の布を捲いて、針で荒くかがるあいだ信也の胸近く女の黒髪と白くか細い項が、そして竜涎香の仄かな薫が

漂った。

(7) 高木雅史「優生学の歴史と障害者の生きる権利」

(「障害者研究」一九九八年二月)

(8) 米本昇平、松原洋子、櫛島次郎、市野川容孝『優生

学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』

(講談社 二〇〇〇年七月)

(9) 『吉屋信子全集』十二卷(朝日新聞社 昭和五十一年

一月)

(10) (9)に同じ。

※吉屋の作品中には「障害者」などの単語は用いられていないが、本論では現行の『社会福祉用語辞典』における辞書的な意味を考慮したうえで、なおかつ作中に登場する疾患名などをふまえてこの語を用いる。テキストに用いられる表現があるが、作品の時代背景、および著者が故人で

あることなど
を考慮しその
ままとした。
※ テキストの
引用はそれぞ
れ新潮社刊、
朝日新聞社刊
『吉屋信子全集』
を使用した。

1 現代小説から歴史小説へ

昭和三十七年、『女の年輪』の連載を終えた吉屋は、創作小説を離れ、次第に事実取材した伝記作品へと傾倒していく。この頃の吉屋の変化は、吉屋に最も近い存在であり、その仕事を補佐していた吉屋千代の発言からも裏付けられる。以下の引用は朝日新聞社版『吉屋信子全集』十二巻巻末に付された吉屋千代作成年譜からの引用である。

戦時中から折にふれ調べていた中国のことが、「西太后の壺」「昌徳宮の石人」等の構想に結実し、翌年にかけて外地に題材をとった中短編をかきつづける。調べて書くことに興味を持ち始めたのである。（昭和三十五年）

ここに重要なのは、昭和三十五年を契機に吉屋が事実的に取材した作品に興味を持ち始めたこと、千代が『自伝的女流文壇史』『私の見た人』を一連の伝記的随筆として分類していることだ。巻末年譜では年ごとに吉屋が発表した作品をジャンルにわけてまとめ加わっているが、昭和三十二年以降「伝記的短篇」という項目も加わっていき、この年には「伝記的随筆」という項目が加わり、三十八年を契機に吉屋の仕事の一つに新たなジャンルが加わったということがある。

「世界」一、二月号に菊池寛、徳田秋聲の追憶を連続執筆。前年旅行に同行した堀田善衛の企画、或は紹介であった。これらは後の「自伝的女流文壇史」となる。「私の見た人」の一連の伝記的随筆につながるもの（昭和三十六年）

頃の吉屋の伝記的作品を分類してみれば次の三つに分けられよう。①随想的評伝作品、②俳人歌人の評伝作品、そして③資料に基づくノンフィクション作品である。これらは時系列ごとくに明確に移り変わっていくのである。半ば流動的に行き来をするものであるが、分類それぞれ最初の作品の開始年を見てみると、大体次の順番になつていくことがわかる。以下、分類ごとに大まかに流れを追つていく。①随想的評伝作品である『自伝的女流文壇史』『私の見た人』『私の見た美人たち』は、いずれも作家自身が見聞きした体験をもとに、その人物の断片を切り取る手法をとつており、その人物の生涯を描いた作品といふよりは、作者の目から見た印象記のような体裁をとつてゐる。『自伝的女流文壇史』は、中央公論社によつてタイト

ルが命名されたものであつたが、吉屋自身「側面史にはなつていふと思ふ」と述べている作品で（1）、田村俊子、岡本かの子、林芙美子らを取り上げた。吉屋はその中で「かの子の作品が大がかりの管弦交響楽なら、林さんの作品は一管の細き明笛か一茎の草笛に思いを託して泣くがごとくむせぶがごとく」（2）と、何かと並び称されることのも多かつた林芙美子について述べ、吉屋とは違つた意味で精力的に男たちと渡りあつた一人の女流作家を讃えてゐる。収録作品は昭和三十六年「中央公論」「小説新潮」に数回にわたり掲載され、単行本は翌年十月中央公論社より刊行された。収録作のうち三編は単行本にする際書き加えたものであり、巻末に「女流文学者会挿話」を付している。

『私の見た人』（昭和三十八年二月）「朝日新聞」連載、同年九月朝日新聞社より刊行）は『私の見た美人たち』（昭和三十九年二月）「文藝春秋」ほか連載、昭和四

十四年十一月読売新聞社より刊行)とともに随想的伝記作品として分類されるが、同時代の同ジャンル作品としては昭和三十六年四月に中央公論社より出版された室生犀星『黄金の針 女流評伝』が挙げられよう。『私の見た人』では田中正造、新渡戸稲造、菊池寛、竹久夢二といった男たちを始め、九条武子、与謝野晶子、田村俊子らを取り上げている。『私の見た美人たち』も同様に、作家に限定することなく、自身の映画に出演した女優との思い出などについて書いている。

次に②俳人歌人の評伝的作品である『底の抜けた柄杓』(昭和三十八年六月、三十九年六月「小説新潮」)「オール読物」「文藝春秋」掲載、三十九年十二月新潮社より刊行)と『ある女人像』(昭和三十九年、四十年連載、四十年十二月新潮社より刊行)である。

『底のぬけた柄杓』は「憂愁の俳人たち」というサブタイトルがつけられており、吉屋自身「今までの著作に

ない異色の作品集「となつた（3）」。吉屋は「こうしたノ
 ンフィクシヨンの伝記物語を描きつづけ、その伝記中の
 俳人の生涯の足跡を追求したことが、はからずも私の貧
 しい精神に文学にいろいろの意味でプラスだった（4）
 と語っている。『ある女人像』は「近代女流歌人史」とい
 うサブタイ
 トルのもとに書かれた作品で、吉屋自身が「既刊の俳人
 伝」である『底のぬけた柄杓』の「姉妹篇」として認めら
 れることをお願いして書いたものである（5）。昭和四十
 二年に新潮社より出された単行本あとがきには、次の
 ように記されている。「
 俳人伝に取り上げられたなか、女流俳人はわかずか
 人に杉田久女ら三人だけでしたが、歌人伝では女流歌
 人のみを描きました。それを描きつつ、筆者が発見
 したのは、同じ女性でも俳句と短歌の世界ではいか

っ の く 久 『 の た
 最 た 「 女 女 底 き 柄 「
 後 こ 女 流 の の っ 杓 亡
 に と の 歌 ほ の か け 』 き
 ③ が 生 人 か け け で 俳
 資 わ き 伝 に た は は 人
 料 か 方 を 、 柄 杉 、 の
 に る 「 編 渡 杓 田 主 一
 基 。 の む 辺 『 久 女 男 「
 づ 違 に あ ゆ 中 と い 性 関
 く い が っ 、 岡 崎 え げ た 女 流 俳 人 心 を 寄
 ノ 吉 屋 の 、 女 流 俳 人 心 を 寄
 ン フ の 関 心 の 中 心 と 女 流 歌 人 と 続 田 。
 フ ィ ク シ ョ ン 長 篇 だ っ て い
 持 に 人 ら 人 に
 つ 生 生 苛 の 女
 運 き 行 烈 な の
 命 る 路 の 人 な 生
 の 型 の 人 生 は 方
 差 の い 生 を 、
 を 多 かな 迎 俳
 感 い なる っ 句
 じ の 不 た の 杉
 ま に 幸 破 田 久
 し 十 七 滅 型 は 女
 た 文 も 隠 見 当
 。 字 と 忍 と 諦 観 持 し 静
 字 三 十 一 文 字 の 詩
 の 詩 の 静

これは『ときの声』（昭和三十九年十一月六日〜四十年四月二十四日）「読売新聞」、四十年七月筑摩書房より刊行）があてはまる。日本廃娼運動の歴史を描いた作品で、救世軍や矯風会の廃娼運動の記録から、「正確な資料にもとづき、あくまで事実による記録にすぎなくて、書かねばならぬ性質のもの」として書かれた作品である（6）。過去の廃娼運動の記録は山室軍平の長女である山室民子や矯風会から提供を受け、遊郭については古書や文献をあさるほか、読者の有志が「実験的試料」を書き送ってくれたこともあったという（7）。本作は「読売新聞」の「名勝負物語」の一遍として連載されたが、多くの男性読者からの反響も得た作品となり、「豊富に与えられた資料に忠実に密着して、ただ物語を展開させる光景の叙述をしなければ」の「まったくのノン・フィクションで書き終った作品である（8）。本作は、『底の抜けた柄杓』に掲載した「救世軍士官」の俳人雉子郎の資料を求めている際、

救世軍の山室軍平の長女である民子に会い、触発されて描く動機を得たものである（9）。吉屋の関心の中心は山室軍平の生涯にあり、息子である山室武甫に取材するこゝとに よつて山室軍平の生き様についても詳細な書き込みを試みてゐる。以上の流れで吉屋の伝記的作品を分類してきたが、先にも述べたように三つの分類は時系列ごとには明確に移り変わるわけではない。だが、大まかな流れを追うと、自身回想録的評伝作品から、俳人歌人に取材した随筆的評伝、そして最後に完全なるノンフィクションを強めていくことがわかる。『香取夫人の生涯』は、これらの伝記的作品に先駆け、昭和三十一年一月、新潮社より書き下ろしとして刊行された。先の千代年譜によると、本作は三年がかりで執筆された書き下ろし作品である。記述を辿ると、吉屋が『香

取夫人の生涯』、原題『ある妃殿下』の執筆にとりかかっ
たのは昭和三十五年七月のことであり、「書くことのある
うれしさ、『ある妃殿下』と『未完の女』(後の『女の年
輪』)と十月中旬の日記に記されていることがわかる。
本作は、実在の人物である梨本伊都子の手記をもとに
書かれた作品であるとされている。比井盈子という一人
の人物の幼少期から晩年までを描いた物語は、評伝では
なく、完全なる創作でもない、吉屋にとって戦後の意欲
作の一つとして挙げられよう。『香取夫人の生涯』は、吉
屋の創作連載小説の中でも晩年の作である『女の年輪』
と同時期に書かれ、歴史小説へと移行しようとする過渡
期に位置するものである。先にも述べたように、本作の
背景には梨本伊都子の手記の存在があり、吉屋はその手
記をもとに作品世界を構築している。それは、綿密な調
査のもと書かれた歴史小説への序章ともいえるべきもので
ある。これまで全く顧みられてこなかつた本作を取り上

げることには、『徳川の夫人たち』や『女人平家』へと続く吉屋の創作過程の一端を知るうえで意味のあることではないだろうか。本論文の終章の意味も込め、吉屋が『香取夫人の生涯』を執筆するまでの過程を追い、本作について考察したのち、今後の研究について最後に述べていききたい。

2 執筆の動機、伊都子と吉屋の出会い
吉屋はなぜ本作を執筆するに至ったのだろうか。その経緯については昭和三十一年に新潮社より出された著書のあとがきには次のように記されている。

その手記は断片的にその過去の経歴や出来事を
見る。それのもので、一篇の物語にはまとめることが
みがある。つたもので、それではさまざまの宮家のありし
このあたるところ。エピソードを伺い、それをミックスし

前　い　た　あ　品
 を　こ　も　っ　執　こ
 明　と　の　た　筆　の
 か　を　で　と　の　あ
 し　断　あ　い　動　と
 て　っ　り　う　機　が
 い　て　な　こ　「　か
 な　お　が　と　。　臣　ら
 い　り　、　、　次　籍　は
 と　こ　モ　に　降　二
 い　の　デ　本　下　つ
 う　時　ル　作　の　こ
 こ　点　小　「　の　と
 と　で　は　の　手　お　わ
 であ　ま　形　記　れ　か
 る　だ　と　を　も　宴　。　一
 。　本　梨　本　伊　都　子　の　は　な
 本　作　と　伊　都　子　の　名
 作　と　伊　都　子　の　名

え　感　日　私　で　　　る　え　て
 る　傷　の　が　そ　も　の　に　元
 。　が　お　の　つ　も　は　こ　皇
 （　私　別　れ　の　手　記　に　よ　宮　廷　の　あ　り　し　日　の　催　し　そ　の　他　は　あ　く　ま
 1　こ　の　宴　の　記　述　の　と　こ　ろ　だ　っ　た　、　そ　の　手　記　の　な　か　で　、
 0　作　品　を　書　か　せ　る　動　機　に　な　っ　た　と　も　言
 ）　の　作　品　を　書　か　せ　る　動　機　に　な　っ　た　と　も　言

の関係に吉屋の筆が及ぶのは、『香取夫人の生涯』が発表された四年後の昭和四十一年のことである。同年刊行された『随筆 私の見た美人たち』には「梨本伊都子の日記」が収録され、単行本になった際、末尾に「後記」が記されている。「梨本伊都子の日記」は昭和三十九年六月の「文藝春秋」に発表されたものであるが、その際この「後記」は付けられていなかった。『香取夫人の生涯』と伊都子との関連性は、この「後記」において初めて明らかされるのである。以下、該当部分を引用してみる。

後記 一九六二年一月に私が新潮社から刊行の書きおろし長篇の、若き皇族妃が戦後の臣籍降下に、良人の元宮殿下を助けての新生活に初めて生き甲斐を感じられた手記の「香取夫人の生涯」は、幸い版を重ねて多くの好意ある書評を受けた。思い深いこの作品の参考資料となった元梨本宮妃の日記五巻と

さらにはしるされた明治、大正、昭和戦前までの宮廷行事と皇族生活のくわしい記録二巻に、私は深い感謝を忘れ得ない。

本年（一九六九）春、梨本伊都子夫人はめでたく米寿を迎えられた。（111）

ここでも吉屋は『香取夫人の生涯』が元梨本宮妃の手記をもとに執筆したものであることを初めて明かす。それは一つに手記の持ち主である梨本伊都子が、本作刊行当時は一命であつたことへの配慮があつただろう。だが、ここで疑問となつたのは、吉屋がどのようして伊都子と接点を持ち、その手記を入手したのかという点である。住んだ宇都宮で伊都子を初めて目にする。先の「文藝春秋」に掲載された「梨本伊都子の日記」からの引用である。

鹿 大 団
沼 正 長 伊
に 元 とな 都
移 年 った 子
っ 吉 った の 良
て 屋 の は 人
い の 父 大 である
る 父 は 正 守
。 上 二 正 正
そ の 都 年 八 宇
頃 賀 月 三 都
の 郡 三 十 宮
吉 長 十 一 第
屋 とな 日 の 一 四
は 一 時 鹿 沼 の 家 師
一 家 は 栃 木 團
時 鹿 沼 の 実 家 第二
離 離 家 を 八 旅

私 二 髪 の は グ 道 お け
た 人 を 日 ね レ を 供 て 私
ち こ を 光 上 イ を 従 、 は
に そ 分 光 上 の の 静 霧 兄
は 梨 け で つ っ の モ かに 降 や
す 本 け ら 黒 た 口 降 いた 滝 弟
ぐ 宮 れた 天 髭 。 夫 来 たい へ 日
わ 殿 髪 驚 絨 の 夫 来 たい へ 日
か 下 型 の コ 人 来 たい へ 日
っ 妃 髪 の コ 人 来 たい へ 日
た 殿 ま ト 、 当 来 たい へ 日
。 下 こ と 時 来 たい へ 日
(1 2) 同 粹 な よ そ お い の お
じ 宇 都 宮 に 棲 む

れ、日光小学校の代用教員をつとめていたもの、短期間で家に戻り、「文章世界」「新潮」に投書を続けていたが、ほどなくして投書家としての生活に別れを告げる決心をしていく。一家が宇都宮に移ったのは大正四年のころで、郡長を退職した父が日本赤十字支部主事として宇都宮に転じたことによるものであった。「梨本邸に県知事夫人や県庁の役人の妻たちがお招きを受ける日」があり、吉屋の母も「白襟紋付きの礼装で緊張して出かけた」。吉屋はこの頃、花盛りの時期に兄弟と日光へ出かけ、そこで初めて伊都子を目にしたと考えられる。次に確認できる伊都子との出会いは、昭和二十八年七月二十八日、川開きの集まりの席でのことだ（13）。その時の写真は、神奈川近代文学館開催の吉屋信子展の図録に掲載されており、「この頃すでに元梨本宮妃と面識を得ていた信子は、後に日記の拝借を願って、3年がかりで『香取夫人の生涯』を書き上げた」と書かれており、この時

点で既に何度か面識があったことがほのめかされて
 吉屋は伊都子から色紙も贈られていたようだ。図録に記
 載の「へたてなく／＼とけあふつとひ／＼うれしけれ
 二十とせを／＼むつひけるかな」と書かれた色紙の写真の
 横には「一九六八年」と書かれており、この昭和四十三年
 には吉屋が『香取夫人の生涯』を執筆してから六年後の
 ことにあたる。吉屋はこれらのことに関し、記録を残し
 ておらず、伊都子の側からも確認できないが、『香取夫人
 の生涯』執筆後にも二人の間に接触があったことの実
 は興味深い。川開きでの席の次に確認できる接
 続昭和二十八年のことであったと思われる。この接
 見は、昭和三十三年のことであつたと思われ。この接

のち、私の時代の日から年月が積み重なつた
 、この国の皇族は、秩父、高松、三笠の直宮

以外は、臣籍降下して、皇族でなくて梨本伊都子夫人であり、そしてすでに未亡人となっていていられた。
(14)

これはおそらく昭和三十三年十二月十三日の「土曜会」での席であろう。土曜会での接点は、小田部雄次氏の著書『梨本宮伊都子の日記 皇族妃の見た明治・大正・昭和』(小学館 一九九一年一月)によつて判明した。次の引用は小田部氏が翻刻した伊都子の日記である。

十一時過、車をさがして土曜会に出かける。寒いけれども終りの事として、わりににぎやかにて、もう
く正田美智子のうはさで、とてもにぎやか。(昭和
33・12・13)

土曜会とは、小田部氏の注によると「大映の永田雅一

れる。あるいは昭和三十七年に刊行された『香取夫人の生涯』の作者のことは、「私はその手記をお借りして読んだのはもう三年前になる」とあることから、昭和三十四年のこともであるとも考えられ、そこには一年の誤差があるが、吉屋が手記を目にしたのは昭和三十四年から三十五年にかけてのことであるといえよう。これは千代年譜の執筆開始時期とも近似しており、ほぼ間違いない。しかし昭和三十四年、三十五年は「土曜会」の二、三年後にあたりに、土曜会以降、果たして吉屋と伊都子との間にどのようになや取りがなされ、手記を「拝借」するに至ったのかについてはわかつていない。

伊都子の日記は明治三十二年一月一日から昭和五十二年六月まで、七十七年と六カ月間にわたるものである。

が、現在実際のものを目にすることはできない。資料的
なものとしては先述の小田部雄次『梨本宮伊都子の日記
皇族妃の見た明治・大正・昭和』があり、伊都子自身が
書いたものとして確認できるのは一九七五年に講談社よ
り出された『三代の天皇と私』である。
つまり、『香取夫人の生涯』を読むにあたって押さえる
べき資料は①吉屋の随筆「梨本宮伊都子の日記」(昭和三
十九年)②伊都子自身による自伝『三代の天皇と私』(昭
和五十年)③小田部雄次『梨本宮伊都子の日記 皇族妃の
見た明治・大正・昭和』(平成三年)の三点になる。
小田部氏以前に伊都子の日記を翻刻したものは管見の
限り見当たらない。小田部氏の著書が出版されたのは平
成三年のことであり、伊都子自身による『三代の天皇と
私』が出版されたのは昭和五十年のことである。つまり
吉屋は『香取夫人の生涯』執筆前に『三代の天皇と私』
を目にすることはできなかつた。そう考えると、次に生

じる疑問は吉屋が読んだ手記は小田部氏翻刻のものと同
 様のもののであつたのか、それとも別のものであつたのか、
 ということである。小田部氏の著書、『梨本宮伊都子の日
 記皇族妃の見た明治・大正・昭和』によると、伊都子
 の日記は全部で七冊あるとされ、以下の通りとなつてい
 る。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|----|---|----|---|---|---|----|---|---|---|---|---|---|---|---|--|
| 4 | 『 | 四 | 二 | 年 | 一 | 月 | 一 | 三 | 日 | から | 七 | 月 | 二 | 九 | 日 | まで | の | 欧 | 州 | 旅 | 行 | の | 記 | | |
| | 『 | 二 | 八 | 月 | 二 | 九 | 日 | まで | 。 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | 『 | 二 | 八 | 日 | よ | り | 八 | 月 | 二 | 九 | 日 | まで | 。 | 明 | 治 | 三 | 一 | 年 | 七 | 月 | 二 | 九 | 日 | よ | |
| | 『 | 十 | 四 | 日 | よ | り | 三 | 月 | 二 | 八 | 日 | まで | 。 | | | | | | | | | | | | |
| 2 | 『 | 九 | 日 | ま | で | の | 重 | 要 | 事 | 項 | を | 年 | 代 | 順 | に | 記 | 述 | し | た | も | の | 。 | | | |
| | 『 | 十 | 四 | 日 | よ | り | 三 | 月 | 二 | 八 | 日 | まで | 。 | 明 | 治 | 三 | 〇 | 年 | 二 | 月 | | | | | |
| 1 | 『 | 九 | 日 | ま | で | の | 重 | 要 | 事 | 項 | を | 年 | 代 | 順 | に | 記 | 述 | し | た | も | の | 。 | | | |
| | 『 | 永 | 代 | 日 | 記 | 』 | 明 | 治 | 二 | 五 | 年 | 七 | 月 | 九 | 日 | か | ら | 昭 | 和 | 十 | 八 | 年 | 三 | 月 | |

録。二冊。

『欧州及び滿韓旅行日記』

『欧州及滿韓旅行日記の追加 思ひ出る事どもさまざま』

5 『日露戦役に関する日記』日露戦争の記録。二冊。

明治三七年二月より一二月まで。

明治三八年一月より三九年七月まで。

6 『大震災之記』大正一二年九月一日の関東大震災の記

録。

7 『御即位の礼 諸儀式参列記』昭和三年一月の昭和

天皇即位式の記録。下書控。

この他、記録類として『戦役に関する記事』（日露戦争・

第一次世界大戦・滿州事変・日中戦争・太平洋戦争の記

録）や回想録として『結婚より五十年の思ひ出』（明治三

十三年十一月より昭和二十五年十二月までの回想録、五

冊）など、短歌、雑記類に至るまで、伊都子の手による書

物は数多くある。一方、吉屋が手にしたとされる手記は、
 「断片的にその過去の経歴や出来事をしたとされ、
 一篇の物語にはまとめがたいうらみがあつた」とされ、
 「墨の文字美しくしめるされた紙綴の五巻」とされ、
 る（15）。
 確認できず、唯一の手がかりは、先の随筆「梨本伊都子
 の日記」において「省略抜粋を許され、紹介する」とし
 ながらも大半であるが、中には吉屋の言葉で簡潔に内容を
 まとめたものもある。その日付を掛かり、小田部氏
 の翻刻と同じ日付の伊都子の日記を次に並べてみる。
 の引用は、とも明治三十一年十一月二十八日の日記で

(吉屋資料)

早朝、宮家よりの使者と偽装馬車さしまわされ儀
仗兵共に着、家中一同に見送られ門出、一生帰らぬ
邸と思うと胸ふさがる心地で馬車に乗る。鍋島家よ
り皇室に上るは有難きこと祖先の名を汚すまじく何
事も辛抱第一とかねて言われ、責任重大なること身
にしみ、そればかり思い詰めて宮中賢所に向う。

(小田部氏資料)

今日の吉日を以て、畏くも賢所大前に於て、守正
王殿下と伊都子は婚儀の式を行ふ。殿下は御束帯、
伊都子は五衣唐衣。委しき事は次第書にあり。
そも皇室婚家令定まりてより初めて、皇族第一番
の御婚儀、実に名誉此上なし。
十九年の長年月、親の御膝下に成長し、何の苦も
なく幸福なる生活を続け、夢の間に十九年は経ちた。

あゝ今日よりは皇室の人となり、世に立たねばならぬ身、思へば只心配のみ。
当日の朝は、いとも引しまりたる心地すれども、何となく心細り、一歩こゝを出づれば再び住家ならぬと思へば、遠くはなれるにはあらざれども、ものがなしく、一生の悦の日なれども、又涙の出づるをとどめあへず。皆々にいさみ立たれ、玄関に出づれば、歓迎として宮家より廻されたる美々しき御馬車、儀仗騎兵の旗も朝風になびきて、馬のいなゝきも勇ましく、あゝかゝる立派なる行列の主人公になり参内するかと思へば、さらに胸の動悸もやまず、夢の如く車上の人となり、門内に居ならば数十人の人々に見送られて出でた。

は 同日の日記であり、出来事などの記述内容は一致して
い るが、ところどころの言い回しには差異が見られる。

たとえれば吉屋版の一生帰らぬ邸と
地で「といいう表現は小田部氏版では「一歩こゝを
ば再び住家ならぬと思へば」となっている。馬車に
までの様子や、衣服についでなど、事実関係の詳細に記
そうと努めていゝ小田部版の日記に對し、吉屋のほうは
簡潔ながらも感情の揺れ動きを重視する文面になつてい
るといえるだろう。の
た伊都子の日記を見ていたところ、「おどおど」や
「ただだ」など、伊都子の日記によく登場するよう
言ひ回しが見られること、雑誌や新聞などの記事の
は知りえない情報などが、伊都子の日記の点から、伊
の手記を實際にしていることとは違ひないが、それ
の小田部氏が翻刻を行つた日記類とは別のものであ
ろうといふところであつた。伊都子は日々ついでに
とは別に、震災や戦時中など、トピックスごと
にその日記

をまとめなおして再編したりすることを好む、いわゆる「書き魔」であった。さらに『香取夫人の生涯』における「作者のことば」の、「断片的にその過去の経歴や出来事をしるされたもの」という言葉からもわかる通り、吉屋が手にした伊都子の手記とは、厳密にいうと日記ではなく、「日記以外何か」である可能性が高い。だが一方、吉屋が見たとする現物の所在については現在明らかになつていないのである。「文藝春秋」の該当号以前に伊都子の手記が公開されたという日記録は確認されておらず、小田部氏が翻刻した伊都子の日記以前に公開された唯一の伊都子の手記として、吉屋の随筆「梨本伊都子の日記」は価値あるものであり、梨本伊都子の手記の筆者である。梨本伊都子であったのか。

のちの梨本宮妃殿下となる鍋島伊都子は、明治十五年、
 イタリアの首都ローマで生まれた。父である直大はこの
 ときイタリア公使をつとめており、二年後に侯爵に叙せ
 られる佐賀藩最後の藩主であった。伊都子という名前は、
 直大が当時赴任していたのがイタリアの首都ローマであ
 ったことに由来する。鍋島家は明治二年、華族となり、
 十七年の華族令によって侯爵となるが、ここで華族につ
 いて少し触れておきたい。

華族の始まりは、明治二年六月十七日のことである。
 華族という言葉は個人ではなく家をさし、「戸主の妻子は
 もちろん、隠居した親、祖父母、曾祖父母、兄弟姉妹、
 叔父叔母、甥姪」なども、「おなじ戸籍にはいつているか
 ぎり」は華族「であつた。ただし、その戸籍から出て新た
 に家を立てた場合は家族から平民となる。しかし華族の
 家に養子にいつたり、華族と結婚した場合は華族のまま

族とあり、新しい家を建てても天皇の特旨という理由で華族は大きな二種類にわけられる。一つは「家柄を理由に華族とされた者」、もう一つは「国家への功績を理由に華族令公布された者」である。前者は三家をのぞいてすべ

てが公布以降に成立した。後者は三家をのぞいてすべ

い、伊都子の出身である鍋島家は侯爵といふ爵位を持つて

五つの爵位は、明治二年の華族制度の発生から十五年の

間、存在しなかつた。五つの爵位には、華族の戸主しか持て

ない。改正華族令によると、死刑、懲役の判決が確定し

た者は爵位を失うことになつており、その他にも華族の

体面を汚すようならな行爲があつたとき、宮内大臣が判断

合、天皇の勅許を得たうえで爵位を返上させるとした場

きたし、爵位を継ぐ資格のある者が、有爵者が死んでか
ら半年以内に家督相続を届け出なかつたときにも爵位は
失われた。その他、「品位を保つこと能はざるときは宮内
大臣を経て爵の返上を請願する」といいう自発的な爵位返
上もあつた。ここでいふ「品位を保てない」とは経済的
に苦しむといふことを意味し、はじめから財産に乏しか
つた元僧侶の華族などがこの理由で爵位を返上したのだ
といふ。(16)

伊都子がのちに嫁ぐこととなる梨本宮家であるが、戦
前は、秩父宮などの直宮(天皇の子や兄弟姉妹)を除き、
十五の宮家があつた。梨本宮はそのうちの一つである。
守正王が梨本宮家を継ぐことになつたのは明治十八年の
ことであり、もとと一代宮家であつたものを、朝彦親
王の建言によつて菊麿王がそのまま皇族として存続する
ことになつたといふいきさつがある。

伊都子は華族女学校在学中に梨本宮守正王との婚約が

成立し、明治三十三年、結婚に至る。つまり伊都子は侯爵令嬢から皇族妃へと転身を果たしたわけである。それは、「庶民から見れば、皇族も華族も同じ「雲の上」としか見えなかつたが」、「華族にとつてはまたさらに「雲の上」である」とであつた（17）。その時の気持ちを、伊都子は自身の言葉で次のように記している。

「このたび、梨本宮守正王殿下の妃として、侯爵島直大の次女伊都子との縁組み、本日勅許あらせられました」
「ありがたく拝受いたします」
「それは一言一句間違いのない厳かな儀式に思いました。私は頭を垂れたまま、緊張に膝が小さきみに震えていました。宮内大臣は要件のみお立ち、あと、はなにも語らず緊張した顔つきそのままお立ちになり、馬車の音ばかりが私の耳に残つたのです。父上は直、

ちに参内し、御礼を言上するのでした。それはすべて私から遠い所で、着々と進められていたのです。
(18)

伊都子が初めて守正王と対面したのは、婚約後三年目のことであつた。「なんにも知らない見も知らずの方と話が決まるなんて、まるで昔の人質ですわね」と母親に言つた伊都子が「そんな恐れ多いことをいうものではありません」と厳しくたしなめられたというエピソードがある。

伊都子に限らず、当時の皇族は多くの少女雑誌、婦人雑誌のグラビアに取り上げられた。特に、「婦人之友」「婦人公論」「主婦之友」に先駆けて出された「婦人画報」は、多くの皇室関係の写真を掲載し、伊都子も度々登場している。「婦人画報」は国木田独歩編集長のもと、明治三十八年七月に創刊された。前身が日本初のグラフィック誌「東洋画報」(明治三十六年三月創刊)であり、その後

「近時画報」(明治三十六年九月)と変え、グラビアを多用した雑誌を刊行していたが、売り上げの低下とも「婦人画報」と名を改め、女性の活動や教育の向上を図る雑誌を目指していった(19)。
「婦人画報」は創刊当時、紙面の半分が画報、半分は読物に分かれていた。写真の多くは皇室関係で占められる。それが大正八年頃まで続く。大正十四年には読物ペー
ジが充実し、テーマごとに分類されるようになる。大正十五年
正末期からは皇室関係の写真は急激に減り始め、大正十五
年四月には「画報」ペー
と名称変更になった。伊都子の写真は、明治三十八年七
月の創刊号から既に確認できる。一年に一度のペー
出される増刊号のうち「皇族画報」として出される号は、
前半分に各皇族のグラビアを掲載し、後半部分で各宮
家について解説ペー
動や教育の向上を目指した雑誌のグラビアが皇族活

関係の写真で占められていたという事実は、皇族妃が身近な憧れの女性として眼差されていたことを示している。今回調査した日本近代文学館所蔵の「婦人画報」は、皇族妃のグラビアページが切り取られて確認できない号が多くあった。伊都子の娘である規子女王殿下に対する関心も高く、大正十四年八月の写真は、「規子女王殿下の御写生 規子女王殿下の日常御生活(一)」(スポーツウーマンとして)の規子女王殿下の日常御生活(一)「スポーツウーマン(二)」であり、編集後記においても入手した写真の貴重さが強調されているが、すべて切り取られ、確認することはできなかつた。

梨本宮妃としての伊都子を特徴づけるものとして挙げられるのは、何と云っても夫に伴われて行った欧州歴訪である。明治三十六年、守正王は一回目のフランス陸軍研究のために留学する。明治三十七年には日露間に戦争勃発し、日露戦争開戦前に帰国することになるが、終

戦後の明治三十九年に再度渡仏し、フランスの陸軍士官
 学校の留学する。明治四十二年に三年弱の留学を終えた。西
 正に伴われ、明治四十二年に欧州歴訪へと旅立った。フ
 欧各王室との親善目的とし、約半年間にわたってフロ
 シンスペイン、モナコ、イタリア、オーストリア、スイ
 スを巡つている。この洋行は、皇室外交の始めと言われ
 ていられる。この伊都子は明治四十二年一月十三日に
 横浜から乗った日本郵船の「賀茂丸」に乗り、約五十日
 かけてマルセイユに到着した。この時同じ船に乗り合
 せたのが菊池幽芳である。吉屋は随筆「梨本伊都子の日
 記」において、幽芳が伊都子と同じ船に乗ったことを知
 り羨望の眼差しを送っている（20）。
 菊池幽芳が渡仏したのは明治四十一年一月のことであ
 り、二年半の滞在の後、明治四十三年一月十日伊都子
 が欧州へ出航したのには明治四十二年一月十三日のこと
 が

あり、イギリスなど各国王室を訪問、のちシベリア鉄道で満洲・韓国を経由して帰国している。幽芳が語る伊都子との接見の様子は、明治四十二年三月に記したとされる、「加茂丸より」と題された紀行文に示されている。

十時頃甲板に出て居ると、殿下が櫻井夫人と「乳姉妹」を一冊づゝ抱へてお出でになる。御会釈申上げると籐の榻におつきになつて、美しく笑ませられ、「乳姉妹を持つて来ました」と、仰しやるから、「それは何よりの光栄でございます」と、仰し「と申上げる。「前編の方は私は読んで了つて、櫻井が今見かけて居る、大層面白いわ」と、仰しやつて更に「殿下はもう御覧になつたが私は新聞で飛々に見たわけで：纏つては読んだ事がなかつたから」とのお詞である。殿下と仰しやるのは守正王殿下の御事であらうと恐懼する。(21)

彦「梨本依都子妃収集繪葉書に関する予備的考察」(「帝
 た風刺繪葉書が中心に展示されたが、山田俊幸、安田政
 のぼる。展覧会の趣旨に沿って日露戦争を描い
 れる繪葉書が展示された。伊都子の収集物は五千点にも
 00年前「展では、西欧各国を歴訪した際に集めたとさ
 館「梨本宮妃殿下コレクション」秘蔵・青梅ききの語る1
 日「から十月三十日に開催された「秘蔵・青梅ききの博
 書に對し、その価値が高まつている。平成十七年十月一
 でき、伊都子に關しては、諸外国を巡つて集めた繪葉
 原作による「徳川の夫人たちの芝居」という記述が確認
 氏著書に「おいでも昭和四十二年一月六日の日記に吉屋
 都子は小説や芝居にも関心があつたようである、小田部
 姉妹』であり、吉屋の回想とは異なつて、先の日記に、
 こ「こで話題になつて、いるのは『己が罪』ではなく、『乳

塚山学院大学研究論集「文学部」 平成二十年十二月二十日）ではその他の所蔵品についても資料的観点から考察している。日露戦争を描いた風刺絵葉書が多いもの、他には風景絵葉書、災害絵葉書、日露戦争従軍兵からの慰問袋に対する礼状葉書、一族からの来信絵葉書がある。中でも日露戦争関係の絵葉書が多いことについては、守正が従軍していたことに加え、伊都子自身が赤十字活動に参与して慰問袋の作成や傷病兵慰問を積極的に行なつたことが理由として指摘されている。風景葉書には鍋島家の写真絵葉書のほか、那須温泉や伊香保、二荒山神社などの各地の絵葉書、災害絵葉書では明治四十二年八月の江濃大地震の写真絵葉書などがあつたという。これらが資料は現在青梅きもの博物館が管理している。戦後臣籍降下した旧梨本宮家が衣装などを保管維持すること、が困難になり、宮家ゆかりの衣装を同館に寄贈したことにより、それに付随した伊都子妃関連の雑物のうち絵

葉書コレクションシヨンがあつたのだという。三代の天皇の時
代を生きた伊都子の所蔵品は今後も調査の余地が大いに
あるといえるだろう。この資料が手放されることになつたのも、戦後行
われた「臣籍降下」によつて生活環境が著しく変化した
ことによる。吉屋が手にした伊都子の手記の中で「ついで
感傷に打たれて涙ぐんだのは、この臣籍降下の日のお
別れの宴の記述の部分であり、「その一片の感傷」が、作
品を書かせる動機になつたと述べられてゐる(22)。ま
ずは吉屋が読んだとされる、随筆「梨本伊都子の手記」
から該当部分の日記を引用してみる。

昭和二十二年十月十八日。
すでにさだまりし皇族降下の日。皇族として最後
の参内、宮中にて両陛下に朝見の儀、別室にて天盃
を賜わる。午後六時赤坂離宮に一同召されお別れの

宴を賜わる。
「私としては少しも今までと変ることなく以前同様
に思つておるから」と陛下のお言葉あり、皇族長老
としましてわが宮立たれて「皇室の御温情に銘じ忘れ
ません」と申し上ぐ。ただ一同しずかに言葉もなく
しめやかなり。一生のうちにかかる大いなる大打撃
あるまじ、これは一般の人々には想像もつかぬこと
であるう。

次に、小田部氏翻刻による伊都子の日記の該部分に
ついで見てみたい。以下に引用する。

朝、朝見式に付、三陛下より蒔絵・御文台・硯箱・
料紙箱を賜はる。

天皇陛下には、食事中、わざわざ此度、臣籍に降下
になるとも、皇室との交際は、ちつともかはらぬ。
どうか今後も、時々、御したしく参られて、御歓談
のほど、又、御家御発展の事をいのる、といふのみ
の御言葉を賜はり、シャンプンの盃を上げさせらる。

(昭和22・10・19)

実はこれら二つは日付が一日ずれている。文章の点で
二つを比較してみると、まず吉屋版の会話文には鍵括弧
が付されておあり、「一生のうちにかかるといなる大打撃あ
るまじ」という一文が、伊都子の動揺を最もあらわして
いるといえるが、小田部版では伊都子が事実のみを記す
ことに徹しているような印象を受ける。この両者の違い
は、これらの文章が書かれた順番に関係すると思われる。
つまり小田部氏版の日記を最初に書き、それを読み返し
ながら、当時を回想する形で、あとから吉屋版の手記を記

述した時に、感情が込められたのである。のちに書かれた伊都子による自伝『三代の天皇と私』は、まさに過去の回想する形で、当時の感情をあとから付け加えながら記述する形式をとっており、感情の面では日記よりもしろ詳細に当時のことが回想されていくか、逆の手記のこから、時間が遠ざかれば遠ざかるほど、逆に手記には生々しい感情が加えられていくこと、ほど、これに踏まえたい。吉屋が『香取夫人の生涯』で描いた当該場面を引用する。

一同食卓に集うと、陛下のお言葉があった。皇族の籍を離れ一般の世に出られ、私も同様にあなただけを思っている、今までと変ることなく以前同様に出る。少しも今までと変ることなく以前同様に出る。来てほし、今後といえども変らずおりおは

このお言葉の途中、わたくしは不覚にも睫毛に

溢れるものをおぼえて差しうつむいた。あれほど妃の名を重荷とし束縛を感じ皇族の不自由さを心に

(中略)

こった身のいまさらなんの涙であつたらう。：：。
かくてのち――わたたくしたちは国家の象徴の天皇
にお別れしてしずかにしずかに退出した。秋の空の
星の下に都会の騒音がひびく巷に、今宵からこの巷
に一平民として生きてゆく宮とわたたくし！

田部氏版の日記で書かれた「大いなる大打撃」といっ
ような強い表現が用いられることにはない。「不覚にも」
してしまつた涙からは、妃の名を負担に思つていた自ら
が、よもや流すまいと思つていた涙を流すことでの、宮家
と、しての生活から解放されてしまふへの悲しみに
付く戸惑いが表現されてゐる。吉屋は比井盈子という人

物を創造するにあたって、ここで「不覚にも」という一語を書きこむことで、宮妃としての盈子の持つ複雑さを表現したといえる。それは、吉屋が目にした手記の中に、伊都子が漏らした本心を感じ取った結果であつたかもしれない。昭和十二年のことであつたが、それ以前より、皇族たちはこの「臣籍降下」について触れておく。臣籍降下は昭和十二年のことであつたが、それ以前より、皇族たちはこの間に自ら進んで「降下」に賛同するものたちがいた。以下は伊都子による記述である。

弟宮の東久邇宮さまは、敗戦と共に「皇族も敗戦の責任を感じずなら、臣下に下るべきだ」という意見を出されておられました。だがこのたびのGHQの指令という絶対的命令に対しては、皇族の衝撃は大きかったのです。皇族の臣籍降下といつても、三親王と十一宮家のどこに線を引くかが問題でした。

結局は秩父宮、高松宮、三笠宮の三親王以外は降下と決定したのです。(23)

この日に「朝日新聞」に確認できる。インタビューの中で「臣籍降下の御決意を定められた理由は」とたずねられ「東久邇宮は、「私がかうして皇族として何の不自由もなからず来て来たられたことは偏に陛下と国家のおかけである」ところが、戦争はかういふ結末になつた、これについて私は私の道徳的責任を明らかにすることを決心したのものである」と答えている。戦時中、皇族は陛下にお眼にかかつても、時候の御挨拶を申上げるのみで、時局について意見を申し上げることは禁じられていた、したがら、自らの道徳的責任に責めを負い、「さうしなげれば、陛下に対し奉つても、また国家に対してしても申訳がたたないのだ」とし

て いる。昭和二一年十一月二十四日の「朝日新聞」の記
 事では、改定皇室典範の内容によつて、皇族の範囲が狭
 まつたことがわかる。爵位を剥奪された華族たちは、皇
 族費の削減により金銭面において窮地に立たされること
 となつたため、生活保障のため金が支払われることと
 なつた。敗戦後、GHQと日本政府によつて施行された
 財産税こそ、皇族、華族たちを最も苦しめるものであつた
 ため、戦後の徴収は無条件降伏により屈服した日本に
 対する戦後の一連の弱体化政策として、GHQ及び日本
 政府によつて、財閥解体、農地改革とも引用された。
 のである。再び『三代の天皇と私』からの引用である。

昭和二二年になりますと、GHQから「皇族及
 び元皇族も財産税を納めよ」という指令が出されま

垣間見え、梨本宮家については一侍従武官から乗り込ん
だ清家氏が指揮しているようだが、殿下自らもなかなか
数字には明るいそうだとさされている。

皇族として残られる三直宮家には年々支給される定
額の歳費、他の十一宮家には降下の際する“退職手
当”がある。一歳費定額と、退職手当額は近く議会上に
提出される。「皇室経済法施行法案」の通過によつて
決るが、だいたい一歳費は三直宮家あわせて七十五万円
退職手当は十一宮家の合計約四千八百万円にのぼる
ようだ。

この日の記事には「降下の時機については新憲法実施
と同時に「昭
和二十二年五月一日、九月十七日、十月九日の記事は、昭

いづれも皇族会議についての記事である。最後の皇室会議が三十日午後二時半から宮中で開かれ、天皇陛下出席のもとに高松宮殿下をはじめとする宮家が参集し、「皇室令および付属法令廃止の件」ほか一件を可決、同三時散会した（五月一日）。十六日には枢密院会議室で「皇室会議」の皇族側議員の選挙が行われた。議員を決定し、近く行われる皇籍離脱問題その他皇室に関することが決められる、とある（五月一日）。翌月には八日に行なわれるはずだった皇室会議が延期。そこでは十一日宮家の皇籍離脱問題を話し合う予定であった（十月九日）。十月十二日の記事では、延期されていた会議が十三日に行なわれることになり、この会議を経た十四日から、十一宮家は正式に皇籍離脱を果たすこととなったようだ（十月十二日）。それを受けて、翌日の新聞では十一宮家が離籍する様を取り上げており、守正、伊都子の名前も確認できる（十月十四日）。十月十九日の記事では、陛下

に別れを告げる宮家の様子が写真とともに掲載される。次の引用は、昭和二十二年十月十九日、十四日に行われたお別れの会の様子である。

去る十四日皇族籍を離れた元宮様一同は十八日午後一時宮中で天皇皇后両陛下にお別れのあいさつをし、同三時、赤坂離宮で皇太后陛下にもごあいさつをした、午後六時から同離宮で両陛下、皇太后陛下をはじめめ秩父、高松、三笠三宮殿下などおそろいでお別れの宴会があつた。写真には赤坂離宮で顔をそろえた元宮様

こうして爵位を失つた梨本宮家であつたが、昭和二十年一月に守正が死去し、その遺言によつて、皇族最初、火葬で葬儀が執り行われた。二人の娘も嫁いでいるため、伊都子は養子をもらうこと、梨本家を存続させること

とを考える。「宮様の血縁の方を」という願いから、久邇家の分家である龍田徳彦（多嘉王の三男）、正子（現皇太后の兄、朝融長女）夫婦を養子に迎えたのち、昭和五十一年、九十五歳の生涯を閉じた。

吉屋の描いた『香取夫人の生涯』は、伊都子の手記を下地にしながらも、伊都子とは重ならない部分が多くある作品である。それは一つにこの作品の持つ奇妙な構造と、盈子の人物設定にあるといえるだろう。『香取夫人の生涯』とはどのような物語であるのか、以下にみていく。

4 『香取夫人の生涯』——盈子と伊都子

『香取夫人の生涯』は昭和三十七年一月、新潮社より書き下ろし作品として出版された。第十二篇からなる、一人称小説である。

物語の冒頭は「明治のという御代の終わった時」、「やっ」と就学年齢に達し、学習院女学部の当時の小学校に入っ

たばかりの幼女であつた比井盈子の記憶から始まる。盈子は生誕後間もなく父を失ひ、未亡人である母、茂登子とわずかな使用人とともに母の実家に住んでゐる。盈子に兄弟はなく、爵位を継ぐ者がないたため、母の実家の那智伯爵家の三男を養嗣子に迎えてゐる。本書は、華族として過ごした少女期、宮妃となつてからの生活、臣籍降下後の人生の大きく三つに分けられるが、盈子の生涯の裏には、三人の女たちの物語がある。そのうち一人、伊豆倉妙子は盈子と同じ学校に通う上級生であり、盈子に「愛の目覚めを与え心にうるおいと情感を生ませた人生の最初の尊き導者」であつた。盈子は「事業の失敗により華族の地位を命じられたこと、父の事務の妙子は学校を去る。数年のち宮妃となつた。たゞ、宮と妙子の忘れ形見と思しき一人の少女に出会う。北海道旅行で、

家の財政援助のために北海道の鯉成金の老主人の後添いに嫁ぐ」という、まるで「陳腐な通俗小説の筋そのもの」のような妙子のなりゆきに思いを馳せるが、意外な形で知らされた妙子のその後には、盈子の心を揺り動かさずにはいられない出来事として残る。

母が幹事を務める上流婦人団体主催の慈善市に出品した押絵が縁で、香取宮妃殿下の眼に止まり、皇族へと嫁ぐこととなった盈子にとって、最も大きな存在となったのは義母である母宮の存在である。京都旅行の帰り、母子は奥老女である玉尾から心無い告げ口をされるが、母宮は「お氣持を痛めてはなりません、わたくしは宮の母、また妃のあなた之母でございませぬ、わたくしはどんなに（母）というものになりたかかったか……こころ、心だけで（母）になりたいと切ないほど思っておりました」と慰める。

盈子は母宮の「ついに石女でいらつした悲劇」を思い、

「（こころの母）にとせめてもの望まるその思いが、
生さぬ仲の自分へも注がれることを幸運そのものと思う。
だが、時代が戦争へと突き進むにしたがつて生じた、母
宮の精神異常が、二人の距離を隔て始める。母宮を連れ
て医師とともに伊豆へと向かった盈子は、母宮が「怪
老養性痴呆」という「老人期の精神病」を患ったことを
知る。付き添いの医師である青年医学士、庄司治にかつ
ての藤生晋の佛を見た盈子は、さながら恋心のようなの
ほのかなある好意を抱いている自分に気付く。だがその
恋心は治が軍医となつて戦地へ赴くことで絶たれてしま
う。

母宮の死後、盈子は邸を訪れた伯父から、実母である
茂登子と藤生晋がひそかに情を通じ合つていたことを聞
かされ衝撃を受けるが、母が憐い恋ながら「女のよろこ
びと悲しみ」を味わつて逝つたことを娘としてせめて「そ
れでよかつた」と思う。かつたの母と同じ年へと近づい

た時、盈子は初めて茂登子を理解することができるので、あ。良人と二人きりの生活になつた盈子は、裏山の林で見かけた椎茸栽培をきっかけに、算盤を覚え、運転免許を取得するまでに簿記の書き方や算盤を覚え、方を振返つてお生きた数冊のノ。物語は、盈子が来し方を振り返つてお生きた数冊の。文字を書き付けてける場面では、お生きた数冊の。以上が大まかなあらすじであるが、本作において特徴的なのは、伊都子の手記をもとに、盈子の書いたとして、う。この同時、伊都子の中人と、記述は、中何度か登場する。が、その一つは、次に引用する、盈子が宮家に嫁ぐ直前、例として引き合いに出される、伊都子の結婚に関する描写である。

明治三十三年五月に時の皇太子（のちの大正天皇）御成
 婚式は宮中賢所大前で行なわれると定められて以来、
 翌三十三年五月に時の皇太子（のちの大正天皇）御成
 婚の儀式もこの新令によりて行なわれ、また皇族と
 しての賢所大前挙式の第一号は同年十月の梨本宮御
 婚儀からだったなどと掌典職の方からいとおごそか
 に事こまかに教えられ、それだけでも重圧感
 を覚えて身体がこわばつてしまふ。

この記述を始めとし、梨本宮家に関しては①伊勢神宮
 への参拝、②李王家に嫁いだ方子、③戦犯として巢鴨の
 留置所に捉えられた守正王、④臣籍降下の場面でのスピ
 ーチ、⑤守正王の死去、⑥計六ヶ所確認できる。吉屋と
 伊都子は何度か面識があつたし、本作執筆時、伊都子は
 八十一歳であつた。本作を純粋な伊都子の評伝作品とは
 しなかつた理由とし、単行本刊行時に手記の持ち主

を明かさなかつたことを考へても、やはりそれは伊都子への配慮であつたのであろう。吉屋は盈子を創造するにあたり、次の二点において、伊都子との差異を見せている。そのうちの一つは、盈子に留学の夢を断たせたことである。盈子の抱く海外への憧れは、比井家に住む藤生晋という一人の青年によつてもたらされる。晋は比井家の祖先代々の藩主の典医の家系の孤児で、比井家から学資の補助を得て学校に通ひ、将来は大学の医科を志望している若者である。晋はのちに非合法の共産党の党外協力者として特高に檢舉されることになり、盈子に「唯一の他人の青年」であり、晋が手渡した一冊の本が、盈子の海外への夢を日覚めさせるきっかけとなる。『愉しき思い出』は、大正四年五月、春秋社書店より刊行された。『愉しき思い出』は、

大学に渡り、心理学を修めた原口鶴子によって綴られた五年間の留学経験記である。鶴子の生涯については、本問道子「教育心理学者…原口鶴子の軌跡」(「心理学史・心理学論」二〇一一年十一月)に詳しい。原口鶴子、旧姓新井つるは、明治十九年、現在の静岡県富岡市で生まれた。鶴子は日本における心理学の基礎を築いた心理学者、松木亦太郎に影響され、心理学を志す。女子大学を卒業した鶴子は、明治四十年六月、アメリカ、ニューヨークにあるロンビア大学テイーチャーズ・カレッジのソートダイクのもとに留学するべく、横浜港を発つ。大正元年、帰国した鶴子は日本女性で初めてのドクター・オブ・フィロソフィーとして好意的に迎えられた。長子を出産後、夫も留学から帰国し、公私ともに充実した生活を送ったが、大正四年、二十九歳という若さで病死する。原口鶴子といえは、先駆的な女性心理学者として取り上げられ、「アメリカ女性に対する観察の鋭さ、視

断にるびあるがの子現てもの出点
ちよ宮つありこら女は二さのあ研『の
切っとのけ、ととも児は二される海ある究
らてもつら二は流産授かっ婚盈子不の
れてたなれ人はい。てしまいる。一
しまさりを。それぬ妻とい共通点によつて
うれた深めこのとが結果的に同士の結
のた夫婦の関係性は、女の突如女勤
である。宮が遠方の軍港勤務とな
。宮が遠方の軍港勤務とな

とい
う現
実が
盈子
を苦
しめ
る。
吉屋
はこ
の盈
子の
苦悩
を、

強固な決意の一方、これまで皇族に離婚の例がない
宮家に去ると！
に引取らるるなら、わたくしはその時、いさぎよく
は妃でなくとも宮を父とす王子殿下とし、か、当宮家
を調えることとは絶対拒否すると――しかし、生母
性の誕生だ、子を妃に拒否すると――しかし、生母
性たえど、このように、事態を生じようとも、よその女

盈子は次のように決意する。
「ならばそれがよかえつて人の道に叶うと思われ、
りましようとも、宮と妃が睦まじく愉しく一代お過しな
対し、母宮は「当香取宮家が世子なく後々当家廃止とな
盈子は近く宮の子が誕生することを知らされる。それ
つたことを幸いとしたり、世話係の玉尾の策略によつて、

「軍港でのお子は女の子のお児でした、そのままよその子に
つかわしましたそうなら」という母宮の報告によつて「何
もかもすんだこと」として描くことで解決している。こ
こで男児を出生させ、盈子を去らせることは一つの選択
であつたにも関わらず、吉屋は生れて来る子供を女兒に
するこゝとで盈子の苦悩を回避させた。この物語が特定の
人物をモデルにしたわけではないことを敢えて断りなが
らも、そこまで描き切れなかつたことは、様々な制約上
やむを得ぬ一方、吉屋の限界であつたともいえるだろう。
だが、吉屋は次の場面を書くことによつて、妻の抵抗を
表現してみせる。

性行為の許される男の特権を意識してさらにセック
の女を抱き今宵は妻を抱ける男性がそのわがままな
しでも素直になれず、こじれてしまった。昨夜は外
けれども素直になれず、こじれてしまった。昨夜は外
けれども素直になれず、こじれてしまった。昨夜は外
けれども素直になれず、こじれてしまった。昨夜は外

スへの悦樂を増進させるとのか……その男の慾ばりに
わたたくしは屈伏したくない、反抗心、あの玉尾の報
告以来の苦惱のかたまりは爆発せずにはいられなかつた。

軍港勤務から海軍省へ出仕になり帰京した宮は、その
夜久しぶりで金子と夜を過ぎす。「なんのこだわりもなく
妻の身体を求めようとする良人に、金子は「良人を拒む
妻」となるのである。この妻の振舞いは、吉屋の戦前
の代表作の一つ、『良人の貞操』において似たような場
面として描かれていゝ。良人が身ごもらせたい、自分の親
友である加代の子供を引き取ることを決意した邦子は、
加代が妊娠中であることを理由に、良人の性交渉の誘い
を断つていゝ。良人である信也は、妻の言動に自らを恥
じるのである。

げ 蓋 語 で へ
 う が っ は の こ
 っ 左 て 、 の こ
 た に いる 翌 情 で
 の 右 の 日 の 新 は
 は 、 そ 翌 朝 屋 に 良
 、 そ の 壺 寝 室 の 描 展 開 を 生 む が 、 『 香 取 夫 人 の 生 涯 』
 も 宮 が こ ろ が っ て ー い た 。 「 こ の 香 炉 を な
 か わ た く し か そ れ は ひ と び と の 想
 て 握 っ た 。
 い 事 に 男 が 振 舞 う と し た ら ； ； 信 也 は 妻 の 手 を 改 め
 け る の だ ー ー そ の 身 勝 手 な 自 由 の 許 さ れ る の を 、 い
 っ て 平 然 と 銀 座 が 歩 け る ば か り か 、 他 の 女 性 を も 抱
 た 。 正 しい 潔 癖 と 同 情 を 持 つ 、 清 純 さ と 正 義 観 に 打 た れ
 孤 獨 に 置 か れ て いる 同 性 へ の 、 妻 の そ ん な に ま で 、
 彼 は 恥 じ た 。 わ が 良 人 の 子 を 妊 も り 、 辛 い 境 遇 に

像に任せよう」としながらも、「さすがにあられもない昨夜の閨房の出来事」に羞恥に打たれる盈子の様子がそれ以上描写されることはない。

『香取夫人の生涯』は一人称小説である。伊都子の眼に映る良人は、「いわゆる貴族社会の男性中心で（腹は借物と）いう割切り方で宮家の王子としてお育ちになった」男であり、子を生まぬのであれば他の宮家の例を黙認せよといわんばかりの玉尾の態度に、「寂寞として宮家のなかで一人切り離された（孤独）の気」がする。『香取夫人の生涯』において吉屋が描こうとしたのは「女の悲しみ、妻の受難に出会ったわたくしが「妃という名と境遇の手枷足枷に幾重にもからまれてもがかねばならぬ」姿であつた。

吉屋はのちに「それらの人の心の中に感情を移入し、及ばずながら一つ一つの人間像を描き上げるという数年間の仕事で、今度の仕事への基礎になつたような気がい

たします（25）と述べているが、伊都子によつて貸し
与えられた資料から盈子を再構築するためには物語の視
点を一人の人物に固定することによつて、その人物から
見た世界観を作り上げるといふ手法が適していると考え
たのである。それには、舞台を現代ではなく、大奥や平
家物語の世界観に移す導入として必要な手続きであつた
のである。吉屋が本作を書くことになつたのは、もちろ
んの貴重資料に恵まれたことがきつかけではあるが、そ
の資料が女性の興味を引いたであろうことは間違いない。
ことが吉屋の興味を引いたであろうことは間違いない。
既に別の書き手によつて構築された世界を再構築しないお
すこと、それは吉屋の仕事の中でも『香取夫人の生涯』初
でしかなしえなかつたことである。その過程があつて初
めて吉屋は『徳川の夫人たち』への自信を得たのではな
かつたか。吉屋の『徳川の夫人たち』への自信を得たのではな
その後の吉屋の仕事は昭和四十一年に『徳川の夫人たち

ち』、翌年に『続徳川の夫人たち』、四十四年の『徳川秀忠の妻』があり、四十五年には『女人平家』へと続き、現代を舞台にした物語へと帰ってくることはなかった。そのことは吉屋の絶筆となった一枚の原稿が物語っている。昭和四十八年七月十一日、吉屋は直腸がんでこの世を去る。その後、千代が引出しから発見した書きかけの草稿、原稿用紙の一行目に書かれた文字は「太閤北政所」であった。さらに二行同じ文字が続いたあと、「松の枝が眼の前に見えた。湖水は一杉の」というところまで書いて終わっている。母となれぬ妻は、吉屋作品において通底するテーマであるといってもよい。それは絶筆となった原稿が淀君ではなく、敢えて太閤北政所を選んで始まっていることからわかる。

本論文では、準備期間の関係もあり、吉屋の歴史小説まで着手することは叶わなかった。吉屋の古典回帰ともいえる晩年の仕事の数々は、現代を舞台として書いた小説

説と決して切り離すことはできない。『徳川の夫人たち』
を書き終えた吉屋が口にしたら、「日本女性史のためにも有
意義だった」（26）という言葉に、現代小説と歴史小説
との連続性が示されていくからである。今後は、歴史小
説に取り組みながら、書誌的研究についても体系化をは
かり、研究の充実につとめたい。

注

- (1) (2) 吉屋信子『自伝的女流文壇史』(中央公論社 昭和三十一年十月)
- (3) (4) 吉屋信子『底のぬけた柄杓』あとがき(新潮社 昭和三十一年七月)
- (5) 吉屋信子『ある女人像』(新潮社 昭和四十一年十二月)
- (6) (7) (8) 「ときの声を終えて」(「読売新聞」 昭和四十一年四月二十四日)
- (9) 『吉屋信子全集』十二巻 年譜(朝日新聞社 昭和五十一年一月)
- (10) 吉屋信子『香取夫人の生涯』(昭和三十一年一月 新潮社)
- (11) 吉屋信子『随筆 私の見た美人たち』(梨本伊都子の日記) (昭和四十四年十一月 読売新聞社)
- (12) 吉屋信子『梨本伊都子の日記』(「文藝春秋」 昭和三十一年六月号)

- (13) 『誕生一一〇年 吉屋信子展―女たちをめぐる物語』(県立神奈川近代文学館 平成十八年四月)
- (14) (12)に同じ。
- (15) (10)に同じ。
- (16) 浅見雅男 『華族たちの近代』(N T T出版 一九九九年十月)
- (17) 『日本の肖像…旧皇族・華族秘蔵アルバム 第二卷 閑院家・東久邇宮家・梨本家』(毎日新聞社 平成三年二月)
- (18) 梨本伊都子 『三代の天皇と私』(講談社 昭和六十年十二月)
- (19) 監修与那覇恵子 『書誌書目シリーズ 戦前期四大婦人雑誌目次集成Ⅲ 婦人画報』十卷(ゆまに書房 平成十六年八月)、巻末解説
- (20) それは―幽芳がかつてフランス留学のため渡仏の際、船に梨本宮妃殿下がいらっして、妃殿下の

御愛読なされた小説『己が罪』の作者が同船と聞かれて、その作者を御引見、いろいろ御下問の榮に浴したという自伝を飾る一節に「まあすてき」と思ったからである。(吉屋信子『私の見た美人たち』「梨本伊都子の日記」読売新聞社 昭和四十四年十一月)

(2 1) 『幽芳全集』十三卷「加茂丸より」(国民図書株式会社 大正十四年二月)

(2 2) (1 0) に同じ。

(2 3) (1 8) に同じ。

(2 4) 本間道子「教育心理学者…原口鶴子の軌跡」(「心理学史・心理学論」二〇一一年十一月)

(2 5) 「新刊ニュース」(昭和四十一年十二月一日)

(2 6) 「朝日新聞」(昭和四十三年四月八日)